IS 四神の少女達

GAU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　四神の少女達

【Ｎコード】
Ｎ９１１８Ｔ

【作者名】
ＧＡＵ

【あらすじ】
女性にしか扱えない世界最強のパワードスーツ【ＩＳ】。男の身でありながらそれを動かしてしまった織斑一夏は、ＩＳ操者養成校ＩＳ学園に入れられてしまった……。
原作に存在しない、四人の少女が追加投入され、一夏ハーレムは大混乱に？
そんな話になる予定……。予定は未定で決定じゃないからきっと大丈夫♪
そんな感じで、ＩＳの二次創作、ＧＯ！！です♪

第一話（前書き）

息抜きを兼ねてちびちび書き溜めてました。
たぶんこの先もそんな感じでいきます。

第一話

「やっほー束ちん♪　作業ははかどってるかにゃあ？」

「やあやあ、しょーちゃん元気そうだねぇ♪　束さんはいつでもどこでも全力全壊だよー♪」

「んでもって、これがほーちゃんがエロカッコ良く戦うためのＩＳ？」

「うんうん♪　束さんの、可愛い可愛い箒ちゃんがカッコ良く戦うＩＳなんだよ♪」

「なるほどなるへそ、即時対応万能機、第四世代だね」

「そーだよー束さんの可愛い可愛い箒ちゃんは、最強のＩＳでカッコ良く戦うんだからぁ♪」

「全身からエネルギーを放出しながら攻防機動に利用っと」

「ぶうぶうあんまり見ちゃだめだよ～内緒にして箒ちゃん驚かすんだから」

「ぬはは、メンゴメンゴ♪　代わりにあたしからプレゼント♪　ほい♪」

「何これ、【展開装甲】？　効率悪くない？」

「ちっちっち。判ってないなあ束ちんは。いい？　最初っから最大出力じゃ面白くないでしょ？　ピンチにパワーアップはお約束よ？　装甲が、こうガバァッと開いて、謎のエネルギーを無駄に放出しながら、『ここからは、私のターンだっ！！』って感じで、くあっ萌えるっ！！」

「相変わらず変態さんだねえ、しょーちゃんは。鼻血出てるよ～？」

「おっといけない。まあ、そんな感じでほーちゃんがパワーアップ！　だいたい二倍くらいに！　んでもって敵をバサーッとやっつけ

んのよ。良くない？」
「……」
「束ちん、ヨダレヨダレ」
「おおっと、あんまりにも脳内箒ちゃんがカッコ可愛すぎてトリップしちゃったよ」
「あんたも十分淑女の素質あるわねえ」
「なんのこと？　でも、うんうん、いいねいいねえ♪　束さんの脳内箒ちゃん、すんごくカッコ可愛かったよー」
「でしょでしょ？　でもねぇ」
「うん？　何か問題？　しょーちゃんが解決できないなんて解きがいのある問題あるの？」
「違うわよ。まだ動作確認してないのよ」
「なんだ、そんなこと？　適当なＩＳにぶち込んでデータ取りすればいいじゃない」
「……手持ちのコア、全部使っちゃったのよね八個全部」
「お？　てことはあの計画動かすんだ。いいないいなぁ～。束さんも一枚噛ませてよお～」
「んー悪の女幹部役なんかどう？」
「いいのっ？！」
「そのかわり、あたしもあんたの方に噛ませなさい」
「……いいの？」
「当然！」
「うん判ったよ。一緒にやろうか、皇見翔華」
「ええ、一緒に逝きましょう、篠ノ之束」
「ふ、ふ、ふ」
「くっくっく」
「「あーっはっはっは」」

「おおう、そうだそうだ。いーこと思いついちゃった♪」
「どうしたの？」
「倉持に言うこと聞かないだだっ子がいるんだよ～♪　その子で、“展開装甲”のテストしーちゃおっと♪」
「面白そうね♪　私にも手伝わせてよ♪」
「えー？　どーしよっかなぁ？」
「うーん、鳳屋のケーキでどう？」
「鳳屋のケーキっ？！　やっほう♪　あそこのケーキ食べたかったんだよね～♪」
「交渉成立ね？」
「いーよいーよ～♪　束さんは懐のおっきー女だからね～♪　それでそれでえ……」
「……」
「……」

広がる海、茜色に染まる雲の群を貫き、‘銀’と‘紅’が疾風る。それは二条の輝線となり幾度もぶつかり、雲を斬り裂き、紅い斬線と幾つもの光弾を放つ。
絡み合うように天空を疾風る二条の輝跡はその輝きを残しながらも交わり、離れ、さらに激突していく。
ひとつは‘銀’。白銀に染めあげた全身と頭から伸びた二枚の銀翼が特徴的だ。
それは、彼女の翼であり、敵を引き裂く爪でもある。
その姿は、天より地を支配する天使のごとく。
「はあああぁぁぁあっっ！！」
そんな彼女へと、裂帛の気合いと共に斬りかかるは‘紅’。
体にフィットした白い水着のようなＩＳスーツ。その四肢と腰周りを、紅の装甲で覆った少女。両手に持つ二刀の刃の煌めきが斬閃

を残し、長い黒髪のポニーテールがたなびく。
‘銀’は翼を広げその斬撃を舞うように避けていく。
‘紅’の四肢を覆った装甲は、その口を広げてエネルギーを吐き出し、さらなる速度を彼女に与える。
刹那。
まるで、瞬間移動のごとく、二刀を越しだめに構えた‘紅’が‘銀’へ斬りかかる。
その二刀一斬は、‘銀’の胴を捉え……る事無く、虚しく空間を薙ぎ払う。
「くっ。……！？」
歯噛みして見上げた先に見えるのは、‘銀’の翼から覗く、三十六の砲口。目を見開き退避することもかなわないまま、砲門から溢れる光を見つめる‘紅’の少女。
しかし、その‘銀’の目の前を、‘朱’い三角形の機影が霞め、撃ち出された光弾は、‘紅’を捉えることなく宙を灼く。
「助かった、南波（ななみ）！」
「いえ！　まだです箒さん！　来ます！」
クリーム色をしたふわふわの髪の少女が座す‘朱’の翼に掴まった‘紅’が後ろを見れば‘銀’が翼より無数の光弾を撃ち放ってくる。
と、左右へ分かれて飛ぶ‘紅’と‘朱’。その間を光の雨が薙ぎ払っていき、さらに‘銀’が駆け抜ける。
「行かせんっ！」
その行く手を砲弾が掠め、‘銀’は急停止。フルフェイスの頭部をそちらへ向ける。
その視線の先にいるのは‘黒’。長い銀髪をたなびかせた小柄な少女の左目が金色に輝き、両肩から延びる、大型の砲門が轟然と火を噴く。
電磁加速されたその弾速を苦ともせずに避わし、弾体を撃ち落とす‘銀’。

「チッ！」
鋭く舌打ちした‘黒’へ向かって翼を広げる。視界を埋め尽くした光弾による制圧射撃。
被弾を覚悟した彼女はしかし、衝撃を感ずる事はなかった。
「大丈夫か？　ボーデヴィッヒ」
顔を上げた‘黒’の前に立つのは、‘玄’。左手で、装甲を展開し、黒いエネルギーで構築した巨大な黒き楯を宙に向け、右手の３０ｍｍ大型ガトリングキャノン【呑龍】から３０ミリの砲弾をばらまいて牽制、さらに両肩の粒子加速砲【豪破】から粒子ビームを放つ。
「……とりあえず礼は言っておくぞ北丘」
「構わん。どちらにせよ我々の支援火砲は重要なんだ。二人とも倒れられんさ」
「……分かっている。いくぞ北丘」
そう言い合いながらも‘黒’と‘玄’はおのが火砲で‘銀’を牽制していく。
たまらず上空へと退避せんとする‘銀’。
その背中に、青白い閃光が幾条も突き刺さり、ダメージを与える。
「！？」
驚いたように振り向く‘銀’。そこにいるのは‘青’。四つの青き涙滴を従え、長い金髪をたなびかせる。
「わたくしはここですわよ！」
言葉と共に飛び立つ、四つの【ティアーズ】。次々に光の矢を放ち、‘銀’へと殺到する。
それから逃げようと羽を広げると、薙ぎ払うかのような炎が襲いかかる。それは、‘紫’のはなった炎の衝撃。
「逃がさないわよ！」
そのまま手にした青龍刀【双天牙月】で斬りかかる。
が、‘銀’はウイングスラスターを操り、踊るように避わすと、‘紫’を蹴り跳ばす。

そして、追撃とばかりに羽を広げるが、その眼前を光の柱が遮った。
「仲間はやらせない！」
気勢を上げるは、‘蒼’を纏いし、サイドテールの少女。
その両肩の大型ユニットから、光の奔流が解き放たれる。空気を灼く、音と匂いを曳きながら、‘銀’へと向かう光。それを優雅に避け行く‘銀’。すかさず舞う、【ティアーズ】と‘紫’。
その頭上から、三角から、人を覆う鎧へと姿を変じた‘朱’と、その背にのる‘紅’が、逆落としに迫る。
「はあああぁぁあっ！」
二刀を振りかざし跳躍する‘紅’。その斬撃を受け止め、動きを止める‘銀’。
「今だっ！　一夏っ！！」
「今だよっ！　一くん！　フラウっ！」
「ぅうおおおぉぉぉおっっっ！！！」
‘紅’と‘蒼’に応えるように下方より突進する黒髪の‘白’。その手にしたる光刃を振りかざし、‘銀’へと斬撃を放たんとする！
が。
‘銀’の翼から、‘紅’に向けて放たれる光弾。
「あぁあっ？！」
その爆圧で、怯んでしまう‘紅’。その腹を蹴り、‘銀’は‘白’の斬撃から逃れていく。
と。
‘白’の影より踊り出たるは、より小さな、金髪の‘白’。
「逃がすかいなっ！」
その言葉と共に振り下ろされるエネルギーの刃【白虎爪】。

しかし、‘銀’はそれをするりと避け……ようとした先に、黒髪の‘白’の、光刃を見る。
「ぉおおぉぉおっっ！！」
雄叫びとともに放たれた一撃は、しかし、‘銀’により、手首を蹴られて逸らされてしまう。
「まだよっ！」
そこへまたもや‘紫’の炎が襲いかかる。
しかし、‘銀’は翼を広げ、炎を振り払うようにスピンする。
吹き消された炎の向こうに見えたのは。

天を埋め尽くすほどの、光弾の天蓋。
息をのむ九人を後目に、撃ち出された光弾は、すべてを覆い尽くしていく。

ある者は避け。ある者は耐え。ある者は斬り裂いていく。
なか、‘紫’は攻撃後の隙を衝かれた形となる。
「ッア？！」
目を見開き、覚悟する彼女。
「鈴！　危ないっ！？」
動けぬ‘紫’を抱え、出現させた楯で光弾を防ぐは‘橙’。
「一夏！　急いで！　もうもたないっ！」
楯を砕かれながら、そう叫ぶ‘橙’。　すべてが薙ぎ払われ、静寂と爆煙だけが場を支配する。
そしてその中心は、紛れもなく‘銀’だった。
周囲を見回し、敵対者の反応を探る。
その時、ひとつの煙が破裂し、黒髪の‘白’が飛び出した！
「ううぅぉおおぉぉおっっっ！！！　今度はにぃがさねえええぇっっ！！！！」
雄叫びと共に、左腕の【雪羅】を展開、その手に形成されたビームクローを、‘銀’に向けて突き出した。

その激突によって、爆光が広がってゆき、そして……。

ＩＳ　四神の少女達

「く……」

その教室で、一人の少年が、自らを苛む居たたまれ無さと戦っていた。

五列七段ある席の中央最前列に座る彼の背中には、様々な視線が突き刺さっている。

興味深そうに、面白そうに、心配そうに、苦笑い気味に、不服そうに、無関心に。

彼を苛む。

「みなさんご入学おめでとうございます♪　私が一年一組の副担任、山田摩耶です。一年間、よろしくお願いしますね♪」

にこやかに挨拶する副担任の山田教諭。童顔で小柄なため、クラスメイト女子と遜色無いほど可愛らしく、まるで威厳がない。が、正面で挨拶する彼女ですら視界に入らないほどに少年、織斑一夏はせっぱ詰まっていた。

その間、山田教諭は生徒達から総スルーされたことに深く傷つきながらも、副担任としての職務を全うせんと努力する。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
本日は高校入学式。本来なら、新しい世界の幕開けに、胸躍らせるところなのだが、織斑少年には、そんな余裕はまるで無い。
なぜならこの一年一組の教室には、彼を除けば女子しかいないからだ。ついでにいうと、新一年生すべてを見渡しても男は彼だけ。
三学年すべてを確認しても同じ結果が出る。
その居心地の悪さたるや、推して知るべし！　である。
と、彼は窓際の方の席へと目をやり、そこに座る少女と目が合い……そっぽを向かれた。
いよいよもって孤立無援と思い知らされた一夏は、頭を抱えてしまう。
「……くん。織斑一夏くんっ」
「は、はいっ！？」
テンパって思考に没入していた一夏は、いきなり大きな声で名前を呼ばれ、声を裏返させながら返事をする。すると、目の前の教卓から、副担任の山田真耶が身を乗り出しながら一夏の顔を覗き込んでいる。
「あ、ゴメンね？　大きな声を出しちゃって。怒っちゃった？　怒っちゃったかな？　ゴメンね？　でもね？　自己紹介、してくれないかな？　いまね、『あ』からはじまって『お』まで来てるんだよね。うん、ゴメンね。それでね？　織斑くんの『お』まで来てるからね？　ゴメンね？　自己紹介してくれるかなあって、ゴメンね？
でも、してくれたら、先生嬉しいなあ。だめかな？」
何度も頭を下げながら言う真耶。おかげで少し大きめな黒縁眼鏡がズレそうになっている。
「そ、そんなに謝らないで下さいよ、自己紹介、しますから」
「ほ、ほんとですかっ？！　ほんとですねっ？！　せ、先生と約束ですよ？　ゆびきりですよ？」
言いながら嬉しそうに一夏の小指に小指を絡めようとする真耶。
だが、一夏は何とかそれを推しとどめる。

「い……いえ、指切りとかいいんで」
そう言いつつ立ち上がり後ろを向く。すると、いままでより視線の密度が濃くなり、かかるプレッシャーが跳ね上がる。
「う……お、織斑一夏……です。ど、どうぞよろしく……」
言い終えて一息つこうとした一夏だったが、さらに膨らんだ、『興味津々です☆』な視線の束にたじろぐ。思わず六年ぶりの幼なじみへと視線を向けるがそらされた。
完全に進退窮まったかに見えた一夏だったが、不意に視界の隅に動くものを感じてそちらへ視線を転ずると、自分の左斜め後ろの席に座るサイドテールの少女が手招きしながらカンペを出してくる。
『何でも良いから、趣味とか特技とか言った方が良いよ☆』
さっと目を通したカンペに、一瞬迷ってから喉を鳴らし、意を決して口を開く。
「しゅ、趣味はサボテンの飼育や株分けだな。と、特技は家事全般とマッサージだ……ってこりゃセクハラか？」
一夏のその言葉を聞いて、大半の女子が噴き出した。
『あはははは、ほんとセクハラだ～』
『でも特技って言うくらいならうまいのかも？　今度お願いしていーい？』
『サボテンて小さい奴なら可愛いよね♪』
『織斑く～ん、サボテンの話聞かせてよ～』
などなど、概ね好意的と思って良い反応が返ってきてほっと胸をなで下ろす一夏。
と、サイドテールの少女と目があった。一夏が苦笑いを浮かべると、少女も笑顔を返す。
が、しかし、少女の顔がこわばり、小さく指さしてきた。

「？」
何の事だかわからず、首を傾げようとした瞬間。
脳天に衝撃が走り、目から☆がテイクオフしていく。
「……終わったんならさっさと着席せんか、馬鹿者が」
痛みに頭を抱えた一夏が顔を上げると黒のスーツにタイトスカート、一切の無駄無く鍛えられ、絞り込まれた長身の美女が立っている。
「ち、千冬姉？」

パアンッ！

「織斑先生と呼ばんか、馬鹿もんが」
言いながら教卓へ向かう千冬。
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてしまってすまなかったな」
真耶は、教卓を空けながら首を振る。
「い、いえ副担任ですから、こるくらいは……」
言いつつ千冬に応える真耶。
「諸君、私が織斑千冬だ。私の仕事は、おまえ達新人を一年で使いものになる操縦者に仕立てあげることだ。私の言うことをよく聴いて、よく理解しろ。出来ない奴は出来るまで指導してやる。逆らうのは構わん。が、私の言うことは聞け。いいな」
千冬が言い切った瞬間。黄色い歓声が上がった。
それを聞いた一夏と千冬はそろってため息を吐いていた。

第一話（後書き）

どうでしょう？
楽しんで読んでいただけたなら幸いです♪

第二話（前書き）

第二話、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第二話

「あー……」

その教室で、唯一の男性である彼、織斑一夏は、力無く息を吐き出した。

『ＩＳ』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。本来、宇宙開発用に作られたマルチフォーム・スーツだ。しかし、宇宙進出は遅々として進まず、このスーツは『兵器』としての道を歩むことになる。従来兵器とは隔絶した戦闘力を発揮したそれは、しかし、様々な思惑によって、スポーツへと落ち着いた。

そして、この飛行パワードスーツには、ひとつ、大きな特徴がある。

それは『女』。

このパワードスーツは、女性でなければまるで反応することはなかった。

理由はこの『兵器』の中核を為す、『ＩＳコア』が女性にしか反応しないから。なのだが、なぜコアが女性にしか反応しないのかは分からなかった。

さらに、この女性にしか扱えない究極兵器の存在は、世界を混乱の渦へと落とし込み、ある、一つの価値観を作り上げてしまう。

それは、女尊男卑。

女にしか扱えない最強兵器は、世界の認識を塗り変えたのである。

で、ここＩＳ学園は、ＩＳの操者を養成する学校だ。

つまり、基本的に女性しかいない。生徒も、教員も、基本女性ばかりである。わずかにバックヤードスタッフに男性が居ないこともないが、その数は１％にも満たないだろう。

そんな学園に、彼が入学したのは、ひとえに彼が『世界初にして唯一ＩＳを動かした男』だからだろう。

世界的なニュースにもなってしまった少年、織斑一夏。

そんな人物が入学してきたとあれば、注目されないわけでもない。
そんな訳で、休み時間になるやいなや彼の所属する一年一組の教室の前は黒山の人だかりとなり、彼自身クラスメイトにも遠巻きに注目されるという、特殊プレイに晒されていた。
ちなみにＩＳ学園は、入学当日からばっちり授業がある。
その一限目からすでに一夏は頭を抱える羽目に陥っていた。
「どうすりゃ良いんだ……」
そう呟く彼に影が差す。
「ねえ、大丈夫？　織斑君」
声を掛けられ顔を上げると、一人の少女が笑顔で立っていた。長い黒髪を、側頭部で一本に束ね、サイドテールにしている日本人の少女。朝一の自己紹介でカンペを出してくれた少女だった。
「ああ、さっきはありがとな。えっと……」
テンパりすぎて自己紹介が耳に入っていなかった一夏は、彼女の名前が出てこない。
そのことに気付いたか、軽く苦笑いする少女。
「あはは、やっぱり聞いてなかったんだね？　自己紹介」
「う……すまん」
本当に済まなそうにする一夏を見て、少女はたのしそうにする。
「いいよいいよ♪　注目されすぎて可哀想なくらいだったもん」
「わかるか？　勘弁して欲しいよな。で？　悪いんだが、名前教えてくれるか？」
苦笑い気味に少女へ答えつつ、名前を訊ねる一夏。少女は軽く笑いながら頷いた。
「うん、いいよ♪　ボクの名前は辰美。東野辰美（あづまやたつみ）だよ。よろしくね？　織斑一夏君♪」
「おう！　よろしくな東野」
言いながら右手を差し出す一夏。辰美は一瞬呆気にとられるも、破顔してその手を取る。
「あはは♪　君って面白いね織斑君」

「ん？　そうか？　あ、俺のことは一夏で良いぞ？」
握手を交わしながら、邪気のない笑顔を辰美に向けてくる一夏。
そんな彼に辰美は軽く吹き出してしまう。
「プフッ、分かったよ一夏♪　なら、ボクのことも辰美で良いよ」
「おう。よろしくな辰美」
そう笑顔を交わし合う二人。
それを見ていた女子たちのざわめきが大きくなる。
が、辰美は気にした風でも無く、一夏と話し始めようとするが、
それを牽制するように人影が現れた。
「ちょっと良いか？」
「ん？　なんだ箒か。どうした？」
その人影の顔を見て、一夏は破顔する。
実に六年ぶりに再会した幼なじみ、篠ノ之箒だったからだ。
「一夏、篠ノ之さんと知り合いなの？」
「ああ、幼なじみなんだ。六年ぶりだよなあ」
不思議そうに訊ねる辰美に、一夏は嬉しそうに説明する。
が、箒は不機嫌そうに辰美を睨んでから一夏に視線を戻して口を開く。
「……話がある。来てくれ」
「なんでだ？　ここでいいだろ」
箒に言われた事の意味が分からないように答える一夏。それを聞いた箒の機嫌が、さらに下降線を辿る。
「いいから来い！」
強い調子で言ってしまってから、箒は少し後悔するように顔をしかめた。さすがに一夏も少しカチンときたのか、わずかに表情を堅くする。
「行ってきなよ一夏。六年ぶりなんでしょ？　積もる話しもあるでしょうに」
横合いからそう声を掛けられ、一夏と箒が驚いたように振り向くと、辰美が笑顔を浮かべて二人を見ていた。

「……そうだな、行こうぜ箒」
「あ、ああ……」
辰美の意を汲んで立ち上がり、箒を促す一夏。箒は、辰美を気にするようにしながら一夏の後に付いていった。
行ってらっしゃいとばかりに小さく手を振って二人を送り出した辰美の周りに、三人の少女が集まって来る。
ひとりは金髪碧眼でショートカットの小柄な少女。
ひとりは深い黒髪のショートボブで、睨むようなツリ目の少女。
ひとりはクリーム色のふわふわしたロングヘアに、おっとりとしたタレ目の少女。
「やっぱり覚えてなかったよ。二人とも」
「伝えなくて良いのか？　辰美」
ショートボブの少女が、そう声を掛けるが、辰美は軽くかぶりを振った。
「いいよ。たった半年間一緒に遊んだことのある子なんて覚えてるわけ無いよ」
「でも……」
諦めた笑顔で三人に振り返る。そんな彼女に心配そうに声を掛けるロングヘアの少女。
「心配してくれてありがとう、武瑠ちゃんに南波ちゃん。でもボクは平気だよ」
「そんなら別にええけどな。あたしら仲間やで？　辛かったら、相談しぃや」
笑顔の辰美に、小柄な金髪の少女がそう言ってくる。辰美はそれだけで嬉しくなったのか。
さらに笑顔を深めた。
「フラウもありがとう。大丈夫。きっとまた友達になれると思うよ。みんなともね♪」
そんな風に言ってくる辰美に、三人は心配そうな笑顔を向けた。
ふと、二人が歩み去った方を見やる辰美。そこに二人の姿はない。

「久しぶり、一くん、ほーちゃん。またよろしくね？」
その呟きは、彼女の近くに居た三人の耳にも届かなかった。

さて、休み時間も終わり、授業の再開である。
そんななか、一夏はまたもやピンチに襲われていた。
専門用語がバシバシ飛び出るＩＳ関連の授業に、まるでついていけないのだ。
全く意味不明な単語の羅列に頭を抱える一夏。呻いたり、隣の女子を覗き見たり、妙ちくりんな行動を繰り返す。
そんな一夏の様子に気づいた、この授業を進めていた副担任の山田真耶は、教卓の上から彼をのぞき込みながら訊ねる。
「織斑くん、何か分からないところはありますか？」
ニコニコしながら訊ねてくる真耶に、一夏は一度教科書に目を落としてから顔を上げる。
「分からないことがあったら、訊いて下さいね。何せ私は，先生，ですから！」
やたらと先生を強調しつつ胸を張る真耶。その顔は、弱気な彼女にしては珍しく、誇らしげだ。
その様子を見た一夏は、意を決して手を挙げる。
「先生！」
その声に、真耶はにっこり微笑んだ。
「はい、織斑くん！」
「ほとんど全部……わかりません……」
一夏のその言葉に、真耶は絶句してしまう。
「……え？　ぜ、全部、ですか……？」
ひきつりながら教室を見回し、生徒たちへと声をかける真耶。
「え、えっと、今の段階で分からないっていう人、どの位居ますか？」

真耶の言葉に一夏が挙手する。が、ほかに挙げる者は居なかった。
バカな?！　といわんばかりの表情で周りを見回す一夏。
そんな彼の元へ、教室の隅で授業を監督していた、彼の最恐の姉にして担任でもある、織斑千冬がやってくる。
「織斑、入学前に渡された参考書は読んだか？」
「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパァンッ！！

小気味の良い音とともに、一夏の頭に衝撃が走る。
「『必読』と書いてあったろうが、ばかもんが。後で再発行してやる。一週間で覚えろ」
「い、いやあの厚さを一週間はちょっと無理……」
「やれと言っている」
千冬の言葉に抗弁しようとするが、その眼力だけで封じ込まれた。
「……はい。やります」
「ＩＳは、その機動性、攻撃力、制圧力で、過去の兵器とは一線を隔す『兵器』だ。深く知りもせず、安易に用いれば必ず事故が起こる。そうならないための基礎知識と訓練だ。理解できずとも覚えろ。そして守れ。それが規則というものだ」
千冬の言葉に一夏はうなだれつつも少しだけ不満そうにした。
それを見咎めた千冬の目が鋭く細まる。
「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』などと思っているな？　人間は、望む望まざるに関わらず、集団の中で生きねばならない。それを放棄するというなら、人であることを辞めろ」
辛らつな言葉。周囲の生徒も神妙にその言葉を聞いている。
そして、顔を上げた一夏は表情を引き締めた。
「え、えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから、放課後に、先生が教えますから、一緒にがんばりましょう？　ね？　ね？」

一夏の元にやってきた真耶も両手をぐっと握りしめながら一夏に迫るように言ってくる。
そんな一生懸命な彼女に、一夏は軽い笑みを浮かべて頷いた。
「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」
そう言って着席する一夏。千冬も教室の端に移動し腕を組んで全体を見る。
そして真耶は。
「ほ、放課後に……生徒と教師、ふたりきりなんて……」
などと呟きつつ、頬を赤らめ、体をくねらせ、妄想世界へテイクオフしていた。
その後、千冬の咳払いで正気に戻った真耶は、教卓に戻ろうとして、コケた。
一年一組の生徒全員の後頭部に、大きな水滴マークが張り付いていた。

ＩＳ学園アリーナ。
『兵器』であるＩＳの訓練や試合などに使われる広場であり。
安全のため、強固なシールドが張り巡らされている訓練スペースだ。授業で使用されるほか、生徒が申請すれば、個人で利用することも可能ではある。
そこで行われているのは、二年生の実機訓練の授業である。
その風景を、物陰から見つめる影一つ。丈の長いコートを羽織り、サングラスを掛け、帽子を被った人物。
「くっはぁ～～～♪　いいわよいいわよ～♪　さすがＩＳ学園。かわいい子がいっぱい居るわね～♪　そして、ＩＳスーツの密着度♪　たあぁまんね～～～♪　やっべえばるんばるん揺れてるよオイ～あれはＧは固いわね～♪　たまんねーよなあ……ポロッといかねーかなあ」

そんなことを言いつつよだれを垂らす人物。ハアハア言いながら、生徒を視姦していく。
「おおお、美少女の尻があんなにたくさん……やべえ、ＩＳたまんねえ……エロ過ぎでしょもう。束ちんＧｊ！！」
興奮しつつ、どこへ向けてかわからぬサムスアップを掲げる変質者。もう片方の手には、光の粒子が集まってカメラが出現。サングラス型ハイパーセンサーと同期させて写真を撮りまくる。
普通に録画しろよと言いたいが、この変質者に言わせれば、『ファインダーという第二の目を通してみることで、美少女のちちしりふとももは、新たな輝きを得るのよっ！！　そんなこともわからないのっ？！』なんだそうだ。
そんな風に、鼻血まで垂らし始めて大興奮の変質者であったが、蜜月は長くは続かなかった。
『おいおまえ！　そこで何してる！』
唐突に響く誰何の声。ギクリとなって周りを見回すと、警備員らしき姿がこちらに近づいてくる。
「ヤバッ？！」
慌てて立ち上がり、脱兎のごとく駆け出す。
『おい！　待てっ！　不審者発見！　逃亡中につき増援求む！』
インカムで連絡しつつ走り出す警備員。さすがに国家機密を扱うことのある設備の警備だけあって、身体能力も高いらしく、早い早い。
「ギャーッ？！　追いつかれる～っ？！　こうなったら！」
言うが早いか、量子変換の光の輝きが足下に集まり、金属性のブーツのようなものに足が包まれる。次の瞬間、地表から一ｃｍほど浮遊し爆発的に加速する。
『なっ？！』
突然のことに驚く警備員。
「ぬははは♪　天才舐めんじゃないわよ？　あでゅ～ん♪」
あっと言う間に姿が見えなくなる変質者。警備員は、ただ呆然と

それを見送ることしかできなかった。
この後、監視カメラ等をチェックしたものの、該当する人物の姿は、影も形も残っていなかったらしい。
ただ、警備員から子細を聞いた、千冬のこめかみが、ぴくりと動いた事だけは明記しておく。

第二話（後書き）

第二話、いかがでしたでしょうか？
見所は淑女（変態）かなあ……（笑）
こんなのが出てくる作品ですが、これからもよろしくお願いしますね♪

第三話（前書き）

昨日、いったん削除した第三話を更新し直しました。
読んでいただいているみなさんにはご迷惑をおかけしまして申し訳ありませんでした。

それでは、改めまして第三話、よろしくお願いします♪

第三話

「大丈夫だった？　一夏」
「ぜんっぜん、大丈夫じゃねえ……要勉強だ……」
さて、授業が終わり休み時間。一夏の元へ辰美がやってくるなり訊ねると、わりと絶望したような感じで答える一夏。と、辰美の周りに複数の影があることに気づく。
「っと？　辰美、そっちの二人は？」
顔を上げた一夏は辰美に訊ねる。すると辰美は、満面の笑みを浮かべて、クリーム色のふわふわしたロングヘアに優しそうに微笑むタレ目の少女に手のひらを上にして向ける。
「ボクの友達だよ♪　こっちのふわふわな髪の子が南波ちゃん」
「朱羽南波（あけはななみ）です。よろしくお願いしますね？　織斑さん」
「で、こっちのショートボブの子が武瑠ちゃん」
「北丘武瑠（きたおかたける）だ。よろしく頼む、織斑」
「おう！　朱羽に北丘だな？　よろしく頼むな。後、俺のことは一夏で良いぞ」
そういって笑う一夏に、南波と武瑠は顔を見合わせ、小さく笑う。
「では、わたしは南波で構いません」
「ふむ、なら私も武瑠で構わんぞ？」
「ああわかった。改めてよろしくな？　南波、武瑠」
言いながら邪気のない笑顔を向ける一夏。その様子に笑みを浮かべつつ、辰美が一夏の席を挟んで反対側に手を向ける。
「で、そっちにいるのが……」
言われて振り向く一夏。するとそこには、金髪碧眼で癖のあるショートヘアの小柄な少女が満面の笑顔を浮かべて立っていた。
「フラウディア＝尾崎＝ウェストロードや。あと、あたしの事はフラウでええで？　よろしくな、一やん」
「お？　おう、よろしくなフラウ。あと何で関西弁？」

勢い良く自己紹介されて、少し圧倒される一夏。だが、すぐに気を取り直して質問していた。
「ああ、あたしハーフやねんな。生まれも育ちも大阪なんやけど、小学二年にこっちの方に越してきたからなあ。こんなしゃべりなんわ勘弁して欲しいわ」
「わかった。にしても随分仲良さそうだが、入学前から友達だったのか？」
一夏の質問に、辰美は嬉しそうにうなずく。
「うん♪　小学三年生からの付き合いなんだ♪」
「へえ、幼なじみなのか。道理で仲良さそうなわけだ」
辰美の笑顔につられたか、一夏も笑顔になっていた。
「そんなことより一夏さん、大丈夫ですか？」
南波に心配そうに声をかけられ、一夏はきょとんとなる。その様子を見て武瑠がため息をついた。
「勉強のことだ。ＩＳの」
言われて渋面を作る一夏。
「うぐ。正直まるでダメだ。専門用語っぽいのがどういう意味なのか全くわからん……」
そう言って、がっくりと肩を落とす。それを見て辰美が口を開いた。
「そういう事なら、ボク達が教えて……
『ちょっと、よろしくて？』
辰美の声を遮り、意志の強そうな澄んだ声が響いた。
「へ？」
一夏は何事かとそちらを見ると、辰美達四人も釣られてそちらを見る。するとそこには、長い金髪の少女が、腰に手を当てながら立っていた。
その少女は、一夏の返事を聞くや否や、口に手を当てながら素っ頓狂な声を上げる。
「まあっ！？　なんてお返事ですの？！　このわたくしに話しかけ

られるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」
その言いように一夏は少しだけ表情を固くし、辰美達も顔をしかめた。
「……ああ、悪いな。俺、君が誰か知らないし」
「わたくしを知らない？　このセシリア＝オルコットを？　イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
「知らん」
追撃するように放たれた一夏の言葉に、セシリアが鼻白み、辰美とフラウが噴き出しかけ、武瑠が嘆息し、南波が苦笑いする。セシリアは辰美達の様子に気づき、辰美とフラウに険の篭もった視線で睨み付けた。
すると、辰美は苦笑い気味になり両手で抑えるようジェスチャーし、フラウは明後日の方を向いて口笛を吹いた。
「あ、質問いいか？」
不意に一夏から質問を投げかけられたセシリアは一夏に向き直って胸を張る。
「ふふん。下々のもの達の要求に応えるのも貴族の努め。よろしいですわ、何でもお聞きなさい」
頼られたことに気を良くしたのか胸に手を当て、上機嫌で促すセシリア。それを聞いて一夏は少しだけ表情を崩した。
「おう、助かる。で、だ……」
もったいつけるように言葉が切られ、五人の少女の視線が集まった。
周囲のクラスメイトも、どうなることかと固唾を飲んで見守っている。
「……代表候補生って、なんだ？」
その質問に、聞き耳を立てていた女子達がずっこけ、辰美と南波が苦笑い。セシリアが頬をひきつらせ、武瑠が嘆息した。
「あっはっはっは♪　一やん、おもろいな自分。気に入ったで～」

唯一フラウだけが大受けで、一夏の背中をバシバシ叩いていた。
しかし、セシリアはそうはいかない。
「あ、あ、あ……あなたっ！　本気でおっしゃってますの！？」
血管マークが三つは浮かび上がっていた。
が、当の一夏は柳に風であり。
「知らんもんは知らん」
と、ばっさり。
「……」
これにはセシリアも開いた口が塞がらない。
「一夏、国家代表ＩＳ操縦者はわかる？」
ふいに辰美が口を挟み、一夏がそちらを向く。
「……あぁ、国を代表したＩＳ操縦者だろ？　確か、世界大会に出場できるんだよな」
一夏の返答に、南波がうなずく。
「ええそうですよ、一夏さん。代表候補生というのは、その国家代表ＩＳ操縦者に選出される方々です」
「まあ、国家代表操縦者は国の顔とも言えるからな。選考に選考を重ねたエリートなのが普通だ」
南波の解説を武瑠が引き継いで言うと、『島国というのは……』だの『常識ですわよ……』だなどとぶつぶつつぶやいていたセシリアが耳聡く反応した。
「そう！　エリートなのですわ！」
いきなり復活し、一夏を指さすセシリア。
「本来ならば、わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運な事なのですわよ？　その現実を、少しは理解してらっしゃるの？」
セシリアの物言いに、南波と武瑠が不快そうになり、フラウは欠伸をして聞き流していた。
辰美は困ったように苦笑いしながら一夏を見るが、一夏自身は動じた様子もなく口を開く。

「そうか。そいつはラッキーだ」
一夏の答えに、今度は辰美のみならず、南波と武瑠も吹きそうになっていた。
フラウに至っては、腹を抱えて床にうずくまりながら震えていた。
「……馬鹿にしてますの？　大体、あなた。ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界で唯一ＩＳを操縦できる男性と伺っていましたから、多少は知的さを感じられるかと思っておりましたが、正直期待はずれですわね」
「俺に何かを期待されても困るんだが……」
がっかりだと言わんばかりに方をすくめるセシリアに、一夏が困ったように呟いた。
「ふん。まあでも？　わたくしは‘優秀’ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ？　ＩＳのことでわからないことがあれば、無いて頼むのであれば教えて差し上げるのもやぶさかでは……」
「待て、オルコット」
「……なんですの？」
気分良く喋っていたところを武瑠に邪魔されたセシリアは、彼女の顔を睨み付けた。
「一夏には我々が教えるつもりだ」
「そうなのか？　辰美」
武瑠の言葉を聞いて、一夏が辰美に確認する。
「うん。南波ちゃんや武瑠ちゃんは教えるの上手だしね」
「そっか、助かるよ」
一夏と辰美の会話を聞いて、セシリアが眉を跳ねさせる。
「ふん。わたくしの方が、うまく教えられますわよ。何せわたくし、入試で‘唯一’教官を倒した、エリート中のエリートですから」
「……入試ってあれか？　ＩＳに乗って戦うやつ？」
「ああ、それやな。必ずしも勝つ必要はないんやけどな」
一夏の思い出したような声に、フラウが答える。

すると一夏は、
「あれ？　俺も倒したぞ、教官」
とのたまった。
「は……？」
それを聞いたセシリアが固まる。
「えー？！　凄いよ一夏！」
「そ、そうなのか？　真っ直ぐ突っ込んで来たから、避わしたんだ。そしたら壁に激突して動かなくなっただけなんだが」
「相手の自爆か……まあ、勝ちは勝ちだな」
一夏のつぶやきが聞こえた武瑠が沈痛そうに言う。
と、セシリアが復活。
「わ、わたくしだけと聞いておりましたがっ？！」
えらい剣幕で一夏に顔を近づけるセシリア。
「じょ、女子では……ってオチでは？」
「はあっ？！　つ、つまりはわたくしだけでは無いとっ！？」
「いや知らんがな」
「あなた！　あなたも教官を倒したって言うのっ？！」
すでに鼻先がくっつく距離なのだが、興奮しているのかセシリアは気づかない。
逆に一夏は女の子に顔を近づけられ、大いに戸惑った。
「お、落ち着けよ。な？」
「こ、これが落ち着いて……」
さらにヒートアップしそうな勢いだったが、幸か不幸かそこで予鈴が鳴った。
その音は、一夏にとっては天使のもたらした福音にも聞こえた。
「っ……！　また後で来ますわ！　逃げない事ね！　よくって！？」
そう言い放って一夏から離れるセシリア。一夏は、次の休み時間の事を考えてげんなりとなる。
「災難だったね一夏。とりあえずこれ渡しとくね」
最後まで残っていた辰美が、ボロボロのノートを渡してきた。

「これは？」
「ボクもあんまり成績良くないからね。自分用の用語集を作ったんだよ。良ければ使ってね？　じゃ」
言いながら席に戻る辰美。
「……今時、手書きで用語集なんて……」
それは、何度も繰り返し使われていたのであろう、薄汚れてボロボロであったが、所有者がどれだけがんばってきたのかが手に取るようにわかった。
「……ＩＳ操縦者になるために、みんなこんなに必死で勉強をしてきたのか……。なのに俺は……」
一夏は保護の名目があるため、ある程度試験を免除してもらっている。
いわば特別待遇だ。その事は一夏自身聞いてはいたが、彼女らが必死に努力してきた証を見たとき、己のふがいなさに気づかされた。
「……やるか！」
決意を新たに授業の準備をする。
が、まさか、この後あのような事態に陥るとは、神ならぬ人の身である一夏には想像も出来なかった。

「それでは、この時間は実戦で使用する、各種装備の特性を説明する」
先ほどまでの授業とは違い、教卓に立つのは、一年一組担任にして、一夏の姉である織斑千冬。
第一回、モンドグロッソＩＳ世界大会優勝者にして、世界最強とまで言われる女傑だ。
その雷名は、現在に至ってもまるで色褪せることなく、全世界に轟いている。
その彼女が自ら教鞭を執る授業は、教師である副担任の山田真耶

にとっても重要なものであるらしく、真剣な顔でノートをとる姿勢だ。
授業を始めるべくディスプレイに向き直る千冬。
と、何かに気づいたように動きを止め、生徒達へと振り返った。
「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出場する代表者を決めねばならんな。クラス代表者とは、まあそのままの意味だ。対抗戦のみならず、生徒会の開く会議、委員会への出席……ようはクラス長だな。また、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。現時点では大した差はない。が、競争は向上心を生む。一度決まってしまえば、向こう一年間は変更できんからそのつもりでな」
千冬の言葉に、教室中に騒ぎが溢れ出す。事前知識のない一夏はよくわかっていなさそうではあったが、手元のノートを確認していた。するとこんな声が聞こえてきた。
「はいっ。織斑君を推薦します！」
一人の女子が挙手しながら声を上げる。
一夏はその言葉に顔を上げた。
「私もそれが良いと思います！」
もう一人、女子が挙手しながら追従の声を挙げた。
これを聞いてなお、一夏はたいした反応を示さない。
が。
「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わんぞ」
「って、お、俺！？」
千冬の言葉に驚いて立ち上がる一夏。そんな彼にクラスメイトの期待の視線（一部、同情、心配、面白そう、苦笑、ヘラヘラしているからだ馬鹿が。も混じっていた。）が集まる。
「織斑。邪魔だ、席に着け。さて、他にはいないのか？　いなければ無投票当選だぞ」
「ちょっ、ちょっと待ってくれよ千冬姉！　俺はそんなのやらな…

…」

ッパァァン！！

「織斑先生だ。何度言わせる。自薦他薦は問わないと言った。他薦されたもの拒否権なぞ存在せん。選ばれた以上は覚悟を決めろ」

「い、いやでも……」

往生際悪く、なおも言い募ろうとする一夏。だが、その言葉は、教室内に突如響いた叩きつけるような音と、物理的な鋭さを持っているかのような鋭い声によって遮られた、

「納得がいきませんわ！　そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなどいい恥さらし。このわたくし、セシリア＝オルコットにそのような屈辱を一年も味わえとおっしゃるのですか？！」

その言葉に一夏があれ？　となる。

「実力からいけばわたくしがクラス代表になるのが必然。それを。物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであってサーカス紛いの見せ物になるためではございませんわ！」

セシリアの言葉は徐々に加速していき、一夏のみならず不快気な顔をしているものが出始めた。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき。そしてそれは、このわたくしですわ！」

エンジンが暖まり、セシリアの剣幕は止まらない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさねばならないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で……」

そこまで言われて一夏は口を開いた。

「イギ……

バンッ！！

一夏の言葉は、机を叩いた大きな音に遮られてしまった。

「訂正なさい！　セシリア＝オルコット！　これ以上我が国を侮辱すると許しませんよっ！！」

そう叫んだのは、ふわふわのクリーム色の髪をした少女、朱羽南波だった。

第三話（後書き）

第三話いかがでしたでしょうか？
はてさて、セシリア嬢と南波、一夏の口論。どうなりますやら。
次回もよろしくお願いしますね♪

四神のプロフィール（前書き）

四神の少女が総登場しましたのでプロフィール公開します♪

四神のプロフィール

東野辰美（あずまやたつみ）
十六歳（四月一日生）

髪：コゲ茶色
瞳：茶色
肌：黄褐色

一人称：『ボク』
二人称：『君』
三人称：『君たち』
語尾：『～だよ。～だね』

外見：身長は１６４ほど。髪型はサイドテール。眼は大きめで小鼻小口で童顔。全体に引き締まっており、シャープな肢体を持っている。胸は９０のＥｃｕｐ。制服はミニスカートタイプで生足派。

設定：明るく元気で努力家な女の子。基本的に争い事は好かないが、正義感が強く、力を振るうことに躊躇いはない。実は特撮ヒーローマニアで蹴り技を好む。古流剣術を修めているほどの腕前だが、滅多に振るわない。
身体能力は高く、スポーツ万能。高い空間把握力と空間認識力を備えている。
座学が苦手だが、努力を怠ることなく勉強している。
四人兄妹の末っ子で、上三人は男。母親も早くに亡くしており、男手で育てられたため、女の子的な感覚に無頓着。
一夏に対しては恋愛感情より友情の方が強い。
恋愛感情もあまり理解していないが。

所有ＩＳ：南賀重工製第三世代試作ＩＳ雷電弐型カスタム『春雷』

朱羽南波（あけはななみ）

十五歳（七月七日生）

髪：クリーム色

瞳：翠色

肌：白色

一人称：『わたし』

二人称：『あなた』

三人称：『あなた方』

語尾：『～です。～ます』

外見：身長は１６８ほど。髪型はウェーブの入ったロングヘア。眼は垂れ目。スラリとしたモデル体型で手足が長い。胸は９８のＦｃｕｐ。制服はロングスカートタイプでガーターストッキング。

設定：温和で優しい少女。困っている人を見過ごせない。北欧系クォーター。

華族の系譜でありながら、武芸十八搬に通じ、長刀と弓術の腕前は全国レベル。

頭脳も明晰で、勉強はかなり出来る。

祖国に対する愛国心も強く、日本をバカにするような発言な態度には、烈火の如き怒りを見せる。

一夏に対しては、真剣にその境遇を案じているが、恋愛感情にまでは至っていない。

実は名も顔も知らない許嫁がいるので、恋愛に関しては諦めてい

る。

所有ＩＳ：南賀重工製第三世代試作ＩＳ舞孔雀カスタム『舞孔雀・炎（ほむら）』

フラウディア＝尾崎＝ウェストロード

十五歳（十月十五日生）

髪：金色

瞳：青色

肌：白色

一人称：『あたし』

二人称：『あんた』

三人称：『あんたら』

語尾：『～やん。～やね』

外見：身長は１４１ほど。髪型はショートヘア。眼は大きく童顔。

全体にコンパクトな肢体で、小学生くらいに見える。胸はＢｃｕｐ。制服はミニスカートタイプでニーソックス。

設定：明るくひょうきんなハーフの少女。面白い事やお祭り騒ぎが好きで、騒動には必ず首を突っ込もうとする。

機械関係には強いが、勉強が大の苦手。座学はすぐに眠くなるらしい。

ＩＳでの戦闘に天才的な才能を発揮するもののものぐさで努力が嫌い。

両親はＩＳの技術者でそちらに進みたいと思っており、代表候補の話を蹴った事もある。

一夏に対しては友人として、面白い玩具としてつきあいを持つつもりらしいが……？

所有ＩＳ：南賀重工製第三世代試作ＩＳ鋼牙壱式カスタム『ヴァイスティーガー』

北丘武瑠（きたおかたける）
十五歳（一月一日生）

髪：黒
瞳：黒
肌：黄褐色

一人称：『私』
二人称：『お前』
三人称：『お前たち』
語尾：『～だ。～だな』

外見：身長は１４７ほど。髪型はボブカット。眼はツリ目で目つきも悪い。どいらかといえば美人系の顔立ちではある。小柄ながらも十二分に鍛えられており、精悍。胸はＡｃｕｐ。制服は肩出し、ミニスカートタイプで生足派。

設定：寡黙で静謐なイメージの少女。基本的に冷静で判断力に優れている。突き放したような物言いが多いが、巣の喋りがそうなだけで、性根は心優しい。
　闇部に連なる系譜の武家の家に生まれ、生身での戦闘能力も異様に高い。

様々な武に精通し、特に暗器の扱いに長けている。
かつては周りに対して心を閉ざしていた。しかしながら、四神の少女達との関わり合いで心を開くようになった。
一夏に対してはどうという感情も感じていない。
辰美達が仲良くしようとしているので付き合っただけである。

所有ＩＳ：南賀重工製第三世代試作ＩＳ轟震カスタム『玄甲』

四神のプロフィール（後書き）

四神のＩＳはまた次の機会にでも……。

第四話（前書き）

第四話、更新しました。
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第四話

「なんですの？　あなたは。人が話している最中に不調法な」
腕を組み、乱入者へと視線を向ける、金髪ロングヘアの少女、セシリア＝オルコット。その視線を真っ向から受けて立つのは、クリーム色でふわふわの髪の少女、朱羽南波。
「不調法はどちらです？　先ほどから聞いていれば、日本に対する暴言の数々。もはや見過ごせません！」
「……文化的後進国を後進国といって何が悪いのです？　そもそも碌な歴史背景も無く先進国と肩を並べようとすること自体……」
「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

セシリアの言葉に切り込む声。この教室で、ただ一人の男子。織斑一夏だ。その内容にセシリアが目を剥く。
「おいしい料理はたくさんありますわ！　あなた！　わたくしの祖国を侮辱しますの？！」
「先に侮辱したのはあなたでしょうっ？！　セシリア＝オルコット！」
怒髪天を突くセシリアに、南波が噛みつく。にらみ合う一夏、セシリア、南波。
そこに一つの声が挙がる。
「さ、三人とも落ち着いてよ。喧嘩は駄目だって」
言いながら立ち上がるのは、長い焦げ茶の髪をサイドテールにした少女、東野辰美だ。
だが、三人とも気に留めた様子もない。
「決闘ですわ」
「望むところです」

「四の五の言うより分かりやすい。いいぜ？」
「ちょ、ちょっと？！」
睨み合う、一夏&南波とセシリア。辰美は何とかその場をおさめようと三人に声を挙げるが、三人はお互いしか眼中に無かった。
「言っておきますけど、わざと負けたりしたら、わたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」
「無粋な……低俗さが現れてますよ？」
「真剣勝負で手を抜くわけないだろ。侮るんじゃねえよ」
セシリアの物言いに南波が不快感を露わにし、一夏が跳ね除ける。
「……少しは加減をと思いましたが、良いでしょう。その不遜な態度を改めさせて挙げますわ！」
堂々と自分に向かってくる二人に苛付きを隠さないセシリア。辰美は思わず左手を頭にやる。
「だからどうしてそんなになっちゃうの？　三人とも。落ち着いて話し合おうよ……」
「もう話し合いなんかじゃ収まらねえよ、辰美」
「ええ。代表候補、なにするものぞ！　です！」
「ああもう……」
やる気満々な一夏と南波の答えにうなだれてしまう辰美。決闘することは、もう確定事項のようだ。
と、一夏が何かに気づいたように眉を跳ねさせると、口を開いた。
「っと、そうだ。ハンデはどのくらい付けるんだ？」
一夏のその言葉に、セシリア余裕の表情を取り戻した。
「あら、早速お願いかしら？」
「いや、俺がどのくらいハンデをつけたら良いのかと思って……」
セシリアに答える一夏の声は、クラス中から巻き起こった爆笑の渦にかき消されてしまった。

『お、織斑君、本気で言ってるの？　それ』
『男が女より強かったなんて、大昔の話だよ～』

『織斑くんは、確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎかな～』

次々に挙がるクラスメイトたちの声に、一夏が顔をしかめた。笑っていないのは、辰美と南波に、一夏の幼なじみのポニーテール少女、篠ノ之箒。

小柄で金髪のフラウこと、フラウディア＝尾崎＝ウェストロードはつまらなさそうに欠伸をし、ボブカットに冷たい鋭さをもった北丘武瑠は、興味も無いとばかりに腕を組んで瞑目している。

副担任の真耶はおろおろしているが、担任の千冬は成り行きを眺めるばかりだ。

「じゃあ、ハンデはいい」

苦り切った表情で撤回する一夏。それを見て、セシリアが嘲笑を浮かべる。

「ええ、ええ。そうでしょうともそうでしょうとも♪　むしろ、わたくしがハンデをつけてあげたいくらいですわ。それにしても……ふふ。日本の男子のジョークセンスは最高ね？　男が女より強いなんて……」

おかしくて仕方ない様子のセシリアに、一夏は憮然となる。

そんなセシリアに、南波が声をかける。

「……品がありませんね？　オルコットさん。底が知れますよ？」

「……なんですって？」

南波の言葉にセシリアが柳眉を逆立てた。が、そこで教卓を打つ音が一つ響いた。

「そこまでにしておけオルコット、朱羽。勝負は一週間後の月曜。放課後に第三アリーナで行う。織斑、オルコット、朱羽、東野はそれぞれ用意しておくように」

「はい」

「わかりましたわ」

「了解しました」

千冬に言われて頷く、一夏、セシリア、南波。
と、そこで辰美が焦ったように千冬の方へ振り向く。
「って？！　何でボクまでっ！？」
「人数が半端だからな。お前も参加しろ」
声を挙げる辰美に宣告する千冬。
「い、いや、ボクは立候補もしてないですし、誰からも推薦されてませんけど……」
恐る恐る抗議してみる辰美。だが、それを聞いてなお、世界最強の担任はニヤリと笑う。
「私が推薦してやる。どうだ？　嬉しかろう」
「ワ、ワーイウレシイナー」
目幅涙をターっと流しながら肩を落とす辰美。返した返事も棒読みだ。
その様を見たクラスメイトたちの顔は、一様に『ご愁傷様』となっていた。

「うん。助かったぜ辰美」
「あはは、お役に立てて良かったよ」
本日の授業がすべて終わり、放課後。一夏は辰美に声をかけていた。
あまり人見知りしない一夏ではあるが、今日初めて会ったはずの辰美に、ある種気安さを感じていた。
授業中にしろ、休み時間にしろ、昼食中にしろ、今日一日、一夏は好奇の視線にさらされ続けていた。
移動すれば大名行列、立てばモーゼの十戒。完全に珍動物扱いである。
そんな中で、自然に話しかけてきたのは辰美だけであった。
もちろん、南波や武瑠、フラウとも話はしたが、少し距離感は感

じていた。
　しかし、辰美にはそれを全く感じなかった。
「このノートがなかったらと思うとゾッとするよ……サンキューな」
　言いながらノートを差し出す一夏。しかし辰美はそれを手で制した。
「まだいいよ。しばらくは一夏が使っていて？」
「え？　いやでも、それだと辰美が大変じゃないか？」
　辰美にそう言われて驚く一夏。だが、辰美は気にした風でもなく続ける。
「これでも一夏より長くＩＳのこと勉強してるからね。しばらくは大丈夫だと思うよ」
「だけど……」
　なおも言い募ろうとする彼を見て、辰美は軽く笑ってみせる。
「……ならさ、一夏。早いところそのノートが必要なくなるように頑張れば良いんじゃないかな？」
「あ……それもそうだな」
　辰美に言われて、一夏は今気づいたような顔になって苦笑いする。それを見ながら辰美は自分のバッグを手に取り帰り支度を始めた。
「さて、ボクはそろそろ寮に行こうと思うけど、一夏はどうするの？」
「箒も部活の見学に行っちまったし、山田先生を待ってみるよ。一応約束したような形だからな」
　軽く思案しながら答える一夏。それを聞いて辰美もそういえばとなる。
「そっか、そう言えばそうだっけ。じゃあ、寮の部屋番教えてよ遊びに行くから」
　頭を切り替え、寮の部屋番号を訊ねる辰美。だが、一夏は済まなそうな顔になる。
「あ～、俺、しばらく自宅から通うんだ。急な話だったからまだ部屋が用意できてないんだとさ」

「あ、そうなんだ。さっすが世界初の男性ＩＳ操縦者」
茶化すように言う辰美に、一夏が軽くツッコミを入れた。
「褒めてないだろ、それ」
「あはは、バレた？」
一夏のツッコミに、屈託無く笑う辰美。つられるように一夏も笑顔を見せる。
「あー楽しかった♪　じゃね一夏。また明日」
「おう！　またな！」
ひとしきり笑ってから移動する辰美。、笑顔でまた明日と告げる。
そして、一夏も笑顔で応えた。

「あ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」
「あ、山田先生。待ってました」
教室に顔を出した真耶に一夏がにこやかに声をかける。
「え？　ま、待ってたって、ま、ままま、まさか織斑くんが私に？！　だ、だだだ、だめよ真耶、彼は生徒、私は教師。ああ……でもでもでも、織斑くんならこの身を任せても……」
一夏の言葉に、真耶の妄想がテイクオフしてしまう。
それを見て一夏は苦笑いした。
「何言ってんですか先生。放課後に勉強見てくれるって言っていたじゃないですか」
「え？　あ！　そ、そういえば……ご、ごごご、ごめんなさいっ？！　き、緊張していてすっかり忘れてましたっ！？」
テンパる真耶に、一夏は笑みを深くした。
「ああ、いいですよ。また今度お願いします。早く色々分かるようになって、こいつを貸してくれた辰美……東野にこれを返してやりたいんですよ」
言いながらボロボロのノートに手を置いた。

「随分使い込まれてますね。早い子は小学校高学年の頃からＩＳの勉強してると言いますから、東野さんもそうなのかもしれません」
「……そっか、やっぱりみんな努力を重ねてここに来てるんだな」
一夏は、垣間見えた彼女たちの真実に顔を引き締めた。
「織斑くん……」
近くでそれを見ていた真耶は、少しだけ頬を朱に染め、手のひらを自分の胸の中心に宛てた。
軽く力の入ったその感触に心地良さを感じ、自然に両の目と口元が優しい弧を描く。
「っと、じゃあどんな用件ですか？　山田先生」
「え？」
優しい空気に身を浸していた真耶だったが、一夏はそんなものを読むわけも無く、用件を訊ねる。呆気にとられた真耶の顔がみるみるふくれっ面になった。
「先生？　な、なんか怒ってません？」
「……別にっ！　別に怒ってなんていません。……織斑くんは、もっと空気を読むべきです」
むくれてそっぽを向く真耶。しかし、一夏にはどうしてそうなったか分からない。
と、そこへ声がかかった。
「山田先生。織斑は……ああ、捕まえてましたか」
その声は、千冬だった。それを聞いて真耶はハッとなる。
「い、いっけない、連絡事項があったんでした。織斑くん」
「はい？」
慌てた真耶に呼ばれて返事をする一夏。そんな彼に、真耶は書類と鍵を渡す。
「えっとですね。寮の部屋が決まりました」
「前に聞いた話だと、一週間は自宅から通うって話じゃありませんでしたっけ？」
真耶から鍵と書類を受け取りつつ訊ねる一夏。

「そうだったんですけど、事情が事情なので、一時的な措置として無理矢理部屋割りを変更したみたいです。……織斑くん、その辺りの事って政府から聞いてますか？」
後半は声を潜めた耳打ち。真耶の表情は真剣そのものである。一夏は世界でも、もっとも珍しいケースだ。政府としても、保護と監視は強化したいのであろう。
あの報道からこっち、マスコミから各国大使、果ては胡散臭い研究所の研究者まで、様々な連中が自宅へ押し掛けてきた。
一時期に比べれば大分マシにはなったが、どこにでもバカは多いのである。
「そんな訳で、政府特命もあって入寮させることを優先したみたいです。一ヶ月もあれば個室の用意も整いますから、それまでは我慢して下さい」
「はあ……分かりましたけど、一度帰って荷物を準備したいですから、今日は帰って良いですかね？」
「あ、いえ荷物なら……」
「私が手配しておいた。着替えと携帯端末の充電器があれば十分だろう」
真耶を遮り千冬がそう言ってくる。生活必需品、それも最低限のみ。
一夏はちょっとだけ泣きたくなった。
「それじゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。あと、各部屋にシャワーは備え付けられてますから。で、大浴場もあって、学年ごとに利用できる時間が違ったりするんですけど……すいません、織斑くんはまだ使えません」
「え……な、なんでです？」
少しショックを受けたような顔の一夏。それを見て千冬が嘆息する。
「アホか貴様は。同年代の異性と風呂に入りたのか？」

「あー……」
己以外は女子しかいないことに今更思い当たり、一夏は嘆息する。
「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたがるなんてだめですよ？　ふ、不謹慎です！」
「い、いえそんなつもりはないです」
「で、でも織斑くんなら私は……きゃー」
真耶、またもや羽を広げて離陸。
「いや遠慮しときますんで……」
暴走する真耶に、断りを入れる一夏。すると真耶は、ちょっとしょんぼりとなった。
「そ、そうですか……い、いえいいんです。気にしないで下さい……。はあ……」
「我々は会議があるんでな。そろそろ失礼する。道草などせず、まっすぐ寮に帰れよ。良いな」
「はい」
気落ちした様子の真耶を連れて歩き出す千冬。
と、その足が止まった。
「そうだ忘れていた。織斑」
「はい？」
「おまえのＩＳだが、学園で専用機を用意した。まあ、状況が状況だからな。データ収集も兼ねているらしいがな。予定より格段に早く行程が進んだらしく、明日午後には届くはずだ。きちんと確認しておけよ」
「分かりました」
そう答えながら、一夏は自分の専用機に思いを馳せた。

第四話（後書き）

第四話。いかがでしたでしょうか？
ある人物の介入により、白式の登場が早まりました。
機体にも変化がありますのでご注意を。
それでは、次回もよろしくお願いしますね♪

第五話（前書き）

第五話、更新しました。
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五話

校舎から寮までの、ほんの五十メートルほどの距離を、一人の男子生徒が歩く。ＩＳ学園ただ一人の男子生徒、織斑一夏その人である。

その顔は少しだけ弛んでいた。なぜなら……。

「専用機か～」

半ばモルモット扱いのデータ収集目的とはいえ、自分専用の機体が貰えるのだ。

どんな姿で、どんな性能なのか。いやが応でも期待は高まる。

しかも‘辰美ノート’によれば、全世界にＩＳコアは４６７個しか無いらしく、そのうちの一つを預けられるのだ。

気を引き締めねばとは思うものの、そこはやはり男の子。

こういったメカニックに憧れはあるものなのだ。

「……不謹慎かもしれないが楽しみだな～」

そんなことを呟いた瞬間だった。

木々の揺れるざわめきを聞いて立ち止まる一夏。

何かいる……。

そう思って表情を引き締めた瞬間。

「トウッ！！」

「なっ？！」

かけ声と共に飛び出してきた影に驚く一夏。帽子を目深にかぶり、サングラスをかけ、裾の長いコートをはためかせた人物。跳躍と共に折り畳まれた太股が眩しいと思いつつも、眼前に迫る肌色の丸いヒザに顔をひきつらせる事しかできない。

その刹那。硬く重い石と石がぶつかる音が響き、一夏の顔面にその人物のヒザが突き刺さる。

「ごべろっっ？！」

「おごぶっ？！」

奇声と共に、転がる二人。絡まるような縦回転を五メートルほど経て停止した。
「あたた、鼻打ったわよ。なにもう～」
ぺたりと座り込んだコートの人物。脱げた帽子からは、纏めてあった癖のある黒髪が溢れ、ズレたサングラスの向こうに、涙目になった、少し釣り上がり気味の大きな眼がのぞく。
赤くなった鼻を押さえつつブツクサ文句を言う。
一方、一夏は目の前が暗闇に覆われていた。
顔の両側を、柔らかくてスベスベした熱いモノに挟まれ、口元を湿った布地に覆われた、柔らかいモノに塞がれる。
鼻腔をくすぐる分泌液の匂いと、鼻奥から溢れる鉄錆の臭いに頭の心がどうにかなりそうになりながらも彼は声を上げようとした。
「（なんだこりゃあっ？！）」
「あぅんっ☆？！♪／／／」
股下からの突然の刺激に思わず体を跳ねさせる。
「な、なに？」
少し頬を赤らめ、コート姿の人物が下を見ると、はだけたスカートの向こうに髪の毛が見えた。
「ありゃ？　誰子ちゃん？」
そのままペロリとスカートをめくると、己の太股に顔を挟まれ、股間のピンクの布地にに口を塞がれた顔見知りの少年の顔が出てきた。
「……あら、いっちゃんじゃない」
「ひょ、ひょーかひゃん？」
「ひゃん☆♪」
顔騎された状態で喋られ、刺激に悶える。と、一夏も己の体勢を認識し……赤い花が咲いた。

「ねえ、いっちゃん。おねーさんのパンツ、お赤飯状態でぬとぬとなんだけど？　なんかファースト貫通したみたいよね？　処女だから知らないけど」
「なに言ってんだあんたわ！　っていうか、こんなとこで、なにやってんですか翔華さんっ！！」
スカートを摘んで、一夏の鼻血まみれになったパンツを見せながら呟くのは、皇見翔華。
一夏はといえば、鼻に詰め物しながらツッコミに走るしかない。
「ぶー。昔みたいに『しょーねーちゃん♪』って呼んでくれれば良いのに」
言いながら赤くなった頬を両手で押さえつつ体をくねらせる。
「フザケロ」
半眼でにらむ一夏。しかし翔華は動じない。
「あぁん♪　いっちゃん良い感じ☆　おねーさんのM心が刺激されちゃうん♪　やべー排卵しそう……」
その視線に体を震わせ、ヨダレを垂らしそうになる。それを見ている一夏はドン引きだ。
「相変わらずの変態っぷり……」
呟いた一夏の言葉が耳に入ったが、照れくさそうに頭を掻きながら、体を逸らす。
「やーそんなに誉めないでよ～☆　照れちゃう濡れちゃう感じちゃうん☆」
「誉めてねえっ？！」
「えー、昔は『しょーねーちゃんだいしゅきー』って後くっついて来たのにぃ」
「それこそ黒歴史だわっ！！」
翔華の言動にいちいちツッコんでいた一夏は肩で息をしていた。
と、翔華が真面目な顔で近づいてきた。
「な、なにを……」
突然のことに後ずさる一夏。

「……ん。止まったみたいね」
言いながら微笑む翔華。
「え？　あ、うん」
面食らって頷いた瞬間には鼻の詰め物は取り去られていた。
「あ、ありが……」
心配してくれていたのだと思い、礼を告げようとする一夏。
しかし次の翔華の行動は、彼の常識を遙かに越えたモノだった。
「はむん☆」
「ぇ……？」
翔華は一夏の鼻を軽くくわえたのだ。
慌てて飛びすさる一夏。
「な？　な？　ななあぁぁあ～っ？！」
翔華はそのままペロリと唇を舐めると、イタズラが成功した子供のように笑った。
「あっはっはっはぁ～♪　いっちゃんの慌てた顔ゲットぉ～♪　相変わらず良い反応ねぇ～♪」
「ぐ……」
昔からこうだった。翔華は一夏にセクハラ紛いや変態じみたイタズラを仕掛けてきてはこうやって笑うのだ。
そして……。

「……人の弟で何を遊んどるか」

その言葉と共に頭を鷲掴みにされる翔華。その顔をいっぱいに冷や汗がダラダラと流れ出す。
「あ、あはは……げ、元気そうねちふー。お久しぶりぶり～……」
「まったくだ。さて、織斑。私はこの変態（旧友）と積もる話もあるから、とっとと行け」

「わ、わかりましたぁ！」
鬼気迫る様子の千冬に、直立不動で答えた一夏は、回れ右してその場から離れていく。それを見て翔華は慌てだした。
「あぁあっ？！　いっちゃんおねーさん見捨てる気？　いくらＭでもキツいときはあるのよっ？！」
涙目で一夏の背に向かって訴える翔華。しかし、一夏は合掌しながら聞こえない振りをした。
「さて……ＯＨＡＮＡＳＨＩといこうか変態（我が友）よ」
「ひぃっ？！　高町式は勘弁っ！？　てゆーか、ちふー！　さっきからあたしの呼び方が変態になってるわよっ？！　たぁすけてえぇ～～っ？！」

「全く、酷い目にあったせ……」
嘆息しながら呟く一夏。すでにその身は一年生寮へとたどり着いていた。
手にした鍵の番号を確認しつつ、廊下を歩く。
「えっと……１０２７、１０２７っとここか？」
ドアプレートのナンバーと、鍵の番号をつき合わせていって目的地にたどり着いた。
間違いないようしっかり確認して、ドアに鍵を差し込む。
が、手応えがない。
「……開いてる？」
そのままドアを開けて入室していく一夏。すぐさま目に飛び込んでくるのは、二つ並んだ大きなベッド。ビジネスホテルもかくやと思われる高級感と布団のふっくら感に、一夏は目を輝かせ、荷物を置いてダイブした。
ふんわりと体を包み込む柔らかさに悦に浸る。
『あれー？　同室の人？』

ふと聞こえてきたこもったような声に身を起こす一夏。
備え付けとおぼしきシャワールームから出てきた人影に目を丸くする。
「こんなかっこでごめんねー？　パンツ持ってくの忘れちゃって……」
ちょっとだけ困ったような笑みを浮かべた見知った顔。
サイドテールだった焦げ茶色の髪は下ろされ、水分を十分含んで照り返し、細くて長い手足としっかり締まった腹筋も瑞々しい張りを魅せる。
流麗な鎖骨が艶やかな美しさを醸しだし、タンクトップに包まれただけの自己主張の激しい双美丘が揺れる。
そして、今だにすらりと細い腰回りを覆っているのは、ただ一枚のタオル……。
「……辰美？」
「一くん？」
余りに突然の邂逅に、二人ともきょとんとなる。
「え？　なんで一くんがここに居るの？」
「い、いや俺もこの部屋なんだが……」
「えええぇぇえ～～～～っっっ？！？！」
一夏の答えに、素っ頓狂な声を上げながら足を踏み出す辰美。
そのとき。

ハラリ。

きちんと止めていなかったのか、腰回りを覆っていたタオルが落ちていく。
お腹の中心のへこみから、なだらかな下腹に、艶めかしい腰骨が見え、まだ若々しい茂みの一部が見えた瞬間。一夏は体ごと視線を

逸らす。
「わひゃう?！」
軽い悲鳴を上げながら辰美は落下していくタオルをひっつかんで腰の前に当てながらシャワー室へ飛び込んでいった。
「す、すまん……」
いったい何に謝っているのかわからなくなっていたが、とりあえず謝る一夏。
「あ、あはは。さすがに驚いたよ〜。男の子と相部屋になるなんて……」
さすがの辰美も苦笑い気味だ。
「……どうする？　事務局に言って……」
「う〜ん。ボクは構わないよ？　一夏がイヤじゃなければね」
返ってきたのは意外な返事で、一夏は対応に困ってしまう。
「いや、俺が言うのもなんだが、どうなんだ？　それは」
「いや、なんていうかさ。ボクはどっちかっていうと得意じゃないんだよね女の子って」
「え？」
辰美が言ってきた言葉に一夏は驚いた。
「……ボクの家はさ、剣術道場やってるんだけど、上が兄ばかりでさ、母もボクが生まれたときに亡くなっていて、あんまり女の子らしい生活してないんだよね。もう、男の子みたいな格好して、男子に混じって遊んでいて。中学に上がってからも、剣術の稽古ばかりだったから、南波ちゃん達くらいかな仲の良い女の子っていったら。だからよく知らない女の子と相部屋なんてどうしようって思っていたんだよ。だから一夏がルームメイトだって聞いて、実はホッとしてる位なんだよ」
「……なんで俺なら平気なんだ？」
辰美の話で最大の疑問。一夏はそれを素直にぶつけた。
返答に窮する辰美。つかの間の時に悩み考え、己を押さえつけるように、その拳を握りしめ、怯えるような顔で、意を決した。

「……な、なんかさ。一夏って初めて会った気がしないんだよね。だからだと思うなっ！」
少し、望みを託して、でも諦めて。
辰美は一夏へ言葉を贈る。
それを聞いて一夏は軽く思案しながら口を開いた。
「……う～ん。たぶん初対面だと思うぞ？　辰美みたいな可愛い女の子に会ってたら忘れないだろ」
「ッ？！」
それを聞いた辰美の胸の奥が、大きく跳ねた。期待していた言葉ではない。
でも、体の奥の方から溢れてくるものを感じた。
しかし、一夏は気づくことなく言葉を続けていく。
「でも、俺も辰美は不思議なくらい話しやすいな。まるで十年来の友達と話してる感じでさ」
少し楽しげに話す一夏に、辰美の胸は大きく跳ね続ける。
「よし、そういうことなら仕方ない。辰美には世話になりっ放しだしな。俺の部屋が決まるまでだけど、よろしくな？　相棒」
そして、この言葉に、辰美の眼から滴が溢れた。
「（また……相棒って、呼んでくれた！）」
それは、幼きあの日。
イジメられている女の子を守るために走ったふたりの関係。
「背中はまかせたぜ！　あいぼうっ！」
「おう！　まかせろ一くんっ！」
「いちか！　たっちゃん！」
「ほーちゃんは！」
「オレたちが！」
「ボクたちが！」
「「まもってみせるっ！！」」
「（一くんは、やっぱり一くんだった！）」

嬉しさのあまり、溢れるものが止まらない。
「辰美？　どうした？」
返事がないことを訝しく思った一夏が声をかけてくる。
「あ、あはは、相棒って良いよね♪　正義のヒーローの仲間って感じでさ」
「なんだそりゃ」
辰美の返事に、一夏はどんな顔をして良いかわからなかった。
「まあ、いいじゃない。それより、相棒の頼みを一つ聞いてくれないかな？」
「おう！　構わないぜ？」
辰美にお願いされて、力強く引き受ける一夏。
「……パンツ取って？」
締まらなかった。

「で？　貴様はここで何をしていたんだ？　皇見翔華」
「ちふー冷た～い。友達じゃんよ～」
千冬に折檻された翔華がぶーたれる。
「質問に答えろ」
「……ＩＳ学園のエロカワ美少女達を視姦しに♪」
「……貴様のは冗談に聞こえんから困る」
痛痒を感じ、指先でこめかみを押さえる千冬。
「まあ、そっちはライフワークだけどね～♪　ところでいっちゃんかっこ良くなったわね～♪　翔華、子宮が疼いちゃぼべぇっ？！」
まさに電光石火のごとく、千冬の拳が翔華の脳天に突き刺さった。
「のおぉうぅぅ～～っっ？！」
あまりの激痛に頭を押さえながら転がり回る翔華。
「痛いじゃないっ！　記憶が飛んだらどうすんのよっ！」
「良かったじゃないか、新しい記憶スペースが出来て」

「それもそうね」
千冬の皮肉に動ずることなく、あっさり立ち直る翔華。それを見た千冬は、苦虫を噛み潰したようになる。
「まあ、そういうのは置いておいて」
誰のせいだとツッコみたいが、やぶ蛇になりかねないと堪える千冬。
「やっぱり、精通したての一番搾りが味わえなかっどぐらばしゃっ？！」
「そうか、死にたいんだな？　貴様は」
「じょ、冗談よ？　ちふー。マジ切れいくない♪」
可愛らしく首を傾げる翔華に、なにか太いものが引きちぎれる音がした。

『ひ、ひぎぃっ？！　さ、裂けちゃう！？』
『死ね！　死んでしまえ！　この変態が』
『ら、らめぇっ？！』
『おまえが生きていては一夏のためにならん！』
『なにおぅっ？！　いっちゃんのちぇりーは私んだぁっ！』
『殺すっ！！　絶対殺すっ！！』
『マジ切れちふー、マジパねぇっ？！　脱出〜〜っ？！』
『逃がすかぁ〜っ！！』

「なんだか外が騒がしいね一夏」
「ああ、淑女と鬼が追いかけっこしてるだけだよ」
「……なにそれ？」
「それより勉強の続きやろうぜ」
「あ。うんそうだね」

結局その騒動は夜半過ぎまで続いたらしい。
南無南無。

第五話（後書き）

第五話、いかがでしたでしょうか？
駄目な天才淑女（変態）皇見翔華のターン！！
辰美の良い話も含めて良い感じに……あれぇ？
次回もよろしくお願いしますね♪

第六話（前書き）

第六話、更新しました♪
読んで下さる方に、楽しんでいただければ幸いです♪

第六話

朝、五時五十五分。パッチリと目を開いた焦げ茶色の髪の少女、東野辰美はそのまま身を起こす。

その目覚めは完全に習慣化しており、目覚まし時計を必要とはしない彼女は、昨日ルームメイトとなり、隣のベッドでグッスリ眠る異性の少年、織斑一夏を起こさないよう静かに身支度を始める。

衣擦れの音だけが部屋に響き、クローゼットを静かに開け閉めする僅かな音が木霊する。

動きやすい運動着に着替え終わると、髪を纏め始める。

「今日は黄色の気分かな♪」

小さくつぶやき、黄色い髪ゴムを手にして唇で軽くくわえながら髪を整えていく。丁寧に梳いてから纏め終えたそれを髪ゴムで縛って確認する。

「よし、準備完了♪」

「ん、なんだ？　辰美」

掛けられた声にベッドを見ると、一夏が起き出していた。

「あ……ゴメン。起こしちゃった？」

「いや、大丈夫だよ、普段このぐらいには起きてるから」

言いながら体を伸ばす一夏。

「そうなの？」

「ああ、家で家事の類やってるからな。あんまり遅くまで寝てられないんだ」

「そうなんだ」

ベッドから降りてきた一夏に合わせて辰美が立ち上がる。

「とりあえず、おはよ♪　一夏」

笑顔で挨拶してくる彼女に、すこし面食らってしまう。が、すぐに相好を崩した。

「ああ、おはよう辰美」

「？　どうしたの？」
一夏が少し戸惑ってから挨拶を返したことに疑問を感じる辰美。その疑問を投げかけられた一夏は小さく苦笑いする。
「ああ、ここ何年かは朝こうやって挨拶を交わすことがなかったからな。ちょっと戸惑っただけだ。それより、辰美は朝からどうしたんだ？　部活か？」
「部活にはまだ入ってないよ。今日は自主練♪」
言いながら片目を瞑ってみせる。
「へえ。……着いてっても良いか？」
辰美の答えに軽く思案してからそう告げる一夏。その言葉に辰美は顎に指を当てて考える。
「う～ん、一夏ってなにかスポーツやってた？」
「小学生の頃は剣道やってたな。もう何年も竹刀は握ってないけど……」
一夏のその返事に、辰美は少し顔を曇らせる。が、すぐに表情を引き締めて真剣な顔で告げた。
「じゃあ厳しいと思う。ＩＳ繰者は体力も必要だから、苦手な子でもアスリート並みの練習してるはずだよ。厳しいこと言うけど、今の一夏じゃついてこれないと思う」
真面目な顔で辰美の言葉に耳を傾ける一夏。フ、と顔をゆるめると口を開いた。
「なら、余計にやらないとな。ただでさえ出遅れてるんだ。これ以上引き離されたくないしな」
「わかった。なら手伝うよ。今日は様子見ってことで一緒にやろうか」
「応」
勢い込んで返事をする一夏。しかし、この１０分後には後悔することになるとは思ってもいなかった。

「ハアハアハアハア……」
まず最初のランニングでつまづいた。軽く五キロのランニングだったが、最初はふつうに走っていたのだが、体か暖まってきた頃に中距離走並みの速度で走り始めて、即ダウンした。辰美は途中でダッシュやジグザグ走などを入れていたが一夏にはそんな余裕がなかった。
わりと容赦なく置いて行かれたが、かえってありがたかった。情けない姿を心配され、手を抜かれるより余程良い。
これが準備運動と聞いた瞬間、わりと絶望したが。
ふらふらしながらランニングを終えると、静かな空気に気づく。
ストレッチングなどをやっていた辰美が、次の練習に移っていた。
剣道していた一夏にはすぐにわかったが、それは、剣の型であった。
少し腰を落とし、軽く膝を曲げながら右足を半歩前に出し、左足は半歩後ろに下げる。
左手は小さく握りながら腰骨に当て脇を締め、右手は手刀の形で左手に軽く添えるように水平に置く。背筋は綺麗に伸ばされ、露わとなったうなじが美しさを醸し出しており、左側に纏められたサイドテールが時折風に揺れていた。
一夏の側からは見えていなかったが、辰美は瞑目し、軽く息を整えていた。体に緊張は無く、むしろ筋肉は緩んでいる。
しかし、その凛とした佇まいは、周囲の空気を引き締め、静謐な空間を創りだしていた。
その雰囲気に、乱れていたはずの一夏の呼吸も収まっていく。雰囲気に呑まれ、彼が喉を鳴らした瞬間。

空気が動いた。

いつの間にか抜き放たれた‘刃’が袈裟掛けに斬り裂き、いつ返したかもわからぬ内に逆袈裟に斬り捨てる。
そこまで見て、始めて一夏は辰美が前進していることに気づいた。
否、それだけでなく、辰美が‘刃を抜いていたのが見えた’こと気付いたのだ。‘手刀’をゆっくり戻すその様は、まさに納刀そのもの。
そこまできて、やっと‘手刀’であったことを思い出す。
「……凄い……」
漏れた声に辰美がピクリと反応する。
「！　一夏ランニング終わったの？」
「おう、へろへろだけどな～」
座り込んで苦笑い。剣道を辞めて以来、小、中の体育以外に運動はしていない。家事も重労働ではあるが、使う筋肉などが違いすぎる。
鈍った。一夏はそう感じた。その様子を見て、構えを解いた辰美が笑い掛ける。
「だらしないぞ？　男の子♪」
「……」
そんな風に屈託無く投げかけられた笑顔を、前にも見たような、そんな既視感を感じた一夏であった。

その後もストレッチや軽い筋トレなどを盛り込み、気づけば七時を回っていたことに気づく二人。シャワーを交代で使わねばならないことに、今更ながらに気づいて慌てて部屋に戻る。
途中、何人かの女生徒に部屋へと転がり込むところを見られたが、気にする余裕はなかった。

『……なになに？』
『あっ、織斑くんだ』
『えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！　いい情報ゲット～♪』
『でも、もう一人の子は？』
『情報集めてっ！』

なにやら騒ぎになりつつあるが、気にする余裕は二人には無かった。
そんなこんなで朝七時四十五分。辰美と二人で一年生寮の食堂へ向かう一夏。
と、前方に長いポニーテールが揺れているのを発見する。
「お？　箒だ。おーい、箒ー」
廊下で無遠慮に大きな声で箒を呼ぶ一夏。
周りが何事かと振り向く中、箒自身がそれに気づかない筈も無いが、振り向かずに足を早める。
「あれ、気づいてないのか？　箒ー」
そんな彼女の様子に、一夏は眉を寄せて再度呼んでみるが、まるで振り向くことはなく、隣にいる辰美は苦笑いを浮かべる。
「恥ずかしいんじゃないかな？　大勢の前で名前を呼ばれるとか」
「え？　そうか？　箒って良い名前じゃないか。箒星がサァッて流れるように綺麗でさ」
一夏のその言葉が聞こえたか、足を止める箒。その耳が真っ赤に染め上がっている。
「……なるほどね～確かに颯爽としていて綺麗だよね、篠ノ之さんって」
箒の名前を褒める一夏に同意する辰美。すると箒は、くるりときびすを返し、一夏と辰美の元へ、立ち去ろうとしたとき以上の勢いでやってくる。
「なに大声を出してるんだ！」
「いや箒の姿が見えたから呼ぼうと思って」

「何で呼ぶんだ！」
「いや、一緒に朝飯でも食おうかと……」
「な、なんで一緒に食べたいんだ！」
「いや、久しぶりにあった幼なじみだからな。親交を深めたいと思って……」
「じゃあ、なんで東野と一緒なんだ！」
「なんでって、同室だし……」
その言葉で周囲の空気が固まった。

『えええええぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーっっっっ？！？！？！？！』

周囲で聞き耳を立てていた女子からあがる悲鳴のごとき合唱。箒も開いた口が塞がらない。
「な、ななな？　い、一夏、東野と寝屋を共にしたのか？」
「ま、まあ同室だしな」
一夏の答えに箒の視線が刃物のように鋭くなる。
「な、なにを考えている」
「へ？」
「なにを考えていると聞いているっ！　男女七歳にして同衾せず！常識だ！」
箒の勢いに呑まれる一夏。隣の辰美も口を挟みにくそうだ。
「お、お、お……」
「お？」
「お前が希望したのかっ？！　女子と相部屋などと……」
「そんな馬鹿な」
箒の言葉に一夏が呆れたような声を出す。

殺気が走った。

次の瞬間、堅いものを叩く音が響き、一夏の真横に木刀が叩きつけられた。どこに隠していたのか、箒がいきなりそれをもって一夏へ切りかかったのだ。

しかし、その軌道は逸らされる。一夏の前に立った、一人の少女の手によって。

「危ないよ？　篠ノ之さん」

上段から一夏を強襲した木刀を、持ち手を手刀で弾いて逸らし、返す刃が箒の首もとに当てられていた。

その顔は真剣で、悲しげに揺れている。それを見た箒は、自分のしでかしたことに青ざめた。

「わ、私は……」

「……木刀でも、人は死ぬよ？　篠ノ之さん。剣を扱うものなら、それは承知してるよね？」

言われてうなだれる箒。それを見た一夏が声を掛けようとする。

「辰美、箒もそんなつもりじゃなかったんだから……」

「一夏も聞いて。ボク達が扱うＩＳは兵器なんだよ。扱い方を間違えれば、命を失ったり、奪ってしまったりするものなんだよ。そのことだけは、絶対に忘れないで」

それだけ言って手刀を箒からよけた辰美は、そのまま行ってしまった。

残されてしまう二人。

「箒、辰美は……」

「言わないでくれ一夏。辰美は正しい。私が未熟なだけだ……」

消沈する箒。心なしか、トレードマークのポニーテールもしんなりしているように見える。

そんな彼女に、掛ける言葉もない。己のふがいなさを感じた少年は、いきなり自分の頭を乱暴に掻き始めた。

「あーもー！　箒！」
「え？」
突然、強く呼ばれて箒が顔を上げると、口をへの字に結んだ幼なじみに手を取られた。
「来い！」
強い口調で、有無を言わさず箒の手を引いて歩き出す一夏。
その力強さに、箒は素直に着いていってしまう。
「ど、どこへ……」
先ほどまでの勢いはどこへやら。弱々しく訊ねる箒に、一夏は力強い笑みを見せた。
「飯だ、飯！　落ち込んだときは飯に限るっ！」
「ハァア？！」
イイ笑顔の一夏に、箒は形の良い眉を、八の字にして困惑した声を上げる。しかし、一夏は気にするでもなく彼女の手を引いて歩く。
そんな彼の様子に、幼き日を重ねた箒の顔は、自然と柔らかい、穏やかな笑顔に変わっていった。

その後、食堂に着いた二人は、すぐさま辰美を見つけて頭を下げた。辰美もキツく言い過ぎたと言って頭を下げてきたため、さらに箒が頭を下げる。
繰り返しとなったところで、誰ともなく笑いがこぼれ、三人で笑ってしまった。
「あー、可笑しい。うん、改めてよろしくね？　篠ノ之箒さん。ボクは東野辰美。辰美で構わないから」
笑いであふれた涙を、軽く拭って右手を箒に差し出す辰美。
それを見て、箒は目を丸くする。
「……いいのか？　先ほどの技といい、東野も剣術をやっているのだろう？」

その言葉の意味に、一夏も気付く。剣士が剣士に利き手を預ける。それは、相手を認め、信頼することを表す。
「ボクは最初からそのつもりだよ」
笑顔を崩さない辰美に、箒も笑顔を向け、彼女の手を、利き手で握る。
「わかった。これからよろしく頼むぞ、辰美。私のことは箒で良い」
「うん、よろしくね箒♪」
笑顔と握手を交わす二人。
その手が大きな手に包まれた。一夏だ。
「へへ、俺も混ぜてくれよ」
屈託無く笑うその顔に、箒の顔が赤くなり、辰美の頬にも朱が走った。
「ん？　どうしたんだ？　二人とも」
「い、一夏……お、お前という奴は……」
「あ、あはは……なんだかな～」
よくわかってないらしい一夏に、箒が肩を震わせ、辰美が苦笑いする。
三人の空気が和らいだこともあってか、その後の朝食には、クラスメイトの女子三人も加わり、和やかにすすんだ。
特に箒は、肩から力が抜けたようで、若干戸惑い気味ではあるものの、少しは打ち解けたようだった。
そんなゆったりとした朝食ではあったのだが、食堂に寮長として姿を現した千冬に早く食えと促され、飯をかき込むハメになっていた。

本日二限目も終了し、織斑少年は、やはり軽く追いつめられていた。
幸いにして、昨晩辰美に教えてもらいながら予習した分、楽には

なっているものの、やはり難しい。
休み時間にも軽く予習したい位なのだが、いろいろ質問しにくる女子が出てきて暇がない。
自分が質問したい（ＩＳのこと）くらいだと嘆息しつつも、真面目に質問に答えていく一夏。
その様子を見て、箒は軽く息をはく。
「へらへらしおって……馬鹿もんが」
不満を隠そうともせずに呟く箒。
「基本誰にでも優しいよね？　一夏って」
「八方美人なだけだ」
「良いことではありませんか。仲良きことは美しき哉ですよ♪」
「限度があるだろう限度が」
「まあ、トラブル多そうで見てる分には楽しいやん」
「私は楽しくない！」
「落ち着け篠ノ之。お前達も煽るな」
そんな声にハッとなる箒。
周囲を見回すといつのまにやら辰美と、その友達である、柔らかなクリーム色の髪の朱羽南波、金髪ショートヘアで小柄なフラウディア＝Ｏ＝ウエストロード、ボブカットでこれまた小柄で鋭い雰囲気の、北丘武瑠の四人が集まっていた。
「……どうして私の周りに集まるんだ？」
箒はわずかに顔をしかめて呟く。
「ええやん♪　たっちーと友達になったんやろ？　ほんならあたし等とも友達や♪」
「どんな理屈だ、それは……」
「友達の友達は、友達いうやんか♪　諦めや」
あっけらかんと言い放つフラウに、箒は頭を抱えた。

第六話（後書き）

第六話、いかがでしたでしょうか？
白式が出るところまで行きませんでした（苦笑）
箒の魅力を書き出せてるか心配ですねえ。ファース党のみなさんお手柔らかに。
それでは、次回もよろしくお願いしますね♪

第七話（前書き）

第七話、更新しました。
合いも変わらずゆるゆるゆっくり更新中です（笑）
それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第七話

質問攻めは休み時間を越えかねないほどの勢いだった。
「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」
「え。案外だらしな……」

パアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」
とっさの質問に答えかけた少年の頭がブレ、音が響きわたる。その背後に立つのは世界最強の彼の姉、織斑千冬。
弟の一夏をへい睨しつつ、その周囲へ言葉を放つ。
「ああそうだ、織斑。今日搬入予定のお前の専用機だが、１４３０には搬入されてくる。授業が終わったら、必ず確認に行け」
「あー。じゃあそのまま訓練できますかね？」
「……アリーナの使用には事前の届け出が必要だが、動作確認も必要か……いいだろう、今回は私が手を回しておいてやる。明日からは自分で申請しろよ」
「サンキューちふ……了解しました織斑先生」
無言で出席簿を振り被った千冬に、一夏は姿勢を正して言い直す。

『せ、専用機！？　一年の、しかもこの時期に！？』
『つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……』
『ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ』
『篠ノ之博士も、もっとたくさんコアを作ってくれれば良いのに……』

周囲で二人の話に聞き耳を立てていた女の子ｓから、羨むように、次々と声が挙がる。

ふと、一人の女生徒が、何かに気づいたように織斑教諭へ顔を向けた。
「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」
とっさの質問に、さらりと答えてしまう千冬。
すると、授業も始まるというのに、黄色い声が挙がる。

『えぇぇぇーっ？！　す、すごい！　このクラス、有名人の身内が二人もいる！』
『ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？』
『篠ノ之さんも天才だったりする！？　今度ＩＳの操縦教えてよっ』

そんな声と共に、ポニーテール少女な武士娘、篠ノ之箒へと群がる女子。その様子を見て、千冬は、しまったとばかりに頭へ手をやる。
そうこうしている内に、箒はイライラしたような顔つきになり口を開けようとした。
が。
「ストップ、ストーップ！！　みんな落ち着いてよ。そんな風に詰め寄られたら、箒……篠ノ之さんも困っちゃうよ？」
女子達と箒の間に、影が割り込む。コゲ茶色の髪をサイドテールにした少女、東野辰美だ。
その言葉に、女子達も少しバツが悪そうになる。

『そ、そうよね……』
『ごめんね？　篠ノ之さん』
『後でゆっくり話を聞かせてね？』

そう言いつつ、三々五々に散っていく女子達。それを見て、辰美と箒は同時に息を吐いた。
と。
お互いにその様子に気付いて顔を見合わせる二人。どちらからともなく、苦笑いが浮かんだ。
そこに声がかかる。
「……東野、場を納めてくれたのはありがたいが、席に着け。もう授業時間だ」
「あっ！？　す、すいません」
あわてて席に戻る辰美。その様に、クラスメイト達の顔にも、軽い笑みが浮かぶ。
だが、その様子を不服そうに見ている者も居た。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」
授業が終わるなり、一夏の席までやってきた、金髪縦ロールなイギリス代表候補、セシリア＝オルコット。腰に手を当て、胸を張り、威猛々しく言うのがよく似合う。
「まあ？　一応勝負は見えていますけども？　さすがにフェアではありませんしね？」
「そーいや代表候補生って、専用機持ってるんだっけか」
軽く思い出すように呟く一夏。それを聞いて、セシリアのテンションが上がる。
「その通りですわ！　世界にＩＳは４６７機。つまり、その中でも専用機を持つ者は、全人類六十億超の中でも、エリート中のエリートなのですわ！」
「そ、そうなのか……」
「そうなのですわ！」

愕然と呟く一夏に、セシリアがドヤ顔を決める。
「人類って、六十億超えてたんだ……」
「そこは重要では無いでしょうっ？！」
顔を赤くしたセシリアのツッコミは早かった。
一夏は、その剣幕に押されながらも、視界の隅に小柄な金髪少女、フラウディア＝O＝ウエストロードが机に突っ伏して震えているのを見て取った。
彼女が少し顔を上げてサムズアップすると、一夏もイイ笑顔で親指を立てる。
自分を無視したそのやりとりに、セシリアが柳眉を逆立てる。
「バカにしてますのっ？！」
「イヤソンナコトハナイ」
「やっぱりバカにしてますのねっ！？」
いきり立つセシリアに、一夏は顔を逸らす。
「そんなこと無いよな？　箒」
「そこで私に振るのか……？」
軽くため息をつく箒。セシリアもそちらへ顔を巡らせる。
「……そういえばあなた。篠ノ之博士の妹なんですってね」
「妹というだけだ。もう何年も会っていない」
「そうですの」
何でもないように答える箒に、セシリアは興味を失ったように一夏へ視線を戻す。
「とにかく！　クラス代表にふさわしいのは、このわたくし、セシリア＝オルコットである。と言うことをお忘れなく！」
そう言うと、長い金髪をきれいに手で払いながら回れ右しつつ立ち去っていくセシリア。
その立ち振る舞いは、いちいち様になっていた。
「はあ。やっと嵐が去ったか。辰美、箒、飯行こうぜ」
「うん♪　今日はなに食べようかなあ～」
「……まあ、いいだろう」

一夏に誘われ、辰美は楽しそうに、箒は少しだけ頬を染めて立ち上がる。その様子に、一夏は嬉しそうに頷き、周りを見回して口を開いた。
「ほかに誰か一緒に行かないか？」
軽く周囲に振ってみる。するとすぐに反応があった。

『はいはいはいっ！』
『行くよー。ちょっと待ってー』
『お弁当作ってきてるけど行きます！』
『アタシも行くわ。ええやろー？』

名乗りを上げるはフラウを含めた女子四名。そのメンツを見て、一夏は気付く。
「あれ？　南波と武瑠はどうしたんだ？」
辰美やフラウと仲の良い二人の姿が見えないことに軽い驚きを感じ、フラウに聞いてみる。
「あー、なっちーは、茶道部の先輩たちと約束しとるらしいわ。武ちゃんはあんまり人と一緒に飯食わんよってな」
「そうなのか？　まあ、武瑠の奴だけは、ほかの三人より一歩引いてるみたいだからなあ」
フラウの答えに、ぼやくように呟く。そんな一夏を見て、辰美も苦笑いを浮かべる。
「武瑠ちゃんは、お家の事情もあるから、なかなかね……」
「家の事情？　どんな事情……」
なんだ？　と聞きながら、辰美の方を見ると、彼女は、口の前で人差し指二本を交差させて、バッテンを作る。
「……ごめん。こればっかりはボクの口からは言えないかな」
「一夏、人には誰しも言いたくないことや言えないことの一つや二つはあるものだぞ？」
済まなそうな辰美に、箒が助け船を出す。

「そうやで？　イチやん。それに女の秘密を知りたがるんは、マナー違反や」
フラウも腕を組みながら諭すように言う。すると、箒や辰美、ほかの女の子たちもウンウンと力強く頷く。
「そ、そうか……？　そいつは済まなかった。じゃあ、このメンツで行くか」
『おお～♪』
一夏に促され、女子六人が元気に答えつつ右拳を突き上げる。唯一箒が乗り遅れ、顔を軽く染めながら小さく拳を突き出しかけていた。

案の定、学食は混んでいたが、一緒にやってきた、袖を大きく余らせた、ノンビリした女の子の機転で席を確保した。
「へえ、見晴らしも良いし、良い席取れたな～」
「えへへ～♪　でしょでしょ～？　おりむ～ほめてほめて～♪」
余った袖を振り回しながら言う女の子。無邪気なその様子に、一夏は軽く笑いながらその頭に手を乗せた。
「おう！　偉いぞ♪」
軽く撫でてやってから席に着く。それから、歓談を交えつつ食事をとっていく一同。雰囲気は、終始和やかだった。
と、袖余りの女の子が声をかけてくる。
「ねえねえ、おりむ～。せっちーとの対戦、戦えそう～？」
無邪気に訊ねる言葉。勝てるか？　ではなく、戦えるか？　と聞いている辺りが、女子の共通見解だろうか？
「……戦うさ。勝ちたいとも思うけど、代表候補生ってかなり強いみたいだしな。とりあえず、何も出来ずにやられるなんてことにはならないようにしたい。したいんだが……」
格好良く引き締まっていた顔が、情けなく崩れる。

「このままじゃ、どうにもならないかもな……」
小さく息を吐く。
辰美に教えて貰い、代表候補生のことも勉強した。その結果として感じたのは、自分と相手の、絶望的な差だ。
ＩＳの操縦は、基本的にはイメージだ。どんな行動をするのか、頭の中でしっかりイメージできなければ、十全に動かすことなど夢のまた夢である。
それは、ＩＳに乗った時間が長ければ長いほどイメージしやすくなる。つまり、長い時間ＩＳに乗っている方が、動作がしやすく、機敏に、かつ精確に反応できる。
攻撃にしろ、防御にしろ、素早く、精度が高い方が力を発揮しやすい。
代表候補生なら、すでに３００時間オーバーの操作経験があるだろう。
対する一夏は、僅か２０分。
この時点で差は歴然である。
また、ＩＳは、ある種の意識。自我に似たものを有するらしい。それは、ＩＳを展開した時間に比例して相手と自分の相互理解を深め、機体の特性をパイロットに併せて調整してくれる。無論、手作業での調整も必要だ。
これを繰り返すことで、最適化し、機体とパイロットは一体となっていく訳だ。
つまり、ＩＳと付き合いが長ければ長いほど、パイロットとＩＳの調和が取れ、互いの力を引き出していけるのだ。
代表候補生なら、専用機にも長い時間接しているだろう。反対に、一夏は未だ訓練機にしか触ったことはない。
機体の操作能力、最適化係数。ＩＳでの戦闘で、もっとも重要な、この二つの要素で一夏は大きく後れをとっていた。
「なあ、箒、辰美……」
「な、なんだ？」

「どうしたの？　一夏」
声をかけられた二人は、一夏の方へ顔を向ける。
すると、手を打つ軽妙な音と共に、一夏が頭を下げた。
「たのむ。ＩＳのこと、いろいろ教えてくれ」
「くだらん挑発に乗るからだ。馬鹿者め」
バッサリ斬り捨てる箒。その横で、辰美が小さく笑う。
「まあまあ、落ち着きなよ箒。ボクは構わないよ？　とりあえず、放課後に一夏の専用機見てみようよ。機体の特性によってはうまく立ち回れるかもしれないし」
「そうやな。アタシも手伝ったるわ。面白そうやし」
辰美の言に、フラウがのっかり、一夏の表情が明るくなる。
それを見て面白くないのは箒だ。最初に斬り捨てた自分が、薄情な人間に思えてくる。
「……仕方ない。私も教えてやろう。感謝するが良い」
少しツンと顎を上げて宣ずる。その様子に、一夏と箒以外の全員が、微笑ましさを感じていた。
「はいは～い、わたしも手伝うよ～」
そんな声が聞こえ、余った袖が、ブンブンと振り回された。
「え？　良いのか？　えっと……のほほんさんだっけ？」
「う～ん、布仏本音だよ～。でも～その呼び方も良いかも～♪」
いきなりあだ名っぽく呼ばれた本音だったが、その呼び方が気に入ったらしい。ニコニコ笑いながら頷いている。
「よし！　そうと決まれば、今日の放課後からだな。一応、千冬姉のおかげで第三アリーナが使えるから、そっちで特訓だ！」
力強く宣言する一夏に、協力を約束した四人が頷いた。

ピットに足を踏み入れた瞬間、一夏は懐かしい雰囲気を感じた。
そこにいるのは『白』。

ただただひたすらに白い。

雪のように。

雲のように。

光のように。

ただ、白く、そこに、在る。

その、『無』を象徴するかのような『白』い鎧が、『彼』を待っていた。

ゆっくりと、見入るように、純白のソレに触れる一夏。

軽い驚きの後、納得するように目を細める。

「じゃあ、準備は良い？　背中を預けるようにして、座るみたいな感じで。うんそれでＯＫ。あとはシステムの方で最適化してくれるから」

辰美に指示されながらも、戸惑うことなく体をＩＳに預けていく。

展開していた装甲が閉じ、空気の抜ける音が響く度、白い装甲と彼が融和し、馴染んでいく。彼を包み込んだ鎧と彼が『繋がり』、感覚が広がっていく。

「あ」

ふと漏らす。辰美や箒、フラウにのほほんさん。少女たちの挙動

がわかりすぎるほどに伝わってくる。
特に、箒と辰美。彼女らの微細な表情のブレは、彼の身を案じていることを示唆していた。
「だいじょうぶ？　一夏。気分が悪いとかない？」
「ああ、大丈夫だ。辰美、箒」
二人に笑顔を向けながら応えてやる。
それに小さく息を吐く二人の少女。
「うん。じゃあ、そのまま初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）するよ。フラウ、本音さんサポートよろしく」
「任しとき～」
「はいは～い。たつみーも、のほほんさんって呼んで～」
そんな風に答えながら、二人は端末に向かう。
「……俺のＩＳ、【白式・虹】か。どんな機体なんだ……？」
そんな風に、少しわくわくしている一夏は、武装一覧を呼び出した。そして、表示された武装に目が点になる。
一方で、パラメータをチェックしていたフラウも目が点になっていた。
「なんじゃこりゃあっ？！」
「なんやこれえっ？！」
奇しくも、二人の叫びは同時だった。

第七話（後書き）

第七話、いかがでしたでしょうか？
ようやく一夏のＩＳ、【白式・虹】の登場です♪
これからもよろしくお願いしますね♪

第八話（前書き）

第八話、更新です♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第八話

「何だこりゃっ？！」
「何やこれぇっ？！」
奇しくも同時に飛び出した、素っ頓狂な声に、レオタードのようなＩＳスーツに身を包んだ黒髪ポニーテールなサムライ娘、篠ノ之箒と、同じくＩＳスーツを着た、こげ茶色の髪をサイドテールにした少女、東野辰美は目を丸くした。
「ど、どうした一夏？！」
「どうしたの？　フラウ。何か問題が……？」
二人の声に、その身を鋼の鎧、ＩＳに収めた、短めの黒髪を軽く跳ねさせた少年、織斑一夏と、ＩＳスーツ姿で端末を凝視する金髪ショートヘアの小柄な少女、フラウことフラウディア＝Ｏ＝ウエストロードはそれぞれに声をかけてきた相手に顔を向ける。
「……武器が、一つしか無え」
「拡張領域（パススロット）があらへん……」
「ものすごく思い切った仕様だねー」
半ば呆然とつぶやくように声を絞り出した二人に続けて、完全に人事な、のんびりした声が聞こえてくる。
サイズの合わないダボついたＩＳ学園の制服を着た、のんびりした雰囲気の少女、のほほんさんだ。
「武器が一つだと？！」
「スロットが無いって、嘘でしょ？！」
一夏とフラウの返答に、箒も辰美も思わず声を挙げる。
ＩＳは、基本兵装以外は拡張領域（パススロット）に量子変換（インストール）して、登録しなければ使用できない。登録した装備以外を使用しようとしても、トリガーを引くことも出来ないし、白兵武装を握ることも出来なくなっている。

兵装の方も登録されなければトリガーはロックされて使用できなくなっている。無論、ロックを外せば、ＩＳを展開していなければ、生身で使用することも可能だが、基本的にＩＳに搭載して使用する兵装は、ＩＳによって運用されなければならない作りになっており、生身で振り回すには大きすぎ、重すぎ、反動が強すぎる。

これを補ったり、制御したり、打ち消したりする機構は、ＩＳの性能に任せてしまっている。

従って、生身でＩＳ用兵装を扱うのは不可能事に近い。

一夏の【白式・虹】は、基本兵装が一つしかない上に、後付け装備（ライザ）も登録できないため、この基本兵装一つで戦わなければならない仕様ということになる。

本来なら、ＩＳには主兵装、副兵装あわせて、三つくらいは装備されているものだ。それがたった一つというのは、異端過ぎるほど異端であると言える。

「一夏、ちなみに登録されてる装備は何？」

一縷の望みを託すように、辰美が一夏に訊ねる。汎用性の高い兵装なら、何とかなると踏んだようだ。その表情には不安と期待が入り交じっていた。

そして返ってきた答えは。

「……近接ブレード一本だ」

絶望的な内容だった。

一夏たちが、【白式・虹】の、ある種イジメのような仕様に落ち込んでいる頃。そこから少し離れた整備棟、第三整備室に彼女の姿はあった。髪はセミロング。水色のそれは、くせっ毛のようで、内向きにはねているのが特徴だ。顔にかけた長方形レンズの眼鏡の向こうに見える目は少し細い感じだが、どことなく虚ろにも見える。

その手はひたすらにメカニカル・キーボードを打ち続け、目は空

中投影ディスプレイの表示を追っていく。
そんな彼女の前に鎮座するのは、装着解除してひざまずかせた愛機【打鉄弐式】。
機動性を重視した、独立型ウイングスカート。大型ウイングスラスターとそれを挟むように配置された補助ジェットブースターが搭載された肩部ユニット。
そのシルエットは、どこか【白式・虹】に似ているものだ。
それもそのはず、【打鉄弐式】と【白式・虹】は、同じ倉持技研の開発だ。
だがしかし、倉持技研が【白式・虹】を最優先とし、すべての人材を、その完成に回したため、【打鉄弐式】は完成度７０％で放り出されることとなった。
無責任この上ない話である。
おかげで少女は、日本の代表候補生でありながら、未だ専用機がないのだ。
そして、彼女は未完成の愛機を持ち出し、自分の力で完成させようと奮闘しているのだ。
そんな彼女、更識簪の目の前で、ｅｒｒｏｒの文字が踊る。
「……また、はじかれた……」
プログラムを組み、パラメーターを調整する簪。しかし、ディスプレイに写るは、またもやｅｒｒｏｒ。
「……どうして？」
小さくつぶやき、下唇を噛む。
と、突然簪の横から手が伸びてキーボードを素早く叩いた。
「ここの記述はこうでないと通らないわよ？」
言いながら打ち込まれた記述でＯＫが出る。
しかし、そんなことよりも簪は、いきなりの乱入者の存在に驚いていた。
「だ、誰っ？！」
伸びてきた手の方へ顔を向けると、そこにはセーラー服に白衣を

引っかけた、柔らかそうなくせっ毛の女性が居た。
「む、訊ねられれば、答えずにはいくまい。世界一の美少女博士、皇見翔華ちゃんたぁあたしのこてよん♪」
そう言ってウインクひとつ、飛ばしてみせる翔華。それを見た簪は、ひとつ首を傾げる。
「……少女？」
「絶望したっ？！　子犬系メガネっ子の容赦のない一言に、絶望したぁっ？！」
両手両膝を地について、土下座のような姿で叫ぶ翔華。その勢いに、簪はまったくついていけない。
「……あ、あの？」
「なに？」
遠慮がちに声をかけると、すぐさま顔をあげて、にこやかに返事をする翔華。
その変わり身の早さに、簪はちょっと引きつつも軽く頭を下げた。
「あ、ありがとう……ございます……」
「いいのよん♪　この翔華さんは、世界のカワイイ美少女たちの味方なんだから♪」
簪のお礼に、翔華はニコニコ笑いながら答える。
「……後は……自分で……やりますから……」
「無理だと思うわよ？」
後はひとりでやると言う簪を、ばっさり切り捨てる翔華。
何の躊躇も遠慮もなくそう言われて、簪は面食らう。
「で、でも……私はひとりで……」
完成させなきゃいけない。と、続けようとした簪の唇を、翔華の人差し指が押さえる。
「なにをあせっているのか知らないけど、この状態からでもＩＳを一人で完成させられる人間は、そうはいないわよ？　確かによく勉強はしているけど、基本的な知識が足りてないわね。私の手を借りるのがイヤでも、専門の勉強をしている子に助言を貰わないと難し

いわよ？」
「……それでも、わたしはやらないと……あの人の影にすら近づけない……」
翔華の言葉を受けつつ、簪は彼女の手をどけて言葉を吐き出す。
その様子を見た翔華は、あごに手をあてた。
「ふむ。目標とする人がいるわけねえ……。まあ、そうまで言うなら止めないけど、‘その子’、かわいそうじゃないかしら？」
「……え？」
翔華に言われて、簪はきょとんとなる。
「‘その子’よ。あなたの相棒になるその機体のこと」
「あ……」
翔華に言われ、簪は声を漏らした。
「あなたがツライ思いをして、ひとりで頑張っているのを間近で見ている‘その子’も、きっとツラいわよ？」
「……」
翔華の言葉に、なにも言えず、口をつぐむ簪。
「まあ、どうするかはあなたしだい。ＩＳを‘道具’にするか、‘相棒’にするか。よく考えてちょーだいな」
そう言って、翔華は白衣を翻しながら去っていった。
だが簪は、それを見送ることなくうつむいたままだった。
「……」
目の前にたたずむ、物言わぬ愛機に手を伸ばす。
「……【打鉄弐式】」
つぶやく言葉は、霞のように宙空へ舞っていく。
「ごめんね？　【打鉄弐式】。あなたは、私が何かを証明するための道具じゃないのに……」
力無く、ライトグレーの機体へ額を当てる。
「……ごめんね。こんな私が相棒で……」
そのまなじりから、澄んだ滴があふれ始め、簪の頬をなでていく。
「……代表候補になって、あなたを預けられるって聞いて、あんな

にうれしかったのに。一緒に歩いていきたいって、思っていたのに……」
いくつものクリスタルの輝きをこぼしながら、簪は【打鉄弐式】を抱きしめる。
「……ごめんね？　【打鉄弐式】。一緒に……頑張ろうね？」
簪のその言葉に、【打鉄弐式】の機体がうっすらと光を放った。
まるで、簪に答えるように。
優しく、抱きしめるように。

一方、アリーナでは、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理を終えた【白式・虹】をまとった一夏と、箒、辰美、フラウが集まっていた。
もうひとりの協力者、のほほんさんは、知り合いから連絡がきて、そちらへと行ってしまった。
そんなわけで人数は減ってしまったものの、いよいよ実機を使っての訓練となったわけだが……あらためて【白式・虹】の仕様を見て、四人は頭を抱えた。
「たしかにスペックは高いんやけどなあ……」
空中投影ディスプレイに表示されたパラメータをながめて、ぼやくフラウ。
「武器は近接ブレード【雪片弐型】一本のみ……か」
その横で、箒もあごに手をあてて考え込む。
「まあ、一次形態移行（ファーストシフト）で、単一仕様能力（ワンオフアビリティー）を獲得したのには驚いたけど、どうしようか？」
辰美も少し困ったようにつぶやく。
そう、【白式・虹】には単一仕様能力（ワンオフアビリティー）が発現した。本来、第二形態からでなくては獲得できないと言われている単一仕様能力（ワンオフアビリティー）は、獲得できないことも珍しくはない。
それが、第一形態で獲得するなど、イレギュラーも良いところだ。

「けど、【雪片弐型】か……。千冬姉の【雪片】の後継バージョンってとこかな」
一方で、唯一の武器である【雪片弐型】を展開した一夏は、嬉しそうに目を細めて、それをながめていた。敬愛する姉の愛刀。その後継ともなれば、嬉しいことこの上ない。
その様子を見て、箒がため息をつく。
「一夏……おまえという奴は……。みながお前のために頭を悩ませているというのに……」
「仕方ないよ。織斑先生の愛刀、それの正式な後継なんだし」
「そうやな。世界でただひとつの武器でもあるしな」
辰美やフラウに言われて、箒も確かにとうなずいてしまう。
そこで辰美が頭を切り替えるべく、手のひらを打ち合わせる。
「さてと、ボクや南波ちゃんとの対戦はともかく、オルコットさんとの対戦に照準を合わせるってことで良いかな？　一夏」
「ああ。もともと俺とセシリアのやりとりだったわけだしな」
売り言葉に買い言葉でもあったが、根本的には一夏とセシリアの喧嘩には違いない。それに南波が参戦し、辰美は巻き込まれた形だ。
「そっか……じゃあ、とりあえず短期速成って形でいこうかな？」
「短期速成？」
にこやかに笑いながら言う辰美に、一夏は問い返す。
「スパルタって事だよ。とりあえず、ＰＩＣとパワーアシスト、切っちゃって」
「へ？」
「その状態で基礎トレーニングと素振りだね」
「わ、わかった……ぐっ？！」
辰美の指示に、素直に従った一夏は、ＰＩＣとパワーアシストを切る。
次の瞬間、彼の全身に、ＩＳの全重量がのしかかった。
そのまま崩れるようにひざを着き、両手も地面に着いてしまう。
「はい立って立って。そのままグランド一周しようボクもつき合う

から」
そう言うと、辰美は蒼い手甲のはまった左手を握りしめて脇を締めて腰だめに構え、軽く足を開いて立つ。
伸ばした右手は左上へと向かい、左肩より高い位置まで上がる。
そのまま右腕を大きく回し、後ろへ引いていきながら拳を固めて右腰へ。それに連動するように腰を回転させ、左手を胸元まで持ち上げ、握りしめる。
「変身！！」
かけ声とともに辰美の全身が光に包まれたかと思うと、蒼い機体が姿を現す。
頭はラインアイタイプのバイザー型ハイパーセンサーに顔半分が隠れている。
両肩には蒼い箱状の非固定浮遊部位（アンロックユニット）が浮かんでおり、そこから、辰美の腕とは別に、大型の太い腕が伸びている。
腰には、お尻を半分隠すように、曲面を持ったウイングバインダースラスターが斜め後ろ下方へと伸びる。
脚は細身のブーツのようなアーマーに包まれているが、それを外側から補助する外骨格ユニットも配されており、足底部にはクローラーユニットも見える。
さらに、特徴的なのは、ボディ前面に、非固定浮遊部位（アンロックユニット）のように浮遊している、いくつかの、角張った蒼い涙滴状のパーツだ。
非固定浮遊装甲（アンロックアーマー）と呼ばれるこの装甲パーツ。ボディ前面のみならず、脚や臀部、腕部脚部にも配置され、浮遊している。
蒼い巨体の四つ腕のＩＳが、そこに在った。
「……辰美、それって……」
その出で立ちに、一夏が問いかける。
辰美は、バイザーを上げて顔を見せると、にこやかに笑いながら答えた。
「これがボクの専用機、【春雷】だよ♪」
「専用機持ちだったのかっ？！」

辰美の言葉に、箒が驚きの声をあげた。
するとフラウが、イタズラがうまくいった悪ガキのような笑みを浮かべる。
「にししっ♪　あたしとたつみーにななっち、武ちゃんは南賀重工専属のテストパイロットやねんな。今回、試作型の第三世代機のテストを兼ねて、保持しとった開発用の四つのＩＳコア全部をこっちに回しとんのや」
言いながらフラウの姿も光に包まれる。
それが収まったとき、そこには、なめらかな全身鎧に身を包んだフラウの姿があった。その手足には、大型の爪が折り畳まれているものの、ＩＳの特徴のようなウイングなどは全く無い、実にシンプルな姿をしている。
フルフェイスの面頬が跳ね上がり、中からフラウの顔がのぞく。
「んで、これがあたしの専用機【ヴァイスティーガー】や」
ニコニコ笑いながら名前を告げるフラウ。その様子を見ながら辰美も口を開いた。
「さて、始めよっか。やること、覚えること、いっぱいあるからね♪」

第八話（後書き）

第八話、いかがでしたでしょうか？
まだＩＳ動かしてません（苦笑）
今回は、簪さんが大変でした。こんな感じかなあ……。
まあ、ゆっくりじっくりまったり進めてゆきますので、これから
もよろしくお願いします♪

第九話（前書き）

第九話、更新です♪

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第九話

タイガーストライプの白い人型が、空を切り裂き、天を走る。大地を頭上に仰ぎ、青空をフィールドに、光跡を曳きながら、天空を“滑走”する。

足元から発する光のラインがＳ字を描き、蛇行するように後ろへと加速していく。

その両手に一丁ずつ握られた、短機関銃【天嵐】からは、１５．２ｍｍの銃弾が途切れることなく吐き出され、連なる破裂音を曳きながら獲物へ向かっていった。

その１５．２ｍｍの猟犬どものあぎとを見て、白い大きな羽と小さな羽を広げた騎士の少年は、大きく体を振って、左前方へ滑り込み、ついで右上へと飛び出していく。手にした刃を振りかぶり、タイガーストライプのそれへ切りかかる。

が、相手は付き合わないとばかりに迫る刃をくぐり抜け、少年の脇をすり抜ける。

「くそっ！！」

必殺の刃をかわされ、少年、織斑一夏は悪態をついた。

ＰＩＣ、パワーアシストを切ってのランニングと素振り。軽い準備運動だけで、一夏はアゴが出た。

本来なら装備の重量など毛ほども感じることのないＩＳだが、その補助を失っただけで、かなりの重量が全身にかかる。

もっとも、ＩＳを構成するフィールドの効果もあるため、本来の重量の数分の一にしかならないが、生身の人間にとってはかなりキツい。

それでも、余計な装備が一切無く、小型なフラウの【ヴァイスティーガー】はまだしも、己のまとう【白式・虹】より大型でボリュームのある【春雷】をまとった辰美よりは負担は軽いはず。
そう思っていた分、四つん這いになって息をするので精一杯な自分と、汗をかき、軽く息を乱すだけでしゃっきりと立っているサイドテールの彼女という結果に、ざっくりへコむ少年。
「じゃ、息を整えたら次に行くからね」
何でもないように言う辰美の声を聞いて、一夏は促成コースを選んだ少し前の自分を殴りたくなった。
軽い休憩でも、体がすぐに落ち着くのは、ＩＳの生体調整機構のたまものだろう。しかし、土台となる自身の肉体が貧弱では話にはならない。
本来なら、基礎体力を付けるのが最優先だと辰美は言う。
しかし、セシリアや南波、辰美と対戦することを考えて促成コースを選んだ以上、ある程度詰め込んでいかなければならない。
「……っていうのはわかるんだが、アシストやＰＩＣを切ったのは、体力付ける為なのか？」
軽く浮かんだ疑問を投げかける一夏。それに対して辰美はいやな顔ひとつせずにうなずいてみせる。
「うん、それもあるけど、一番は【白式】に一夏を知ってもらうためだね」
「【白式】に俺を知ってもらう？」
返ってきた答えに首をひねる織斑少年。そのしぐさに、辰美が小さく笑う。
「そう。授業でもやったけど、ＩＳには意識のようなものがあるんだよ」
「……ああ山田先生が言っていたやつだな。ブラがどうとか言っていたが……」
辰巳に言われて授業風景を思い出した一夏は微妙そうな表情になった。

それを見た箒がポニーテールを揺らしながら顔を赤くする。
「な、なにを想像してるんだ一夏！」
「なにって、ブラジャー？」
事も無げに答える彼に、箒の顔が一層赤くなる。
「な？！　い、一夏！　き、きさまいつからそんな破廉恥漢に……」
「落ち着きなよ箒。ブラジャーくらい別にいいじゃない。たかが下着なんだし。大体見られたら恥ずかしい部分を隠すためのものなんだから、別に見られたってどうってことないし」
「まったくだ。俺なんて、昔から千冬姉の下着を洗濯してるんだぞ？　いまさらブラジャーひとつでどうとも思わねえよ」
辰美と一夏、二人でそんなことを言い始め、箒は開いた口が塞がらなかった。
「お、お前ら……」
肩を震わせ、拳を握る箒。その向こうでフラウが密かに距離をとる。
「？　なに？　箒」
「？　どうしたんだ？　箒」
箒の様子に首を傾げる辰美と一夏。その態度に、箒のなかで、何かがちぎれた。
「お前等そこに直れっ！！　その間違った常識、叩き直してくれるっ！！」
「「は、はいぃぃっ！！」」
それから三十分、ＩＳを装着したまま正座させられた二人は、下着の認識について、箒にこんこんと説教された。
ちなみに箒は、後になって死ぬほど落ち込んだらしい。
そんなどうでもよいエピソードを含みつつ、訓練は続き、軽く模擬戦をすることになった。
まずはフラウの【ヴァイスティーガー】との対決。
一夏の勝利条件は一撃入れること。
フラウの方は【白式・虹】のシールドバリアを０にすること。

あからさまなハンデマッチだが、すぐに一夏の表情が変わった。
なにせ、【雪片弐型】の間合いに入ることができないのだ。
たまに切り込んでいく事が出来ても、避けられ離脱されてしまう。しかもカウンター気味に短機関銃をばらまかれ、少なくないダメージを受ける。
「くそ、当たらねえっ！」
悪態をつきながら振り向けば、体をひねってこちらを向いた【ヴァイスティーガー】が、右手に持った短機関銃を撃ちながら、螺旋を描くように遠ざかっていく。
「待ちやがれっ！」
「鬼さんこちら～や♪」
オープンチャンネルで聞こえてくるフラウの余裕そうな声が、彼の神経を逆なでする。
「くそ！　逃げるな！」
叫んでスラスターを噴かす一夏。【ヴァイス】を上回る速度で突撃していくが、あっさり避けられる。
『一夏落ち着いて。自分と相手の機動をよく考えて飛ばないと、間合いには入れないよ』
地上から辰美の声が彼の耳元に届く。が、頭に血が上っているのか右から左へ抜けているようだった。
「畜生、弾幕を張っている相手に近づくのがこんなに難しいなんて……。こうなりゃ被弾覚悟で」
つぶやいて【雪片】を握りしめる一夏。その間にもフラウは、青い空を“滑走”していく。
それをみていた箒が、ふと口を開いた。
「……しかし、フラウのあの挙動は何なのだ？　ＩＳの飛行はもっとぐうぅんとして柔軟なはずだが……」
「あーあれね。【ヴァイスティーガー】の特殊装備、【天之道】だよ」
箒の口をついた疑問に、辰美が答える。それに対して顔を向けた

箒は、さらなる疑問を問うてきた。
「【天之道】？　なんだ？　その装備は」
「空間圧作用を利用して、空間に“爪を立てる”んだよ。“空間スパイク”って言うんだけどね。これをライドローラーに装備して、空中を“滑走”出来るようにしたのが【天之道】だよ」
模擬戦の様子を眺めながら答える辰美に、箒はなるほどとうなずく。が、すぐに何か思い当たったようだ。
「しかし、ＩＳにＰＩＣがある以上、あまり意味のある装備ではないのではないか？」
箒の言葉に、辰美は軽くうなずいた。
「うん。単純に飛行するだけなら、ＰＩＣとスラスターの組み合わせだけで十分だね。まあ、違うアプローチの飛行機能があるっていうことに意味があるんだよ」
「？　それはどういう……」
「見て」
辰美の言葉に、首をかしげる箒。
その目の前に、空中投影ディスプレイが浮かび上がり、一夏とフラウの対戦を映し出した。
空中を“滑走”しながら短機関銃を撃つフラウ。一夏はそれを必死で追いかけていく。
一夏も慣れてきたのか、弾幕を避ける際の無駄が無くなってきていた。
「被弾覚悟でなんて言った時はどうしようかと思ったけど、結構落ち着いてきたみたい」
「ああ、一夏は集中していると、冷静に力を発揮するからな」
言いながら箒はそのときの一夏を思い浮かべたらしく、頬を緩め、朱を散らす。辰美はそんな箒を微笑ましく思ったか、柔らかく笑っている。
「んん。で、改めて【天之道】だけど、ＰＩＣとスラスターを組み合わせた、なめらかな挙動とは違って、挙動に鋭さがあるよね。空

中を足場にしているから、空を飛んでいるにも関わらず、地に足を着けたような行動も取れる」
　言いながら辰美が指さした先で、フラウがブレーキングから直角に曲がりそのまま壁面を駆け上がるように上昇していく。
「もちろんＰＩＣでも似たような事は出来るけど、あんなにかっちりしたブレーキングは無理なんだよ。ＩＳの慣性制御は完璧じゃあないしね」
「……確かにな。おかげで刃に体重を乗せることも出来るが」
　辰美の説明に相づちを打つ箒。
「うん、手で振り回すだけの刀なんてなまくらと変わらないしね。で、足場があるから足の踏ん張りも効かせられるし、体重移動も出来る。そして重要なのは……」
「脚力を生かせる」
「……正解」
　答えた箒に、辰美はバイザーを跳ね上げて笑いかける。そして、ディスプレイに視線を戻して口を開く。
「たぶんそろそろフラウが‘アレ’を見せてくれると思うよ」
「‘アレ’？」
　自分の言葉に問い返してきた箒に首肯して見せる辰美。
　ディスプレイの向こうは終盤を迎えつつあった。

「そろそろ仕掛けんでー」
　【白式・虹】と距離をとりながらひたすら短機関銃を撃ちまくっていたフラウがそんなことを言い出す。
　それを聞いて、一夏は【雪片弐型】を青眼に構えた。
　フラウも空中で左足を折りまげ、右足を後ろへ伸ばしながらブレーキをかけ、両手の短機関銃を投げ捨てた。

瞬間。

その姿がブレる。刹那に【白式】の肩が弾けた。

「ぐぅ、あっ？！」

衝撃で肩が引っ張られ、痛みに顔をひきつらせる一夏。

〈バリアー貫通、ダメージ３１。シールドエネルギー残量、３８５。実体ダメージ、レベル低〉

表示されたダメージに、一夏の顔が歪む。

〈警告、上方より敵、接近〉

警告に反応するより早く、【白式・虹】のオートガードが発動し、攻撃を避ける挙動を採る。

次の瞬間には白い閃光が走り、機体に衝撃が走る。

〈バリアー貫通、ダメージ３４。シールドエネルギー残量、３５１。実体ダメージ、レベル低〉

受けたダメージに歯噛みする一夏。そのときには新たな警告が出ていた。

「い、一夏っ？！」
幼なじみのピンチに、思わず声を上げる箒。
画面では、光の尾を曳いた白い閃光が、一夏の【白式・虹】を弾くように一撃を加えては離脱していく。
「あれがフラウが得意としている近接戦闘用陸戦マニューバ、〈ファントム〉だよ」
「〈ファントム〉……近接戦闘用陸戦マニューバだとっ？！」
辰美の思わぬ言葉に、箒は驚きの声をあげる。
「そ。第一世代から第二世代初期、まだＩＳの運用法が暗中模索していた頃に作られた、今は使う人がほとんどいないマニューバだよ」
「……」
箒は開いた口がふさがらなかったが、辰美は気にせずに続ける。
「パワーアシスト込みの脚力を基点とした全身のバネと、スラスター操作。そして、ＰＩＣマニュアルコントロールによって、瞬間的（イグニッションブースト）にトップスピードに上り詰めるマニューバだよ。今でこそ瞬時加速の方が有名だけど、陸戦なら〈ファントム〉だって引けを取らないよ」
「だ、だが、あのスピードは……。それに空中だぞっ？！」
辰美の説明に、箒は再び声を荒げる。それに対して辰美は首を縦に振った。
「うん。本来ならあり得ないんだけど、【天之道】が、それを可能にしてるんだ。空間スパイクで空を地面にして踏み切りながら、ライドローラーもスラスターも使ってる。おまけにＰＩＣをコントロールして、相手に向かって，落ちて，いくんだよ。もちろん、これらすべてのタイミングはフルマニュアル。ブレーキングも同じだからあれだけの機動が出来る人はそうはいないと思う。おまけにあのスピードだしね。そう簡単に対処は出来ないよ」
「そんな……。では、一夏は、このまま……？」
箒は、その形の良い眉を八の字にし、握った拳を胸に抱くように

しながら彼を見上げる。
その隣で、辰美は【春雷】ハイパーセンサー越しに一夏の横顔を見ていた。
「……大丈夫。一夏はあきらめてないよ」
箒に聞かせるように、自身に言い聞かせるようにつぶやく辰美。
しかし、その瞳は心配げに揺れていた。

そう、一夏はあきらめていなかった。初めはフラウの【ヴァイスティーガー】の〈ファントム〉の速度にまるでついていけなかった。
しかし……。
「（よし、徐々に反応できるようになってきた！）」
少しずつだが、攻撃を防御できるようになってきていた。
一方でフラウもそのことに気付いていた。
「（イチやん、もう対応し始めよった。大したもんやでこいつは）」
二人がそんなことを思っている間も、ヒット&アウェイは続けられている。
そして。
「！　そこだっ！」
伸びてきた気配に合わせ、【雪片弐型】を振るう一夏。右手のブレードと、【ヴァイスティーガー】の腕部に装備された展開式ビームクロー【白虎爪】が激突する。
双方の武器がはじかれ互いに機体を吹き飛ばされる。
「ぐっ？！」
「おぉお？！」
衝撃に耐え、【白式・虹】の自動復帰で体勢を立て直す一夏。
一方のフラウは体をひねって猫のように，空中に，着地し、即座に〈ファントム〉で襲いかかる。
が、一夏はこれにしっかり反応した。

そのとき、【白式・虹】の背面に装備された立方体を半分に輪切りにしたようなユニットの両脇に小さな翼を備えた四角柱から、虹色の輝きが漏れ始めていた。

『おー。さっすがは、いっちゃん。もう【マインドブースター】の初期起動が始まるなんて……。うふっ♪　うふふふふ……♪』

第九話（後書き）

第九話、いかがでしたでしょうか？
次回もよろしくお願いしますね♪

第十話（前書き）

第十話、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第十話

「こ、こいつは……」
目の前に踊る表示に、一夏は面食らっていた。

〈特定のパイロット精神状態を検知、特殊装備“マインド・ブースター　Ｖｅｒ．３．５６”の初期起動を開始。この装備は、パイロットの精神状態によって機体の最適化を促し、常に最大効率で動けるよう調整するもので、併せて戦闘出力の……〉

「マ、マインド……ブースター？　こんな装備無かったはずだぞ？」
混乱する一夏であったが、首裏に鋭く熱さを感じて体を避わす。すると、白地にタイガーストライプで、全身装甲（フルスキン）のＩＳ、【ヴァイス・ティーガー】が、両腕に備えた、折り畳み式ビームクロー【白虎爪】を展開して襲いかかろうとしていたところだった。
「あ、危ねぇ……」
『おー、今のを避けるんか。やるやないかイチやん』
オープンチャンネルで飛んでくる、【ヴァイス・ティーガー】のパイロット、フラウ事、フラウディア＝Ｏ＝ウエストロードの感心したような声に何も返せない一夏。それもそのはず、避けた次の瞬間には、次の攻撃が飛んでくるからだ。
その一つ一つに反応できるようになったとはいえ、返しを決められるような余裕はない。
現に、避けたと言っても、シールドバリアをかすめているようで、２〜３点のダメージを受けている。
その状況に一夏は思考を巡らせていく。すると、いきなり表示が

出た。

〈シールドバリア効果範囲再設定開始。ＰＩＣとの干渉を確認、再々設定開始。再々設定完了。パイロット挙動に対する機体再最適化完了。“マインド・ブースターＶｅｒ．３．５６”の初期設定完了。マンマシンインターフェイス、ダイレクトリンク開始。同調率６３．０……６７．２……７１．４……７５．６……７９．７……８２．７……８５．５……８８．３〉

急速に感覚が広がり、視界がクリアーになる。鋼の鎧が、己の血に、肉に、すべてが融け合うような一体感。

ＩＳに初めて触れたときに感じた、あの……。

次の瞬間、振り返りざまに【雪片弐型】を振るう。刃は寸分違わず、ビームクロウ【白虎爪】を受け止めていた。

表情の見えないはずのフルフェイスのマスクが驚いたように震え、即座に離脱する。

虹色の翼を広げた【白式・虹】は、その白き虎を追撃しようとして、つんのめった。

〈警告。現在の身体能力では、最大同調に対応仕切れません。現状で“マインド・ブースター”の使用は、１０秒が限界と判断。リミッターを構築します〉

みるみるしぼんでいく虹色の翼。

「て、ここまで引っ張ってこのオチかっ？！」

思わず叫んでしまう一夏。その視界の端に、白い閃光を感じて反射的に体を避わしながら【雪片弐型】を振るう。

避けられないタイミングのカウンターが、【ヴァイス・ティーガ

ー】の装甲へ振り降ろされる……。

「あー、やっぱり完全には無理かあ」

第三アリーナのねじれた塔のてっぺん近くで、その女性は密かにつぶやく。

皇見翔華。篠ノ之束には知名度で劣るが、ＩＳにちなんだ企業では知らぬものが居ないほど有名な人物だ。

その行動は突拍子もなく、その時々の気分しだいで、世界的な発見から、どうでも良い発明までこなす人物だ。

「まあ、この段階で初期起動できただけでも大したものよね。あれを起動するのに必要な集中力は、それこそ達人レベル。いいわよねえ。そのままヒーローになっちゃいなさいよ、いっちゃん……そして、おねーさんの敵になっちゃいなさい♪」

その口元に浮かぶは愉悦。空虚な顔に張り付いた、それは、薄ら寒い。

「……そして、おねーさんとにゃんにゃんする関係にっ！！　くあっ！！　萌えるっ！！　敵味方に別れた男女、しかしその関係は体を重ね、融け合うものっ！！　いけないと知りつつも、二人は逢瀬を重ね、その愛を確かめ合うっ！！」

一人で盛り上がり、己の体を抱きしめ体をくねらす翔華。

その顔は恍惚となり、鼻血とヨダレがちょっぴり漏れていた。

「あぁしかしっ！！　だがしかしっ！！　運命は二人を引き裂くのよっ！！　やんやんやん☆」

抱きしめた体を思い切り左右に振る翔華。勢い余って足を滑らす。

「あ。」

真っ逆さまに塔から落ちていくが、途中で白衣をたなびかせ、ふ

わりと浮かび上がった。
「失敗失敗。まあ、今日はこれ以上の進展は無いだろうし、かえろーっと」
白衣のポケットに両手を突っ込み、鼻歌を歌いながら空を滑るように移動する翔華。わりとシュールなその絵面は、誰の目にも写らなかった。

「なんだそりゃっ？！」
その光景を見て、一夏は絶句した。
絶妙なタイミングでのカウンター。その刃は、確かに【ヴァイス・ティーガー】に叩き込まれたはずだった。
しかし、彼の握る【雪片弐型】の物理刃は、ある位置にがっちりと止められていた。
【ヴァイス・ティーガー】がとっさに繰り出した蹴り。その足裏の‘空間’に。
あわてて刃を引こうとする一夏だったが、【雪片弐型】は、万力でがっちり挟まれたように動かない。
「くそっ、動かねぇっ？！」
『いやあ、今のタイミングは危なかったわ』
オープンチャンネルで飛んできたフラウの声は余裕そうだった。
『ま、装備に応用利かせれば、こないなことも出来るいうことやんな』
「く……！」
悔しげに歯噛みする一夏。
『まずは右腕いただきや』
フラウの声と同時に脚の両側とふくらはぎ埋め込むように折り畳まれていたパーツが立ち上がり、足首を中心にした三本の牙を作り出した。

その顎に食らいつかれるようにして、【白式・虹】の右腕ＩＳアーマーは砕かれた。
「うわあぁぁあっ？！」
思わぬ衝撃に声を上げる一夏。その様子を見ていた箒は口を押さえてしまう。
「一夏……！　辰美！　あれはなんだ？！　【ヴァイス・ティーガー】にはあんな装備まであるのかっ！？」
思わず隣に立つ辰美に食ってかかる箒。しかし、辰美はかぶりを振る。
「【ヴァイス・ティーガー】には、相手を拘束するような装備は無いよ。あれは、【天之道】の効果だよ」
辰美の答えに、箒は目を丸くする。
「【天之道】だと？　あれは空中を足場として滑走する装備だと、先ほど言っていたではないかっ！」
「うん。本来【天之道】はそういう装備なんだけどね。フラウは別の使い方を見つけたんだよ」
うなずきながら答えた辰美に、箒は眉をひそめる。
「別の使い方……だと？　それがアレだというのか？」
「そう。【天之道】は、空間スパイクを以て空中に爪を立てて足場にする装備なんだけど、この空間スパイクを使用すると、その周囲の空間が歪むんだよ。それを利用することで、攻撃を弾いたりすることも出来る。もちろん、そんな使い方は本来考慮されていないから、操作もタイミングも、完全にフラウの直感だより。今やって見せたのも、ぶっつけ本番じゃないかな？」
辰美の説明を聞いて、箒は顔を手のひらで覆った。
「な、なんてデタラメな……」
そのつぶやきに、辰美が苦笑する。
「ふふ、ほんとにね。フラウはＩＳ戦闘の天才って言われてる。もちろん当人はそんなこと思っていないんだけどね。訓練と分析。そして、思い切りの良さ。それらがそろって初めて出来るんだと思う

よ」
「……あれだけの人物が、代表候補でもなく、一企業のテストパイロットに甘んじているとは……」
つぶやく箒の言葉に、辰美は困ったような顔になった。
「あーそれね。断ったんだよ」
「は？」
「だから、断ったんだよフラウ。代表候補の話」
辰美のその言葉に、箒は開いた口が閉じられない。
「な、なんだそれはっ？！　あれだけの才能があって、代表候補への誘いを断ったというのか？！　フラウはっ！？」
「うん。フラウ自身は整備科志望だしね」
ふつうなら、とても信じられない話だ。代表候補といえば、将来、国を代表し、背負って立つ可能性のある人間だ。
その才能はおろか、その人個人の教育にかけられるお金も金額が違うし、場合によっては政府に直接援助を請うことも可能だ。たとえ候補止まりであったとしても、その履歴と才能、施された教育は、世界中から欲される。
セシリアの言っていたとおり、まさにエリート中のエリートなのだ。
なりたいからと言って、簡単になれるものではない。
それをけっ飛ばす人間が居るなど、とうてい信じられるものではなかった。
「そ、それは大丈夫だったのか？」
「まあ、揉めに揉めはしたみたいだけど、うちの社長と、フラウのとこの本家筋からの圧力もあってなんとかなったみたい」
代表候補の勧誘は、国家の威信をかけた事業でもある。個人が嫌だと言ったところで、それが受け入れられる可能性は低い。
基本は双方の合意がなければならないが、強引な手を使う場合もあるという噂もある。
それをはね除けるには、相応のものが必要となる。

フラウには、それがあったという事だろう。
地上で二人の少女がのんきにそんな話をしている頃、空中では【ヴァイス・ティーガー】の脚部に搭載された折り畳み式ビームクロー【牙折】に右腕を噛み砕かれているところだった。

〈シールド貫通。右腕アーマー物理ダメージ大　戦闘行動に支障あり〉

痛みの大半は、ＩＳが中和してくれたためどうという事はなかったが、肉体へのダメージが発生したらしく絶対防御が発動してしまった。おかげでシールドバリア残量が２００を割り込んでしまっている。
さらにフラウは、一夏の腕をくわえ込んだのとは反対の脚で彼を蹴り飛ばす。
ひしゃげ、砕け、引き剥がされる音を響かせ、【白式・虹】の右腕ＩＳアーマーの大半が脱落した。

『へえ……』

しかし……。

「一夏……」

それでも……。

「うん。それでこそ一夏だよ」

彼は、【雪片弐型】を手放さなかった。
それを見て、フラウは楽しそうに笑い、箒は安堵の息を吐く。
そして辰美は嬉しそうにはにかんだ。
「……まだ、勝負は着いてねえぜ？　フラウ」
そう言って不敵に笑う一夏。
その顔を正面から受け止め、フラウはフルフェイスの面を跳ね上げつつ笑う。
「ええなあイチやん♪　さすがは男の子や。その意気に免じて、あたしから一本とれたらご褒美くれたるわ♪」
「そいつは楽しみだ」
言いながら一夏は【雪片弐型】を両手に握り、正眼に構えた。
落ち着いた凛とした佇まいに、フラウも高揚する。
「いくでっ！！」
高らかに宣言し、〈ファントム〉のトップスピードで走り出す。
攪乱するように、一夏の周りを走る、白き虎。一夏の右を左を、前を後ろを、上を下をトップスピードのまま走り抜ける。
その速度は、ハイパーセンサーを以てしても完全には捉えきれない。
だから一夏は、目を瞑り、ハイパーセンサーを切って集中した。
研ぎ澄まされていく感覚に一夏は不思議と馴染む。
真っ暗闇の中。一夏の周囲を輝線が走る。まるで一夏を包むような球状に形為していくそれを感じつつ。じっとそのときを待つ。
すべての輝線が集約し、一点となった瞬間。
空気をぶち抜きながら、【ヴァイス・ティーガー】が逆落としに一夏の頭上へ向かう。
眼を開き、真上に向かって【雪片】を振るう。
その刃に向けて、【ヴァイス・ティーガー】の

“右足”

が伸び、見えない爪が、その刀身を絡めとろうと迫る。
そして、フラウが笑みを濃くした瞬間。

虹色の翼が広がった。

単一仕様能力
〈ワンオフアビリティー〉
《零落白夜》発動

【雪片弐型】の刀身が、スライド、展開し、まばゆいばかりの光の刀身が姿をあらわす。
その刃は、空間スパイクの見えない爪を切り裂き、【ヴァイス・ティーガー】を護る、“翡翠色の”シールドバリアを割り砕き、かのＩＳの右足アーマーを切り裂いた。

「いやあ～、負けた負けたわ～」
アリーナのグランドに大の字になって寝ころんだフラウが、楽しそうに言う。
「いや、結構ぎりぎりだったけどな。まさか《零落白夜》の発動で、

あんなにシールドバリアを消費するとは……」
そう、単一仕様能力〈ワンオフアビリティー〉《零落白夜》の発動にはシールドバリアを消耗する。
チュートリアルにはそう書かれてはいたが、実際どれだけ消耗するかは分からなかったため、使用した一夏も冷や冷やものだった。
「でもすごいよ。フラウから一本穫るなんて」
辰美も嬉しそうに声をかけてくる。
「いや、結局当てることが出来たのはあの一撃だけだしな。【ヴァイス・ティーガー】のシールドバリアはまだ余裕あったんだろ？」
「それでも三分の二はもってかれてるんやで？　普通のＩＳならイチコロや」
一夏の問いに、フラウが身を起こして答える。二人ともＩＳは待機状態に戻していた。
辰美にしても戦闘記録の閲覧のためにバイザー型ハイパーセンサーを部分展開しているのみだ。
「しかし、なんだったのだ？　あの虹色の翼は」
「途中、何度か見えてはいたけど、最後のはすごかったね」
映像記録を見ながら、箒と辰美が話し合う。
そこへ一夏が歩み寄ってきた。
「たぶん、戦闘中にいきなり使えるようになったマインドブースターとかいう特殊装備のせいじゃないか？」
「【マインド・ブースター】だと？」
「そんな装備無かったよね？」
一夏の言葉に、箒と辰美、二人とも眉をひそめる。
「精神状態で使えるようになったんだと。それにあわせた機体の調整をやってくれるらしい。よくわからんが……」
「ちゃんと理解しておけ。おまえの体を預けるのだぞ？」
要領を得ない一夏を、箒がたしなめる。その隣で、辰美が小さく笑った。
「何にしても、今回はここまでかな？」

「え？　俺はまだやれるぞ？」
辰美の終了宣言に、一夏はガッツポーズでアピールしてみせるが、彼女は首を振った。
「一夏が大丈夫でも、【白式】はそうじゃないよ？　結構ダメージも受けてるし、ちゃんとメンテナンスして休ませてあげないと、駄目だよ」
「う。わ、わかったよ」
辰美に言われて肩を落とす一夏。視線を右手の白いガントレットに落とし、神妙な顔になる。
「未熟な操者で悪かったな、【白式】。俺は強くなってみせる。だから、しばらくの間つき合ってくれよ」
一夏のつぶやきに光が照り返し、なんだか【白式・虹】が応えてくれたような気がして、一夏は嬉しくなった。
と、背中に衝撃を感じた。
「おわっと。なんだ？」
「あたしやあたし」
言いながら一夏の顔の横に、己の顔をつきだしたのはフラウであった。
背後から彼の背中に飛びつき、おぶさったのである。
「フ、フラウ、お前なあ」
「あっはっは♪　気にしぃなや、イチやん♪　このまま整備室へＧＯや♪」
「ったく……」
仕方ないと苦笑いする一夏。フラウの体はあまり起伏を感じないので助かっているともいう。
「そや！　忘れとったわ」
「どうした？」
一夏の背で声を上げるフラウを見上げる一夏。
その頭を、彼女の両手が固定し、彼の頬に柔らかい感触が触れた。
「えっ？」

「わっ！？」
「なっ？！　なななな、なぁーっ？！」
「約束のご褒美や。あたしなあんたのことますます気に入ったわ♪
これからもよろしゅうな？」
言いながら頬を染め、はにかむフラウ。一夏は突然のことに、首を縦に振ることしかできないでいた。
そして。
「い～～ち～～か～～～～っ！！」
ポニーテールの鬼神が、木刀片手に降臨なされた。
「そこに直れっ！！　この破廉恥漢っ！！　その根性叩き直してくれるっ！！」
「ま、待てっ？！　これは俺のせいじゃっ！！」
「問答、無用っ！！」
一気呵成に木刀を振り降ろす箒。
とっさに身をかわした一夏だったが、木刀が叩いた地面が破裂するのを見て血の気が引いた。
「どわああぁぁああっっ？！」
「あはははははっっ♪♪」
「またんか一夏っ！！　おとなしく成敗されろっ！！」
恥も外聞もなく逃げ出す一夏。フラウはその背中で楽しげに笑い、箒は修羅と化していた。
一方、辰美は……。
「あ、あれ？　な、なんか胸の辺りがモヤモヤムカムカする……なんだろ？　これ？」
と、首を傾げていた。

第十話（後書き）

第十話、いかがでしたでしょうか？
一夏、フラウから一本取りました♪
と、同時にフラグもっ？！
一級フラグ建築士の称号は、伊達じゃありません♪

それでは、次回もよろしくお願いしますね♪

第十一話（前書き）

第十一話、更新しました。
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第十一話

ＩＳ学園は、多種多様な国家の人間がＩＳについて学ぶ学校である。したがって、そこに在籍する生徒は、人種、国籍ともに多岐にわたる。

しかしながら、使用される言語は日本語で統一され、日本人以外であっても日本語での会話が必須となる。

それだけではなく、提出書類も日本語で書き込むことが常識であり、各国のエリートたちは、こぞって日本語を学んだ。

また、ＩＳ学園の書類はすべて“手書き”で書き込まねばならず、外国人生徒のみならず日本人生徒にも大変不評である。

そして、この書類を処理するのも一枚一枚眼で確認し、署名捺印が必要となる。

折しも新入生を迎えた一学期初頭。提出される書類の山は、常人なら死んでしまうのではないだろうか？　そんな風にも思える。

ともあれ、そこそこ広い部屋に並んだ執務机で書類を裁く少女が二人。

一人は落ち着いた雰囲気の、仕事の出来る女、という感じの眼鏡の少女。

いま一人は、水色の髪に怜悧な美貌をたたえた少女。

このデジタル化の進んだ世界で、アナログなやりとりでありながら、処理の速度はあり得ないほど速い。

眼鏡の少女が不備やらなにやら彼女の段階でハネる書類と上役である水色髪の少女に渡す書類を選別していく。

それを受け取った方は、視線を動かしただけで内容を把握。

断を下して決裁していく。

ふと、水色髪の少女、更識楯無が口を開いた。

「……ねえ、虚ちゃん」
「……なんでしょう？　会長」
「……簪ちゃんの様子、見てきていい？」
「……駄目です」
「ぶぅ。虚ちゃんのいけず～」
「……会長、このやりとり五回目ですよ？　少なくとも今日の分を処理し終わるまでは駄目です」
「ちえ～。虚ちゃんのけちー」
「……なんと言われようと、駄目なものは駄目です」
「はぁ～い」
　こんなやりとりをしつつも、二人の手は止まることはなく、視線はしっかり書類をなぞっててていく。
　静かな室内に、紙の擦れる音だけが響く。そして、楯無の目が、鋭く細まった。
「……で？　今、私の後ろに立っているのは、どこの誰子ちゃんかしら？」
　楯無の言葉に眼鏡に三つ編みの少女、布仏虚が顔を上げると、それに応ずるようにして、楯無の背後に小柄な人影が染み出す。
「？！　お嬢様っ？！」
　それを見た虚が椅子を蹴り飛ばしながら立ち上がる。
　が、楯無は左手でそれを制した。
「……いつからお気づきでしたか？」
「……思い出せないけど、さっき虚ちゃんが追加の書類を持って入室してきたときから、かすかな違和感はあったわ」
「……やれやれ、最初からですか。私の“無面目”もまだまだですね」
「“無面目”。表情を無くし、印象を操作してそこにいることを感じさせない穏行の技術ね」「ご明察です。あなたには通用しなかったようですが」
　楯無の言葉に応えるように、その存在感を増していく人影。

小柄な体躯に黒髪をボブカットにした少女の姿が浮かび上がっていく。
その気配に楯無は笑みを浮かべた。
「……それでも、私の後ろを十秒以上取っている時点で称賛に値するわ」
言いながら持ち上げた左手に、魔法のように扇子が現れ、小気味の良い音とともに開かれた。そこには《お見事！！》の文字が踊っている。
「……よく言いますね」
つぶやいたボブカットの小柄な少女、北丘武瑠は、チラと視線を動かす。
その先には、己の首筋に指向されたブレードモードの蛇腹剣【ラスティーネイル】の切っ先。
武瑠の気配がかすかに揺れた瞬間にはすでに突きつけられていた。いつ展開したかも不明だ。
「……参りました。十七代目更識楯無。私の負けです」
両手を挙げて降伏のサイン。それでも切っ先は下げられることはない。
「……あなたの目的はなにかしら？」
静かに訊ねるその言葉のプレッシャーは並ではない。
「……挨拶ですよ。当主殿。欲目も出ましたが」
淡々と答える武瑠。
「……素直ね。よろしい不問としましょう」
澄ました顔で武装を【ラスティーネイル】を格納〈クローズ〉する楯無。
その様子に武瑠は小さく息を吐いて手を降ろそうとすると、楯無がイイ笑顔で振り向いた。
「へ？」
とっさに反応できず、妙な声を挙げてしまう。

次の瞬間。
悲鳴のような爆笑が、生徒会室を突き抜け、学園中に響きわたった。
「なあなあイチやん。なんや、笑い声聞こえんかったか？」
そうつぶやいて、小柄な金髪少女、フラウディア＝Ｏ＝ウエストロードは小首を傾げる。
それに対する答えは下から来た。
「フ、フラウ。この状況になに余裕かましてるんだ……？」
ひきつるようなその声の主は、ＩＳ学園唯一の男子生徒、織斑一夏。その顔は、焦りと恐怖で引きつりまくっている。
それもそのはず、目の前には、トレードマークのポニーテールを逆立てんばかりに怒りのオーラを放つ幼なじみ、篠ノ之箒が迫っていたからだ。
彼女の手にした木刀を白羽取りの要領で抑えるも、背中にフラウを張り付けた一夏の不利には変わりない。
体重をかけて押し切ろうとする箒。その手に新たな手が掛かり、軽くひねるようにねじられると、木刀を握った手から力が抜けてしまい、絡めとるようにその柄を取られてしまった。
「な……っ？！」
思わぬ事に絶句してしまう。
箒とて篠ノ之流の剣術を修めており、腕にはそれなりに覚えがある。
それが、いとも簡単に武器を取られてしまった。
それを成し得たのが、同じ歳の少女であった事が、なおさらショックだった。
彼女の名前は東野辰美。長いコゲ茶色の髪をサイドテールに纏め、

快活な笑みを浮かべた少女だ。
その立ち振る舞いから、箒のように剣術を修めていると思われる。
しかし、この場合、そのことは重要ではなく、油断していたとはいえ、いとも簡単に剣を奪われてしまった事実に箒の衝撃は大きかった。
そんな箒の様子にも構うことなく辰美は木刀を担ぎながら嘆息する。
「はあ。箒、今朝も言ったよね？　木刀でも最悪死ぬんだよって。それなのに、またこんなことして……」
無論、箒はそれを踏まえて手を抜いてはいた。辰美もそれがわかっているから、強くは言わない。
が、今朝は簡単に抑えられ、今は剣を取られてしまったことが箒の調子をおかしくしていた。
「……こ、これは、私と一夏の……お、幼なじみ同士の問題だ！　お前には関係ない」
言いながらそっぽを向き……あっ、となって口を押さえる。
その顔に少々の後悔をにじませて辰美を盗み見る箒。
そして見てしまった。
辰美の、寂しそうな、悲しそうな、苦笑い。
それを見てしまった箒は思わず胸元を押さえて手を握りしめた。
だが、そんな表情は一瞬のこと。すぐさま『怒ってます』と言わんばかりに眉を逆立ててみせる。
「もう、箒ってばそんなこと言って……。一夏に嫌われるよ？」
「むぐ」
辰美に言われて言葉に詰まる箒。そのまま四人でＩＳ整備室へと向かう。
箒は皆に少しだけ遅れて歩きだした。その視線は、一夏に負ぶさったフラウと談笑する辰美の横顔を見つめていた。

「そやからな？　本来ならＩＳは動かす度に整備と調整をしたらなあかんのや」
一夏の背中でふんぞり返るフラウ。
整備室までの道中、雑談の中で、一夏がＩＳを整備することに疑問を投げかけた。ＩＳには自己修復機能と自律調整機能。そして、自己進化機能がある。
それらによってＩＳはメンテナンスフリーであると言っても良い。だが、個人に合わせた専用機ともなると話は変わってくる。
操縦者個人に合わせて機体を調整しなければ、そのポテンシャルを十二分に発揮することは難しいし、エネルギー効率も考えなければ無駄に消耗するだけだ。
さらに、大きな破損を被った場合、それを経験として蓄積し、機体が大きく進化するとき、すなわち第二形態移行（セカンドシフト）や第三形態移行（サードシフト）が発生したときのイレギュラーとなりやすい。
このような不正規進化は、機体のバランスを大きく損ない、かえって性能を落とす元となる。
コアの数に限りがある以上、博打じみた不正規進化など百害あって一利無しなのだ。
その辺り、フラウは整備科志望らしく丁寧に一夏に説明してくれた。それに対して彼は、感心したように何度もうなずいていたわけだ。
「なるほどなあ～。じゃあ機体損傷レベルが深い場合はどうするんだ？」
「お♪　ええとこ突いてきたなあ。本来ならＩＳアーマーの大半が破損するようなレベルのダメージを受けたままＩＳを展開すると、その損傷を正規の状態と誤認識しやすいんや。それをやってまうと、ＩＳ自体が重大な欠損を抱え込むことになる。そうなると、それまでの蓄積が全部パアになるかもしれんのや。そやからＩＳを休ませたらなあかん。人間かて折れた骨がくっつききらんうちに無理する

とおかしなくっつき方になってまうやろ？　あれと同じや」
「なるほどなあ」
一夏の質問に、適宜答えていくフラウ。その隣で辰美もうなずいている。
「だから、無茶なことはあまりしない方が良いんだよ。ＩＳは兵器ではあるけど、ボク達と一緒に歩いていくパートナーなんだからね」
言われて一夏は、おぶさるフラウを抱え直しつ右手を持ち上げる。
その手首にはまるのは、白い輝きを放つガントレット。
それを見つめてうなずく一夏。
「ああ、わかった」
そんなやりとりを、一歩離れて俯瞰するのは箒だ。
この中で、専用機を持っていないのは彼女だけ……。
その事実に、軽く肩を落とす。
仲良くなれたとはいえ、元々箒は人付き合いを苦手としている。自分から話題を作るのが苦手な以上、現在進行中の話題に乗れなければ置いてけぼりになりやすい。
「（昔からそうだったな。私は……）」
唇から漏れた小さな言葉は、己の耳にも届くかどうか。
「（こんな時に真っ先に気づいてくれるのはいつも一夏だった……）」
幼い頃の思い出をかみしめる。
「どうした？　箒」
「どうしたの？　箒」
不意に、二つの声が箒の耳に飛び込んできて、思わず顔を上げる。
自分を振り返る“二人”。笑顔で手を差し伸べてくる“彼ら”の姿に、奇妙な懐かしさを覚え、箒は呆気にとられた。
いつかどこかで見たような。
そんな既視感に、首をひねってしまう。
「なんだ？　箒。不思議そうな顔してどうしたんだよ？」
そんな箒に、一夏も首を傾げてしまう。

「……もしかして具合悪いの？　無理しちゃだめだよ？　箒」
辰美も心配そうに声をかけてきた。そこまで聞いて、箒は我に返った。
「あ……いや、何でもない。大丈夫だ」
曖昧に笑ってみせる。
「さあいこう！」
無駄に力強く歩きだし、先頭を切る。
「どうしたんや？　しのっちは」
「さあ……？」
「何だろうね？」
妙な調子の箒を見てフラウがつぶやき、一夏と辰美は首をひねった。

「そう。七の龍が動いているわけね」
開いた扇子で口元を隠し、目を鋭く細める楯無。
その背後では、床に突っ伏し、息も絶え絶えな武瑠が虚に介抱されていた。
「で、学園内で活動するにあたって挨拶に来たと」
目だけを動かして武瑠を見る楯無。だが、小柄なボブカット少女は反応しない。
「まあ良いでしょう。一応彼の護衛ということらしいしね」
「……ご配慮……ありがとう……ございい……ます」
絞り出すような声で楯無に答える武瑠。
それを見た楯無が、ニンマリと笑った。
「武瑠ちゃんの笑った顔、可愛かったわよ♪」
「～～～～～～～っっ？！？！／／／」
その言葉に真っ赤になる武瑠。
その様子を見て虚は深く深く嘆息した。

「会長。からかっては悪いですよ？」
「あら。怒られちゃったわ。でも、そうね。名だたる七の龍が動いているとなると、やはりこの先、世界は彼を中心に動き出すという事ね。なら、出遅れるわけにもいかないか……。多少無理をしてでも彼と繋ぎを取るとしましょう。彼……織斑一夏と」
そう言って、執務机に視線を落とす楯無。
そこには、ＩＳ学園ただ一人の男子生徒のプロフィールの書かれた書類があった。
そこに表示された少年の写真を見て、楯無は笑みを濃くした。

第十一話（後書き）

第十一話、いかがでしたでしょうか？
武瑠には、楯無のくすぐり地獄に遭っていただきました♪
そして謎の組織名がっ？！
果たしてどうなるのでしょう？
次回もよろしくお願いしますね♪

第十二話（前書き）

第十二話、更新しました♪
今回は、わんこなあの子がメイン？
いったいどうなるのか？

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第十二話

さて、そうこうしている内に第三整備室へたどり着いた一同だったわけだが先客がいた。
サイズの合わない制服の袖を余らせた眠たげな少女、布仏本音ことのほほんさん。
そして水色の髪に眼鏡をかけた少女がひとり。
展開待機状態のＩＳの前にかたまり、ふたりで投影ディスプレイをのぞき込みながら話し合っている。
それに気付いた一夏が足を止める。
「あれ？　のほほんさんと……もうひとりは……誰だ？」
「一組の子やないなあ。ほかのクラスの子やろか？」
一夏の声に応えるように、彼の背中にのっかった金髪の小柄な少女、フラウディア＝尾崎＝ウエストロードがもらす。
そんな二人の影から首を伸ばしてのぞき込んでいるのは、ポニーテールで表情の硬い少女、篠ノ之箒と、焦げ茶色なサイドテールの少女、東野辰美のふたりだ。
「……誰だ？」
「あー、更識さんだよ。更識簪さん。確か日本の代表候補生の……」
訝しげな箒に対し、辰美は思い出したかのように告げる。
それを聞いて一夏が軽く驚いた顔になった。だが、その背中でフラウの表情が微妙なものになる。
「へえ、日本の代表候補生か。がんばって欲しいなあ」
「……あれが倉持のボケナスどものあおりを食らった子か。ご愁傷様やな」
「……どういうことだ？　フラウ」
「あ。……しもた」
フラウの声は、小さくつぶやくものだったが、すぐ下の一夏には丸聞こえだった。

聞きとがめる彼に、フラウがバツの悪そうな顔になる。
その様子に辰美は軽く息を吐いてから口を開いた。
「……更識さんの専用機なんだけどね。【打鉄弐式】っていう機体で、【打鉄】の後継機として発表されたんだ。“世界最強”の乗機として知られる名機【暮桜】。それを元にして作られた量産型ＩＳの旗機とも言える【打鉄】の後継機。日本中が期待したんだけど……。開発元の倉持技研が、日本政府からのある特命を受けたおかげで七割型完成したところで開発がストップしちゃったんだよ」
「どういうことだ？」
辰美の話に疑問を投げかける一夏。その声は硬い。
その先を話すことを迷う辰美。だが、一夏の強い視線に促されるようにして口を開く。
「……一般には公開されていない話だから、外では話さないでね？」
念を押してくる辰美に、一夏は「おう」と短く応える。その力強さにいよいよ観念し、辰美は話し始めた。
「はぁ……。倉持に回ってきた特命は、日本で発生した特一級イレギュラーケースに対応するための、専用ＩＳを開発することだったんだよ。それも、二ヶ月の納期で」
「……なんだ？　その無茶苦茶な話は？」
その内容にあきれる一夏。そんな彼に辰美は肩をすくめて応えると話を続ける。
「無茶苦茶って言うか、有り得ない話だよ。新規のＩＳを二ヶ月で作ることなんて不可能だしね。それでも政府から最優先でと言われればやらざる終えない。倉持技研はスタッフ総出でこの難問に挑んだんだよ。当然倉持技研が手がけていた他の開発ものは全面ストップしたんだよ。その中に【打鉄弐式】も入ってる」
辰美の話に一夏は顔をしかめた。
「辰美。そのイレギュラーケースってのはもしかして……」
「……うん。一夏の想像しているとおりだよ」
「……そうか」

辰美に肯定され、なんとも言えない顔になる一夏。
今現在、ＩＳ関連において最大のイレギュラーケースといえば、彼自身のことである。
加えて、今日受領した専用機、【白式・虹】は倉持技研製。
これだけ判断材料が揃っていれば、幼稚園児にすら分かるだろう。
己のせいで、彼女の、簪の専用機が完成しなかったのだと。
立ち尽くす一夏の背から、小柄な金髪少女が飛び降りた。そして、彼の隣に立って口を開く。
「なあ、イチやん。これはイチやんのせいやあらへんで？　イチやんは狙ってＩＳ繰者になったわけやないんやろ？」
「……。確かにそうだが……」
そう応えた一夏は、眉根を寄せた厳しい顔で、白くなるほど強く拳を握りしめた。そんな彼の背中を、二人の少女が心配そうに見る。
と。
「よし！」
強くうなずいた一夏が足を一歩踏み出した。
フラウと辰美がそれを黙って見送ったのとは反対に、箒は足を踏み出しつつ手を伸ばしかけながら口を開こうとして……やめてしまった。
そうする内に、一夏は二人の元へと足を進めてしまっていた。
「のほほんさん。なにしてるんだ？」
そんな風に二人へ声をかけていく一夏。話し合いに集中していた本音と簪は、突然のことに目を白黒させながら振り向いた。
が、その後の反応は正反対だ。
「お、おー。おりむーだぁ～♪　模擬線終わったの～？」
「……お、織斑……一夏……？」
一夏の顔を認めてへんにゃり笑う本音と、訝るように見てくる簪。
そんな彼女らに笑顔を向けていく一夏。
「おう！　ボコボコにされたけどな。で、そっちの子はのほほんさんの友達か？　俺は織斑一夏。一夏でかまわないぞ」

「……」
だが、簪は目をそらしてしまう。しかし、そんな空気は無かったとばかりにマイペース少女が口を開いた。
「この子はねぇ～。かんちゃんだよぉ～」
「ほ、本音っ！」
あわてて本音を止めようとする簪だが、時すでに遅し。
である。
「……えっと、か、かんちゃんさん……でいいのか？」
困惑気味に訊ねる一夏に、簪はわたわたと両手を振った。
「ち、ちが……くないけど……ちがくて……」
「……どっちなんだ？」
真っ赤になりながら言い募る簪。
その横で本音がニコニコしている。
「あ、え……と、か、簪……」
「簪？」
オウム返しに訊ねる一夏にがくがくと頭を縦に揺すって肯定する。
「そ、そう……更識……簪」
「そっか。更識簪か。じゃあ簪でいいよな！」
満面の笑みを浮かべて言い放つ一夏に、簪が眉を寄せる。
「……そ、それはなれなれし過ぎ」
「そっか？　じゃあ簪さんか？」
「……いきなり名前はちょっと……」
「え、えーっと？　さ、更識さん？」
「……そう呼ばれるの、好きじゃない」
「……え、えっと、じゃあなんて呼べば……」
「……か、簪……さん……で、いい」
「そっか。じゃ、よろしくな簪さん！」
呼び方が決まったところで、一夏が笑いながら右手を差し出す。
「……え？」
その行為に簪は大いに困惑した。

そのとき、一夏の後方七メートル付近では。
「ム、ムグーーっ？！」
「はいはい、分かってるから大人しくしようね？　箒」
「こういうんは、じっくり見て楽しむもんやで？　ほんほん」
一夏と簪のやりとりに突撃しようとする箒を辰美が羽交い締めにし、フラウが口をふさいでいた。
「む、むむむぁーーっ！！」

一夏の差し出した手を見て、あたふたするかんざし。それを見た一夏が首を傾げる。
と。

すぱあぁんっ！！

と小気味の良い音が響き、一夏の頭がブレ、床に倒れ込んだ。
「え？」
突然のことに簪の思考が追いつかない。ふと見やると、ハリセンを肩に担いだ本音が良い顔をしていた。
「ほ、本音？」
「不埒ものは成敗しておきましたー。おじょうさまー」
「そ、その呼び方やめて。あ、あと、織斑君は握手しようと……」
「えーとー？　異性への握手の強要は～、りっぱな～、セクハラです～？」
「べ、べつに……嫌じゃない……」
「ん～？　そーなの～？　かんちゃんが言うなら～」

言いながらハリセンの先っちょで一夏をつつく本音。それに反応するように一夏の体がピクリと動いて身を起こす。
「痛たた……なかなかのツッコミっぷりだな、のほほんさん。じゃなくて、どこからそのハリセン出したんだ？　直前まで持ってなかったよな……？」
「えー？　企業秘密なのだ～♪」
「だ、大丈夫？」
頭を押さえながら本音にツッコむ一夏。
未だ少しふらついている姿に、簪は思わず手を差し伸べてしまった。
「ああ、悪い……と、とと」
その手を取って立ち上がる一夏。その足が少しフラついた拍子に、もう一方の手て簪の肩に掴まってしまった。
「ひゃっ？！」
思わぬ事態に軽く悲鳴を上げる簪。
「あっ？！　わ、悪いっ！？」
その反応に、あわてて簪から離れる一夏。ＩＳスーツはたいていがノースリーブ。つまり肩は完全に露出している。
その無防備な柔肌に、不可抗力とはいえ異性の手が触れたのだ。
しかも鷲掴みに近い形で。
それを認識してか、簪の顔は耳どころか鎖骨まで真っ赤になって涙目になった。
「ス、スマン、わざとじゃ……ハッ？！」
気づいたときには、本日二度目のハリセンアタックを受けていた一夏であった。

そして、本日二度目のダウンを喫した一夏と、それを成した本音。被害（？）にあった簪の元へと箒、辰美、フラウの三人もやってく

る。早々に復活した一夏は、ポニーテールの阿修羅に説教され、フラウに爆笑され、辰美に苦笑いを浮かべさせた。
「スマン！！」
いっそ清々しいくらいの勢いで腰を折りながら謝る一夏。その姿に簪は彼の人となりを見た気がした。
「も、もう……いいよ？　い、いい……一夏……」
そう言って顔を赤らめる簪。
その様子に箒は仏頂面となり、フラウは楽しそうに笑う。辰美も嬉しそうにしていたが、不意に不思議そうな顔になり、左手で胸の真ん中を軽く押さえながら首を傾げたりしていた。
そうして簪から許しを得た一夏も顔を上げる。
「そ、そっか？　なんにしてもよろしくな簪さん」
「う、うん」
笑顔の一夏がまぶしくて、簪の頬の温度を上げていく。不思議なことに、一連のやりとりのせいか、簪の一夏に対する態度は軟化していた。
もっとも、別の何かが簪の中で建ったような気はする。
「で、これが簪さんの機体？　なんだか、俺の【白式】に似てるなあ。ああ、【白式】は俺の専用機のことな？」
「う、うん。知って……る。この子は【打鉄弐式】。あなたの【白式・虹】と同じ開発室の製作だから……だから、似てるのかも……」
「……そっか。なら、兄弟みたいなもんかな。ん？　兄妹？　姉弟か？」
「……姉妹……かも」
【打鉄弐式】を見上げながら言う一夏に、簪がのっかる。どちらからともなく視線が交錯し、口元に笑みが浮かんだ。
「……プ」
「……ふふ」
なぜか同時に、軽く吹き出してしまい、そのままふたりで笑いだしてしまう一夏と簪。

「ハハハ、ハッハッハ」
「ふふふ、クスクスクス」
ひとしきり笑った二人は、互いに思うところでもあったのか、すっきりした顔になった。
そこで一夏が口を開いた。
「……なあ、簪さん」
「な、なに？　……い、一夏」
少しどもり気味に応える簪。
「……ちょっとだけ、【打鉄弐式】に触らせてくれないか？」
「……いいよ？」
少し考えてうなずく簪。それを確認した一夏は、真剣な顔でゆっくり【打鉄弐式】に近づき……軽く目を閉じながら右手で【打鉄弐式】に触れた。
少しの間、そうしていた彼が、不意に目を開け、【打鉄弐式】に強い意志を感じさせる眼差しで小さく笑ってみせた。
そのとき簪は軽く驚いた顔になり、おずおずと【打鉄弐式】に手を伸ばした。
その手が、愛機の装甲に触れた瞬間。
一夏と簪、二人揃って一瞬体を硬直させ、互いに首をめぐらせ顔を見合わせた。そして、簪の赤い眼差しから、光る滴が一筋流れる。
それに対して一夏は、人好きのする笑顔を向けながら言葉を紡いだ。
「……大丈夫さ。簪は、簪らしい何かになれる。俺が保証する」
「……うん。ありがとう、一夏」
そんな二人の様子に、箒はなにか切羽詰まったような顔になり、フラウは面白そうな顔になっていた。
そして辰美は……我知らずに強く握りしめた左拳を胸の真ん中に押しつけていた。

第十二話（後書き）

第十二話、いかがでしたでしょうか？
一夏と簪の姿に、箒の焦りは最高潮♪
さあ、建てるよー♪　どんどん建てるよー♪（爆笑）

それから、少しお聞きしたいんですが、この作品、話の進行速度がゆっくりめなんですが、読んで下さるみなさん的にはどうでしょう？　巻いた方が良いですか？　それとも現状維持くらい？
あるいはもっとゆっくり進めてＯＫ？

現状維持なら、武瑠との模擬戦はさんで、クラス代表決定戦へ。

巻くなら、一気にクラス代表決定戦へ。

ゆっくりなら、武瑠だけでなく、辰美や南波との模擬戦やその他のイベントが挿入されます。

どうですかね？　どれが良いですか？　感想、メッセージ、活報コメントどれでも良いのでお答えいただけると嬉しいです♪

それでは、次回もよろしくお願いしますね♪

第十三話（前書き）

第十三話、更新です♪

進行速度についてご意見下さいましたみなさん、本当にありがとうございました。

実に様々なご意見がありまして、それらを吟味した上で、今回の話を進めています。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第十三話

白い翼を広げた騎士が天を舞う。その姿は力強く、雄々しい。
しかし、それを脅かすものがあった。
大地に“しっかりと立つ”黒いＩＳ。それを駆るのはボブカットの少女、北丘武瑠。ダークグリーンのＩＳスーツに包まれた小柄な肢体は、その黒に没入するかのようである。
それほどまでに、この機体の両肩と両足の黒い箱型のユニットは大きい。
それもそのはず、この四基の箱型パーツには、物理シールドとエネルギーシールドが備え付けられ、さらには《ミラーデフレクター》という対光学兵器フィールド発生システムを備えているうえに、対エネルギー兵器コーティング付きの追加装甲まで施された大型パーツだからだ。
これに加え、大型の右腕パーツにクローアームマニュピレーター（すでに精密作業は期待するだけ無駄）に３０ｍｍの砲身を七本束ねた巨大なガトリングキャノン《呑龍》を“懸架”し、左手には３ｍ×２．５ｍの縦長六角形の楯を持っている。
おかげでこの機体の横幅は普通のＩＳ二機分に近い幅になっていた。
その機体から、間断無く撃ち上げられてくる３０ｍｍの砲弾は、獲物の近くを通るだけで炸裂し、バカにならない被害を与えてくる。
だからといってそれにばかり気を取られていると、黒い機体の背面の非固定浮遊部位〈アンロックユニット〉タイプのバックユニットに備えられた二門の短砲身粒子加速砲《豪破》の粒子ビームが速射され、さらに黒い機体の真横に量子展開された多弾頭ミサイルまで撃ち込まれることになる。
「ち、近づけねえ……」

白翼の騎士の少年、織斑一夏は、たった一機が形成しているとは思えぬほどの濃密な弾幕を、必死で避わしながら呟くことしかできなかった。

特訓が開始され、日本代表候補、更織簪との邂逅から四日。
濃密な訓練を泣き言一つ言わずにこなした一夏は、総括として武瑠と模擬戦をすることになった。
ＩＳランクがＣだという武瑠は、目に見えてＩＳの挙動が遅かった。
だが、模擬戦が開始されてすぐに一夏は認識を改めることになる。
接近できたのは開始直後の一回のみ。それを左手の巨大な楯に阻まれ離脱してからは、まるで接近できていない。
武瑠は開始位置から一歩も動いていないにも関わらずだ。
彼女のＩＳ【玄甲】が作り出す弾幕は、それほどまでに濃密だ。
「くそ、どうすりゃ……」
弾幕を突破する方策が浮かばず奥歯を噛みしめる一夏。
その時、またもや多弾頭ミサイルが展開され、粒子ビームが一夏に向かって連射される。
と、武瑠が右腕に“懸架”していた《呑龍》を地面に放り出し新たな兵装を展開しようとする。
その隙を突くべくランダム機動でミサイルとビームを避けながら突進する一夏。その背中から虹色の輝きが吹き出し、手にした近接ブレード《雪片弐型》が展開し、まはゆいばかりの刀身を生み出した。
上空からの急降下攻撃。位置エネルギーも総て攻撃に振り分けた、まさに必殺の一撃。
振り降ろされた刃の先には、黒い鱗のような装甲プレートを何重にも配した多重積層装甲シールド《重甲鱗》。

エネルギーを吸収反射し自壊する鱗の山を斬り裂き、真っ二つとなる巨大な楯。
その向こうに見えたのは四つの砲口を備えた奇妙な大型火器を一夏に向けながら後方へ加速する黒きＩＳの姿。
「？！　くそっ！」
悪態をつきながら離脱しようとする一夏へ向けて、四つの砲身から万年筆の親玉のようなミサイルが“連射”された。
「なあっ？！」
目の前に広がる光景に絶句する。ハイパーセンサーのおかげで百を越えるミサイルが高速で迫っているのがはっきり認識できるが、何の慰めにもならない。
「わわわぁ～っ？！」
ちょっと情けない悲鳴を上げつつもミサイルを避け、切り落とし、蹴り上げて捌いていく。
が、数が尋常ではない。
一発被弾してバランスを崩してから、二発三発と次々命中し、あっという間にエネルギーが尽きていった。

「くっそー。最後は捉えたと思ったんだけどな～」
アリーナで大の字になったまま悔しそうにする一夏。
そこへ小柄な影が差す。
「こちらの隙を突いたあの突撃は大したものだった。だが、その一撃に重きを置きすぎだ。【白式・虹】の単一仕様能力〈ワンオフアビリティー〉は確かに強力だ。私の【玄甲】でも一撃で機能停止するかもしれん。だが、お前の太刀筋は素直すぎる。虚実を混ぜて確実に本命を叩き込め」
のぞき込みながらそう言ってくるボブカット少女に、にがりきった表情を返す一夏。

「うぐ。に、苦手なんだよ。その虚実を織り交ぜてっていうのは。それより最後のあのミサイルの雨、あんなの避けきれないぜ」
「……はぁ。バカもん。〈槍雨〉はリニア加速でペンシルミサイルを速射する兵装だ。その性質上初速こそ早いが、誘導能力は低く、射程も二、三百メートルが良いところだ。お前のミスは、〈槍雨〉の飽和攻撃に真っ向から向かってしまったことだよ一夏」
「むぐぐ……」
武瑠にそう言われてぐうの音も出ない。
「……セシリア＝オルコットの専用機、【ブルーティアーズ】は、中距離射撃戦型として情報公開されている。機体自体は第三世代兵装である、ＢＴ兵器の運用試験機としての側面が強い、いわば試作機だ。どんなＢＴ兵器がいくつ搭載されているかは不明だ。しかし、冷静に相手を見極めれば対処できるはずだ」
「……」
武瑠の言葉に考え込む一夏。
「……ふむ。では私は引き上げるぞ？　この後は篠ノ之の剣術だったか？」
「ああ。箒と辰美からな」
言いながら身を起こす一夏。
体を伸ばしながら立ち上がる彼を見ながら武瑠は軽く笑みをこぼす。
「……そうか。まあ、みっちりしごいて貰うんだな。先ほど言った虚実についてもな」
「はは、まあ頑張るよ」
武瑠の言葉に苦笑いで応じる一夏。それを見て武瑠は軽く肩をすくめるときびすを返し、彼に背を向けて歩き出す。
その背中に一夏が声を掛けようとしたとき。ふと、彼女の足が止まった。
「……だが、どうしても合わないというなら辰美に相談してみろ」
「……え？」

「あいつはそういうのに詳しいからな」
「あ、ああ！　さんきゅーな武瑠！　それから、模擬戦の相手してくれてありがとう。助かった」
武瑠の言葉に数瞬面食らった一夏だったが、すぐに気を取り直し、礼を述べる。
それに対して武瑠は背を向けたまま片手を軽く振って応じた。

一夏がそうして特訓している頃、代表の座を争う一人、イギリス代表候補生セシリア＝オルコットも訓練と情報収集に明け暮れていた。
この数日、織斑一夏は特訓しているとの話は聞いていた。それも、相手は南賀重工のテストパイロットの四人。
昨日今日ＩＳに乗り始めた素人に遅れをとるつもりはないが、この四人はくせ者だ。
「……南賀重工。“ブリュンヒルデ”織斑千冬と非公式ながら近接格闘戦で引き分けた記録のある、“アダマス”南賀英美が代表取締役を勤める会社ですか。その秘蔵っ子となれば油断は禁物ですわね」
手にした資料を眺めつつ、一人ごちる。対戦相手の三人のうち二人までもがそのテストパイロットということになる。
「朱羽さんの専用機、【舞孔雀・炎】は空中高機動型。特殊装備は《舞孔雀》。私のブルーティアーズと同じく実用試験機ということでしょう。……さすがに細かい仕様までは公開されてませんか。特殊高機動ユニットということですが……」
しかし、セシリアの【ブルーティアーズ】も機動力を重視している。近接戦闘に付き合わなければ、ＢＴ兵器によるオールレンジ攻撃が可能なセシリアが優位のはずだ。
「……問題は東野さんのＩＳ、【春雷】ですわね」
次の資料を眺めて軽く息を吐く。南賀重工の特色として、防御生

存性と耐久力を重要視する傾向がある。
特に近年では、順次実用化されている光学兵器に対する防御に力を入れている事実は業界では周知だ。今回ＩＳ学園に入学してきた四人のテストパイロットが保有している専用機は三機までもが対光学兵装に力を入れていることをアピールしている。
対して【ブルーティアーズ】の主兵装は光学兵器主体。
相性が悪いどころではない。
「まあ大型の機体ですし、時間をかけて削り取っていくしかありませんか。それにしても……」
ふと、セシリアは己に噛みついてきた少年のことを考える。
「……一週間ばかり悪あがきしたところで結果が変わるわけでも無し。やはり男などみな同じですわね」
ふと、窓の外を見ると、くだんの少年が、数人の女子と歩いているのが見えた。
「……だらしない顔ですこと」
最近では、四組の専用機持ちとも懇意にしているらしいとも聞く。
「……物珍しい猿がちやほやされているだけだという事実。思い知らせて差し上げましょう。織斑一夏」
そうつぶやいたセシリアは、指を銃に見立てて一夏の頭を狙撃する。
「ＢＡＮＧ！！」

「つまり、今のままじゃあ燃費が悪いってことか？」
「……そう」
第三整備室。聞き返してきた一夏に眼鏡をかけた水色髪の少女がうなずく。
ここ数日、模擬戦後には必ず訪れるようになった整備室で、そこに入り浸っている少女、更織簪と【白式・虹】の稼動データを検証

しているところだ。
元々は彼女の専用機【打鉄弐式】のサンプリングのためデータ提供だったのだが、簪がちょくちょく的確なアドバイスをしてくれたり、整備の仕方を教えてくれたりと、割合仲良くなっていた。
今回指摘されたのは、単一仕様能力〈ワンオフアビリティー〉使用時のシールドバリア消費量のばらつきだ。
「……《マインドブースター》使用時はエネルギーバランスは良いけど、それでもばらつきがある。ということは《マインドブースター》による最適化は単一仕様能力にまでは及ばない」
「なんでばらつきが出るんだ？」
一夏のその疑問に、簪の眉が寄る。
「……能力発動時の状況によるかもしれないけど……そういえば、一夏はどうやって《零落白夜》を発動させてるの？」
「んぉ？　そうだなあ。なんつーか、出ろおっ！　て感じで集中すると展開するみたいだ」
軽く思案しながら答えた一夏に、簪も考え込む。
「……なら、トリガーはイメージインターフェイス？　そうなると、一夏のイメージによっては発言の仕方が変わるかも……」
つぶやきながら考えをまとめていく簪。その真剣な横顔に、一夏は少しだけ見とれてしまった。
「じゃあ……どうしたの一夏？」
と、考えがまとまったらしい簪が彼の方を見ると、ばっちり目があってしまい、戸惑ってしまう。
これには一夏があわてて手を振った。
「わ、悪い。何でもないんだ」
「そ、そう？　それで……」
と、簪が説明しようと口を開いたところで、整備室の自動ドアが開いた。
「一夏っ！　もう時間だぞっ！　稽古の時間に遅れるとは何事だっ！」

開口一番に怒鳴りつけてきたのは、学園で再会したポニーテールの幼なじみ、篠ノ之箒だ。
その後ろには、一夏のルームメイトのサイドテール少女、東野辰美だ。その顔には、軽く苦笑いが浮かんでいる。
そんな二人の少女の姿を見て、一夏は伐の悪そうな顔になる。
「あ。悪いすぐに準備するから道場で待っていてくれ。ごめんな簪さん。また後で話を聞かせてくれ」
「う、うん。が……がんばって、一夏」
エールを送る簪に軽く応え、【白式・虹】を待機状態へ移行させる一夏。そのまま急いで更衣室へ向かう。
そんな彼の背中に、簪は小さく手を振っていた。

そんな日が経過し、今、一夏はアリーナのピットに居た。
傍には一夏の幼なじみの箒と、金髪ショートカットのハーフ、フラウことフラウディア＝尾崎＝ウエストロード。そして、今回特別に水色髪の少女、簪もピットに入れて貰っていた。

いよいよ始まるクラス代表決定戦。
この戦いの行方は、果たして……？

第十三話（後書き）

第十三話、いかがでしたでしょうか？
次回はいよいよクラス代表決定戦。四人の総当たり戦ですが、まず最初は……？
次回もよろしくお願いしますね♪

第十四話（前書き）

第十四話、更新です♪
読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

第十四話

「さて、ちょっと行ってくるか」
アリーナの待機ピット内で、白いＩＳを展開した少年が、己に聞かせるようにつぶやいた。
「おー。きばりぃや？　イチやん」
そんな少年に、小さな人影が声をかけてくる。金髪碧眼の少女フラウディア＝Ｏ＝ウエストロード。
幼い時分に日本の関西圏で過ごしていたというハーフの少女だ。
緊張している少年、織り斑一夏に対して、屈託のない笑顔を向けてくる。
ＩＳのハイパーセンサーを通して見ても、その笑顔は自然で、楽しそうだった。
そして、今一人。長い黒髪をポニーテールに束ねた、サムライ少女、篠ノ之箒。
少年のまとうＩＳ、【白式・虹】からは彼女が不安がっていることを示すデータが上がってきていた。
だが、六年越しに彼と再会した幼なじみは、その不安を押し隠し、少年を鼓舞する。
「一夏」
「おう」
「勝ってこい！」
「任せろ！」
力強く返事をした彼の顔を見て、箒の表情が和らぐ。それを見届けた一夏は、リニアカタパルトに足を乗せて固定した。
そこで最後の少女がおずおずと声をかけてきた。
「い、一夏……」
その声に顔を巡らせる少年。

水色の髪にグラスタイプの情報投影モニターを顔に掛けた少女。
更識簪。
その彼女の緊張も、ハイパーセンサーが余すことなく伝えてくる。
「……が、がんばって……」
「ああ」
絞り出すように紡いだ激励に、笑顔で答える一夏。それを見た簪の顔が、小さくほころんだ。
と、何かを思い出したような顔になる簪。
「あ……そ、それから」
「ん？」
慌てたような簪の言葉を待ってやる一夏。
「……れ、〈零落白夜〉を使うとき……その、《雪片》を……織斑先生のじゃなく、あなたの……あなただけの《雪片》を思ってあげて」
「？　……千冬姉のじゃなくて、俺の《雪片》？」
簪の言葉に、一夏は訝しげになる。それにも構わずうなずく簪。
「……そう」
「……俺にとっては千冬姉の《雪片》こそが《雪片》ってイメージなんだが……」
そんな簪に、困ったような顔になる一夏。
「……でも、一夏は織斑先生じゃないよ？　……！！」
そこまで言って、ハッとなる簪。その様子に一夏も気づく。
「どうしたんだ？　簪」
そう声をかけられた簪は、肩を震わせた。
「？！　ううん……何でも……ない。それより……がんばって」
「ああ！」
簪に答えてピットの出口を見据える一夏。その先に居る彼女へと意識を集中する。
カタパルトが作動して、アリーナへ吐き出される白い翼のＩＳ。
その目の前にいるのは。

“朱”

「待たせたか？」
「ほんの少し」
一夏に問われ、“朱”をまといし少女が朗らかに笑う。
その所作にすら、彼女の育ちの良さが表れているようだ。
「でも、まさかこんなことになるとは思いませんでした」
「まったくだ。リーグ戦って聞いていたのに、時間がかかりすぎるからって直前でトーナメント形式に変更。で、対戦相手をランダムで決めたら」
「私と一夏さんの対決になるなんて……」
そうして苦笑いを浮かべる二人。
「まあ、辰美がセシリアを倒しちまうかもしれないが、それはこの際置いとこう」
「そうですね。重要なのは、この対戦です」
表情を引き締めるも、笑みがこぼれるのを止められない二人。
一夏は初見となる“朱”の少女、朱羽南波がまとうＩＳを、つぶさに観察した。
それは白いラインとイエローのワンポイントで彩られた、クリムゾンレッドとワインレッドがベースカラーのＩＳ【舞孔雀・炎】。
そのハイパーセンサーはサンイエローの額当てに三枚の羽のようなセンサーがついたイヤーカバーで構成されている。
腕はスキンアーマーのみのようだが、両肩ＩＳアーマーからは斜め前上向きにスタビライザーがあり、背中には翼のようなウイングスラスターが左右一枚ずつ配されている。それに挟まれるように箱型のバックユニットがあり、その下に長い尾のようなスタビライザーがある。

ブレストアーマーは、前方に尖るほど突き出ており、腰の前方には前垂れのようなアーマーがある。そして腰の両側には小型のウイング状のスラスタースタビライザー。
脚部はＩＳらしく大型で、足底部にはブースターユニット。
全体に突起部が多く、概ね細身ながらも威圧的。
そして左腕にはシールドらしきパーツが装着されていた。
一見して武装らしきものは無いように見える。
が、ＩＳである以上油断はできない。都合が合わなかった南波とだけは模擬戦ができなかったいじょう、その情報は皆無に等しいのだ。
そう考えているうちに試合は開始されようとしていた。

「まさかこのような組み合わせになろうとはな」
モニターを眺めつつ箒がつぶやく。その言葉にフラウもうなずいた。
「リーグマッチやと試合数が多くなるしな。まあ妥当なとこやろ。やけど、せしりんとやる気満々な二人が潰しおうて、巻き込まれたたつみーがせしりんと当たるなんて、どんな皮肉や？」
苦笑い気味にそう言うフラウの隣に簪もやってくる。
「……一夏、勝てそう？」
その質問に、フラウは難しそうな顔になる。
「う～ん。当てられればイチやんが勝やろなあ。アリーナみたいなせまっ苦しい場所やと、【舞孔雀】の特殊装備も生かせへんしな」
「そうなのか？」
フラウの言葉に、箒の表情が一瞬明るくなり、すぐに引き締まった。
「なら、勝てるのだな？　一夏は」
「て、言いたいところやけどなあ。ななみーもその辺よお分かっと

おし、なかなか難しいやろな。それに……」
「……それに？」
「な、なんだ？　何かあるのか？」
腕を組み悩むように言うフラウに不安をかき立てられる箒と簪。
それを見ながら苦笑するフラウ。
「いや、【舞孔雀】の特殊装備やけどな？」
「うん」
「ああ」
フラウの言葉に、簪と箒がうなずく。
「初見やと絶対驚くと思うんや。それでペースが乱れるかも分からん」
そう言って頭を掻くフラウ。
その意味を計りかね、簪と箒は首を傾げた。

弾丸のように飛び出した“白”の斬撃は、“朱”の手にした楯に阻まれる。
そして、少女の白き掌中に光が凝縮し、１５．２ｍｍＳＭＧ《天嵐》が現れ、鉛弾を吐き出していく。
しかし、一夏はそれすら避けるように宙を舞った。
「簡単には当たらねえっ！」
旋回しながら上昇し、反転下降し、体を返してスラスターを噴かす。
南波の姿を視界に捉え、銀閃が閃いた。
「くっ？！」
それを紙一重でかわしつつ楯をかざす。
一夏はその楯ごと両断しようと《雪片》を構え、

急上昇した。

その足下を、エネルギーの塊が通過していく。

「あ、あぶねえ……」

首裏に嫌な感覚を感じてとっさにとった行動だったが正解だったようだ。

「あのタイミングで……？！」

反対に南波は必殺を期していたようで、驚愕に目を見開いている。

それを好機とばかりに、鋭く斬り込んでいく一夏。

その斬撃は、“朱”の機体を捉え……ることなく宙を薙いだ。

「な……？！」

驚く一夏の目の前で前を向いたスラスターを噴射しながら後退する南波。その背中のウイングスラスターの上面が口を開け、２０ｍｍの砲身が顔をのぞかせた。

「いいっ？！」

慌てる一夏に向けて、二門の２０ｍｍ速射砲が火を噴く。

それを左へスライドするように避けていく一夏。

それを追うように南波が右へと体を開くと、その胸の谷間から突き出たブレストアーマーから、大きく真っ赤な光弾が射出された。

それを見た一夏は急上昇する。その直後。

光弾が炸裂し、巨大なオレンジ色の炎が広がる。

「ぐっ？！」

その余波だけで、シールドバリアにダメージが入ったのを見て一夏は歯を噛みしめた。

そして、下方に置き去りにした南波の姿を、振り返ることなく全方位視界で確認したとき、さらなる驚愕が目に飛び込んできた。

“朱”の形が変わったのだ。

ブレストアーマーとバックユニットが前後に離れながら下へと沈み、尻尾のようなスタビライザーが股下を潜って前と移動する。

両足のアーマーは、彼女の細い足を排出し、折り畳まれながら左右へ広がり、ウイングスラスターが横に倒れて翼となる。
その所要時間、わずか０．２秒。
戦闘による集中力とハイパーセンサーが無ければ見えなかっただろう。
それはまさに三角形の航空機。
それに座した南波は信じられない速度で上昇してくる。
「くっ？！」
思わず機体を静止させた一夏の真横を“朱”い閃光がかすめる。
「速いっ！？　ぐあっ？！」
そのスピードに驚く彼を、衝撃波が襲う。それに構わず体をひねって上を見上げる一夏。
その視界に影が差し、黒い塊が彼に向かって広がる。
「やああぁぁぁぁっっ！！」
裂帛の気合いを持って迫る影こそは、クリーム色の髪の少女の姿。手には薙刀を持ち、まっすぐ一夏に向けて落ちてくる。
その出で立ちは、ＩＳスーツにスキンアーマーと申し訳程度のＩＳアーマー。
肩の突起状スラスターと、両腰のマイクロガススラスターをふかし、一夏に切りかかる。
「くっ？！」
それを受け止め、押し返す一夏。
「あうっ？！」
小さく悲鳴を上げながら吹き飛ぶ南波。それを好機と切りかかろうとする一夏。
だが、それを遮るように“朱”い機体に割り込まれる。
「ち、独立して動けるのかっ？！」
そのまま“朱”い機体に掴まりながら飛び去る南波を見て、歯噛みする。
航跡を残して飛ぶ機体が急上昇し、さらに機首を転じて一夏へ向

かう。
　そんな彼には、サーフボードよろしく“朱”い機体の上に立った南波が薙刀を構えているのが見えた。
　正眼に構えて迎え撃つ。
　が、その“朱”い機体のノーズ部に移動していたブレストアーマーから、大型の光弾が吐き出される。
“朱”の速度を加算されて。
「しまっ」
　叫ぼうとした彼の真横を“朱”がすり抜け、半瞬遅れて光弾が【白式・虹】に直撃する！
　その刹那、直径２０ｍにも及ぶオレンジ色の火球が白い機体を包み込んだ。

「一夏っ？！」
　その様子にピットのモニターで観戦していた箒は悲鳴のような声を上げてしまった。隣の簪も、顔面蒼白である。
「フラウ、なんだあのＩＳはっ？！　変形するなぞ前代未聞だ！」
　ピットにいるもう一人、フラウにそう食ってかかる箒。
　しかし、フラウは自然体を崩さない。
「みての通り、航空機に変形するＩＳや。全スラスターを加速に振り分けとる上に加速しやすいようにフィールドも調整されるんや。スペック上は高機動パッケージをインストールしたＩＳ並にスピードが出る。ただ、この狭いアリーナやとその速度を生かすのが大変やけどな」
　そう説明するフラウの言葉を聞きつつ思案していた簪が、気づいたように顔を上げる。
「……そうか、ＩＳアーマーだと思っていたパーツは、全部外付けのオプションパーツなんだ。それもＢＴ兵器のようなイメージイン

ターフェイスによる遠隔操作タイプの……」
「かっちん正解や。本来はイチやんに切りかかったときの軽装備が本体なんや。後のパーツが、特殊装備《舞孔雀》っちゅうわけやな」
簪の推論にうなずき、補足していくフラウ。
その間に、戦場で動きがあった。
アリーナの観客席から上がった歓声に三人がモニターを振り向くと、火球を斬り裂くように【白式・虹】が姿を現したところだった。

‘シールドダメージ１６３。全アーマー実体ダメージ中。シールド残量３２１。’

表示された情報に、一夏は奥歯を噛みしめる。
あの光弾の威力は半端ではなかった。アーマーのダメージが深刻なため、次に直撃を受けたら機体は持たないだろう。
なにより、変形した南波の【舞孔雀・炎】の速度が尋常ではない。
「……使うしか無いか」
そう一人ごちる一夏と、天空で元のＩＳ形態に戻り、こちらを見ている南波に視線を転じた。
すると、南波の機体の左右に、大型のミサイルが量子展開され、そのままロケットモーターに火がついて射出される。
迫るそれを迎撃しようと構えた瞬間。
二発のミサイルが“破裂”し、１６発ずつ、計３２発のミサイルが飛び出してくる。
「！　くっ」
それを見た一夏は地面へ向かってパワーダイブ。地表スレスレに降下し、体を反転させながら起こし、地面を滑るようにスラロームしながらバックダッシュする。それについていけないミサイルは地面に激突し、仲間を道連れにしながら爆発してしまう。

かろうじて生き残ったミサイルも、《雪片》で斬り裂かれて撃墜される。
そんな一夏の頭上に、“朱”い三角が逆落としに迫る。
それに気づいて思い切りスラスターを噴かして前進する一夏。さらに開いた両足をコンパスのように回転させながら二回り半する。かわされた“朱”も瞬時にＩＳへと姿を変え、体を引き起こしながら地面をスライドするように滑っていく。
それを追わんと加速する【白式・虹】。
一夏の瞳孔がすぼまり、集中する。

‘〈マインドブースター〉起動。コア臨界点へ。カウントダウン開始’

虹色の輝きが溢れ、それが翼を為し、【白式】が白き閃光となる。
その輝きに、一瞬、目を奪われてしまう南波。
その刹那の時が、明暗を分ける。

‘単一使用能力（ワンオフアビリティー）《零落白夜》’

《雪片・弐型》の刀身が展開し、まばゆいばかりの刃が顕れる。
振るわれたその刃を、南波はとっさに避けようとバックステップした。
が、その刃が自身めがけて伸びてくる。
その理由を、彼女の目はしっかり捉えていた。

彼の
足が
大地を
踏みしめている。
スラスターの加速のみならず、地を蹴ることで半歩の踏み込みを為した。
それが結果に繋がった。
『勝者、織斑一夏!!』

第十四話（後書き）

第十四話、いかがでしたでしょうか？
クラス代表決定戦。第一戦は、一夏対南波。
その結末は、ご覧の通りです。そして第二戦目は、セシリア対辰美。
勝敗の行方はどうなるのか？
次回もよろしくお願いしますね♪

第十五話（前書き）

第十五話、更新しました。
セシリア対辰美。
果たしてどんな結果になったんでしょうか？
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第十五話

「……負けてしまいました」
試合終了のコールを聞いて、クリーム色の髪の少女、朱羽南波は小さく笑う。
「ああ、勝たせてもらったぜ？　南波」
その笑顔を受け、勝者となった少年、織斑一夏も、イタズラ小僧のように笑う。
と、“朱”が光の粒子となって消え去った。軽く着地し、胸元のブローチを撫でる南波。
「……お疲れさま、炎（ホムラ）」
優しい笑顔で待機状態の愛機をねぎらう。そんな彼女の顔に、軽く見とれてしまう一夏。
それに気付いてか、不意に顔を上げた彼女に、気まずい顔になった一夏は、軽く思案して話題をひねり出す。
「あー。そういや、〈マインドブースター〉の発動に面食らってたみたいだが、辰美たちに聞いてなかったのか？」
「まいんどぶーすたー？　ですか？　ええ、聞きませんでした」
「え？　なんでだ？」
一夏の問いに朗らかに答える南波。その答えに一夏は軽く驚く。
それを見て、南波は楽しそうに笑った。
「だって、一夏さんも私の機体の情報、お聞きになっておられないんでしょう？　なら、これがフェアーな形です♪」
南波がそう話すと、一夏もなるほどとうなずいた。確かに南波の機体情報を辰美達から聞いてはいない。
単純に対セシリア戦に重きを置いていた部分が強かったのだが、どうするか？　辰美に訊ねられた際に断ったのも確かだ。
それを聞いて自分も情報を聞かなかったのだろう。
そんな南波の在り方に、一夏は少し嬉しくなった。

笑顔を向け合う二人を和やかな空気が包み込む。
が。
『そこの二人！　さっさとピットに戻れ！　次の試合が始められん！』
アリーナに響いた放送に、その空気も霧散した。
おりしも観客席は満員御礼。
その衆人観衆のただ中であることを思い出した一夏と南波がそろって赤くなり、あわてて互いのピットに戻ろうと動き出す。
と。
不意に南波が振り返った。
「一夏さん！」
「え？」
呼ばれて振り返る少年。その視線の先で。
南波は笑顔で手を振った。
「がんばって下さい！」
「あ、ああ！　任せろ！」
一夏が答えながら親指を立ててみせると、南波は笑顔でうなずき、きびすを返してピットへ小走りに走っていった。

ピットへ戻った一夏を迎えたのは、不機嫌さを隠そうともしないで仁王立ちしているポニーテール少女、篠ノ之箒だった。
「よっ！　勝ってきたぜ？」
片手をあげてそう言う一夏に、箒は軽く朱を散らしながらそっぽを向く。
「と、当然だ！　私があれだけ特訓につき合ってやったんだからな！」
そう強く言い切る箒。一夏はそれを聞きつつＩＳを待機状態に戻して彼女の近くに降り立つと苦笑いを浮かべた。

と、そんな箒の傍へ、ツツッと寄る影。
「そないな事言うて～。試合中はずっと心配だ心配だ言うとったやんな～？」
楽しそうにしながら右手を口元に当てつつ言うのは小柄な金髪少女、フラウディア＝O＝ウエストロードことフラウ。
その台詞に、箒はあわてたようになる。
「ぬなっ？！　フ、フラウっ！？　いい加減なことを言うなっ！？　わ、私は心配などしておらんっ！！」
「ツンデレ乙や～♪」
「なっ？！　このっ！　またんかっ！」
ついにはフラウを追いかけ始める箒。それを見ながら一夏は、しょうがないなあと眉を八の字にする。
そこへ青い髪の少女が近づいてきた。
「……お、お疲れさま、一夏……」
「おう！　勝ってきたぜ？」
「……うん」
嬉しそうに報告する一夏にはにかむ青髪に眼鏡の少女、更織簪。
しかし、急に一夏の方が少し表情を曇らせた。
「あ……そういや悪い。せっかくアドバイス貰ったのに生かせなかくて……」
しかし、簪は気にした風でも無くかぶりを振る。
「ううん。そんな急には……出来ないと思う。けど……心のどこかで覚えておいてくれれば……きっと一夏の〈雪片〉が見えてくるよ」
そう言って小さく笑う。
「イチやん、軽く整備するよって、こっちで【白式】を整備モードで展開してえな」
いつのまにか整備台の方へ移動していたフラウに声をかけられそちらへ向かう一夏。
結局フラウを捕まえられなかったらしい箒も彼女を見てうなっている。

そんな幼なじみを見て苦笑いを浮かべた一夏は、再度展開した【白式】を整備台へと預けて装備を解除した。するとフラウはさっさとそれに取り付き、簪も手伝いに動き始める。
「イチやんはセシりんとたつみーの試合、よく見ときや。補修作業はあたしとかっちん。ほーやんでやっとくさかい」
「いいのか？」
「私も手伝うのか？」
すまなそうに聞く一夏の横で、箒が目を剥いた。
「かまへんよ～♪　あとな、ほーやん。これもイチやんの手伝いやで？　かっちんは率先してやっとるやないか」
「むぐ……。わ、わかった。なにを手伝えばいい？」
フラウとともに【白式】の補修作業に入った簪を見て危機感をあおられた箒は口車に乗せられているのを感じながら手伝い始めた。
そして、第二試合が始まる。

対峙するは二体の“青”。
一方は金髪ロングヘアに碧眼のイギリス代表候補生、セシリア＝オルコット専用機【ブルーティアーズ】。
もう一方は焦げ茶色の髪をサイドテールにした、南賀重工テストパイロット、東野辰美専用機【春雷】
空にたたずむ【ブルーティアーズ】に対し、地にしっかり“足を着けている”【春雷】。
完全に方向性の違う二機の“青”。
「よもやこういう事になるとは思いませんでしたが……やるからには勝たせていただきますわ！」
「……やる気満々だね？　オルコットさん。だけど、やるからにはボクも手を抜くつもりはないからね？」
天空に立つ“青”が長大な大型ライフルを構え、地に立つ“蒼”

が大きな円筒状のバズーカランチャー〈爆鋼〉を展開し構える。
セシリアの【ブルーティアーズ】は脚部ロケットモーターや足下へ向かって広がるようなウインクスタビライザーのおかげで三角錘のようなフォルムであるのに対し、辰美の【春雷】は非固定浮遊部（アンロックユニット）位の大型肩部に野太いサブアーム。脚部もゴツい大型メカニカルパーツが取り付けられており、かなり大きい。
さらに非固定浮遊装甲（アンロックアーマー）がそこかしこに配されており、操縦者の姿はほとんど見えなかった。
その見た目堅牢そうな機体を見て、セシリアは眉を寄せる。
南賀重工特有の防御耐久性主体の機体をどう攻めるべきか、考えあぐねていると言うところか。
その一方で、辰美はラインアイタイプのＨＵＤ型ハイパーセンサーの向こうで、余裕の無い表情を浮かべている。
【ブルーティアーズ】のＢＴ兵器の潜在能力は未知数。機動性、特に空中機動力に難のある【春雷】で、どこまで捌けるのか？
セシリアの慣熟具合にもよるあたり、まさに博打と言えるだろう。
そんな両者の思いとは関係なく、試合は開始されてしまう。
『第二試合、始めっ！』
合図と同時に、セシリアの構えたライフルから、光の槍が伸びる。その一撃は、ＩＳのシールドを撃ち抜くに十分な高出力を誇るレーザービームだ。
しかし辰美も、棒立ちのかかしである訳でもなく、開始と同時に機体をバックさせている。
足裏に装備されているクローラーユニットにより土煙を上げて走行する【春雷】。それは、ＩＳ特有のなめらかな機動ではないが、力強さを感じさせるものだ。
だが、セシリアも牽制の一発に期待などしていない。即座に機体を滑らせ、ライフルを撃つ。
その正確な射撃が辰美を襲う。
「くっ？！」

とっさに身をひねり、左サブアームを楯代わりにする。
被弾した瞬間、その装甲が鮮やかなブルーの光を発した。
「なんですのっ？！」
その輝きに驚きを隠せないセシリア。
その隙をついて辰美が〈爆鋼〉からロケット弾を撃ちだした。
しかし、それをスルリと避けるセシリア。が、次に辰美の姿を見た瞬間、その顔がわずかにひきつった。
今の隙に、もう一丁〈爆鋼〉を展開し、さらに自分の手元に二丁の１５．２ｍｍＳＭＧ〈天嵐〉を展開していたからだ。
そして四本の腕にそれぞれ保持していた火器が、一斉に火を噴く。
たまらず乱数機動回避で弾幕を避けるセシリア。
さらに隙を見つけてライフルで反撃している辺りは、さすが代表候補と言うべきか。
その反撃をクローラーユニットによるスラロームで避けながら弾幕を絶やさない辰美。
互いの射撃を避けながら反撃していく“青”と“蒼”。
拮抗するかのように見えた射撃戦は、辰美の側から崩される。
セシリアのライフルを避けながら走る辰美、その背中にアリーナの壁が迫るのを見てセシリアはほくそ笑む。ただ闇雲に射撃していたのではなく、回避の方向を誘導するように撃っていたのだ。
壁際に追いつめれば上昇せざる終えない。最初から空中にいるならまだしも、離陸する瞬間は航空兵器最大の隙だ。
そして、それはＩＳであろうとも例外ではない。
その瞬間を、セシリアは造りだそうとしていた。
だが、彼女の想像は、“蒼”いＩＳの行動によって覆されてしまう。
背中から壁にぶつかろうという瞬間、その巨体が傾き、‘アリーナの壁面’を滑走し始めたのだ。
「な、なんですってっ？！」
その挙動にセシリアは顔に三つのＯを作ってしまう。

しかも辰美はそのまま壁面の範囲を超えて中空を後ろに向けて滑走しながら上昇してきた。
「くっ？！　このっ！？」
あわててライフルを構えた時には、辰美はセシリアと変わらぬ高さまで到達し、彼女を，見上げながら，〈天嵐〉と〈爆鋼〉の銃口を向けていた。
放たれた双方の弾丸は、“蒼”をかすめ、“青”に着弾する。
１５．２ｍｍの銃弾はともかく、〈爆鋼〉のロケット弾は、プラズマ弾頭。オレンジの火球が、“青”を包み込む。
その刹那、【春雷】の手にした二丁の〈爆鋼〉と脚部のクローラーユニットが被弾。爆発する。
「うあっ？！」
声を上げた辰美が周囲を見回すと、そこには四基の“青”いプレートが浮遊していた。
「……ＢＴ兵器」
それらは一斉に散開すると、爆炎の向こうへと向かう。
「……よもやここまで追いつめられるとは思いませんでした。札を温存して勝とうとした私の責ですわね」
晴れた炎の向こうから姿を現す“青”。
その青い装甲に被害はあるが、とても直撃弾によるものとは思えなかった。
「くっ」
思わず歯噛みする辰美。対してセシリアは悠然と微笑む。
「さあ、ここからは、私のターンですわ！」
声に反応し、飛翔する四基のＢＴ兵器〈ブルーティアーズ〉。
それを見た辰美は必死に機体を動かす。
〈天之道〉の発展型装備、〈天輪〉を失った以上、空中戦は【春雷】にとって鬼門だ。
〈天輪〉による機動性を失った今、【春雷】の大きさも、被弾しやすいというデメリットしか生まない。

もはや勝敗は決したかに見えた。

「……あれから二十七分。その機動性の無い機体で、よくもまあ持たせるものですわ」

目の前の“蒼”い少女に感心したような声を出すセシリア。

その特殊装備の一つである、熱光学転換装甲〈蒼天〉の力があるとは言え、それも被弾したダメージを無効化できるわけではない。

すでに非固定浮遊装甲（アンロックアーマー）〈甲鱗〉も、予備分を含めてすべて脱落。

左のサブアームは付け根から吹き飛び、右のサブアームのマニュピレーターも粉砕されている。

まさに満身創痍。シールド残量も三桁を切っている辺り、打つ手は無いかに見える。

それでもなお、一度たりとも“絶対防御”が発動していない辺りに、このＩＳの真の恐ろしさが見え隠れしていると言えよう。

そう、恐ろしいまでの“ダメージコントロール能力”だ。

実際、戦闘能力はそれほど低下していない。

すでに用をなさなくなった外骨格システムはパージ済み。

サブアームは使用できないが、辰美の両手が使えなくなったわけでも無く、ナイフのような近接ブレードとＳＭＧを構えている。

反対にセシリアは、ここまで削り取る間に、〈ブルーティアーズ〉は二基撃墜され、機体のシールドも半分以上削られた。

実体ダメージも決して少なくなく、このまま勝利したとしても、次の試合に確実に響くだろう。

だが、それ以上にセシリアの精神は磨耗していた。優位なのは自分。そのはずなのに、追いつめられている気分になる。

辰美のあきらめない姿が、セシリアの心を追い込んでいるのだ。

そして今も、決してあきらめる素振りを見せない。

「くっ……これで終わりですわっ！　〈ブルーティアーズ〉！！」

勝負をつけようと、配下の猟犬に命を下すセシリア。
二匹の“青”い猟犬は、主の命に従い、“蒼”い獲物へ牙を剥く。
その瞬間を、彼女は狙っていた。
セシリアがＢＴ兵器をコントロールする際、過度な集中を必要としていた。
その隙を、待っていたのだ。

両肩の非固定浮遊部位（アンロックユニット）が、口を開け、展開していき、花開くバラのようなパラボラアンテナを広げたかと思うと、そこに光が収束し、青白い輝きが溢れ出す。
それは、光の奔流となり、二基の〈ブルーティアーズ〉を巻き込んで爆砕しながら“青”の少女へ向かう。
目前に迫るその圧倒的なエネルギーに、目を見開き刹那の時惚けてしまうセシリア。

そして、

その光は

彼女を

飲み込む

ことなく、至近を虚しく通過する。
セシリアに着弾する寸前、【春雷】の左肩ユニットが爆散し、射

軸がズレたのだ。　そして、その爆発は、【春雷】の残りわずかなシールドをも吹き消してしまっていた。

『試合終了！　勝者、セシリア＝オルコット！』

第十五話（後書き）

第十五話、いかがでしたでしょうか？
セシリアと辰美の試合は、なんとも苦い結末に。
そして、いよいよ一夏対セシリアへ。
果たしてどのような戦いになるのか？
次回もよろしくお願いしますね♪

オリジナルＩＳ設定資料（前書き）

四神のＩＳがすべて登場しましたので、設定資料を公開します。
解説文のみで文章量もありますので、興味のない方はスルーして下さい。

オリジナルＩＳ設定資料

東野辰美専用ＩＳ

南賀重工製第三世代試作ＩＳ雷電弐型カスタム【春雷】

待機状態：蒼いガントレット。左手用。

ＩＳスーツはマリンブルー。

南賀重工製第二世代ＩＳ【雷電】の後継機、【雷電弐型】のカスタムタイプ。

防御生存性を追求した【雷電】の構想を踏まえた、高い防御力と生存性を持つＩＳである。

高い身体能力を持つ辰美に合わせてギリギリのチューニングが施されており、重量級のＩＳでありながら、その運動性は高い。

頭部はラインアイタイプのバイザー型ハイパーセンサーを採用しており、パイロットの顔は口周りくらいしか見えない。

ＩＳスーツに包まれた肢体は、スキンアーマーと肩部、下腕部、背部、腰部、臀部、大腿部、脚部をプロテクタータイプのＩＳアーマーに覆われており、ＩＳスーツも特注の高い防護力を持つものを着用している。このＩＳスーツは、耐熱耐電耐圧耐衝撃能力に優れ、耐弾性も高く、防刃効果もある。

これらはシールドバリア突破時の物理ダメージ、肉体ダメージを最小限に抑え、絶対防御の発動率を低下させており、パイロットの生存性、ひいては機体のダメージコントロール能力に貢献している。

この上に各部ＩＳアーマーが展開され、装着される。

通常ＩＳアーマーは、ショルダーアーマー、アームアーマー、チ

エストアーマー、レッグアーマーで構成され、これらは割合と細身のもので構成されている。
ショルダーアーマーはプロテクターを覆うように装着される丸みのあるユニットで、小型スタビライザーとスラスターを備える。アームアーマーはすっきりとしたスマートなもので、あまり大きくはない。
チェストアーマーは腰の両サイドからお尻が半分隠れるような曲面を備えたウイングスラスターになっており、レッグアーマーもすっきりした形状でふくらはぎにガスジェットブースターを備える。
胸部から腹部にかけてはスキンアーマー、プロテクター、ＩＳアーマーのどれも配置されていないが、これは非固定浮遊装甲（アンロックアーマー）が集中配備されているためだ。
これに、両肩部外側に非固定浮遊部位（アンロックユニット）の大型でボックス状のユニットが装備される。このユニットには展開式高出力レーザー発振器と戦闘用大型サブアームが一つずつ装備されており、遠距離戦、近距離戦で猛威を奮う。
バックユニットスラスターは小型で推力はあまり高くないが、この部位から臀部を経由し、大腿部と脚部外側にエクソスケルトン（外骨格）タイプの強化ユニットが配されており、特に脚部外側のブースターユニットは高い加速性能を持つ。
エクソスケルトン足底部には、クローラーユニットが備えられ、ＩＳとしては非常に珍しい、‘接地’しての走行も得意である。
これに、非固定浮遊装甲（アンロックアーマー）が胸部、腹部、腰部、両脚部、臀部、両外腕（サブアーム）部に配されている。
外観としては、直方体を組み合わせたような、角張ったデザインで、通常のＩＳより二回りほど大きく、近接時には相当な威圧感がある。また、アンロックアーマーがあるため、全身装甲に近いフォルムになっている。
特徴的なのは、その大きな外腕とパイロット自身の腕である内腕で、四本の腕がある。

装甲は蒼色に、白いライン。部分的には濃紺も配されている。

各種武装および特殊装備。

固定兵装

・展開式高出力レーザー発振ユニット【豪雷】×２

肩部アンロックユニットに装備されている、展開型のレーザー発振器。パラボラ状の発振器を展開し、レーザーを撃ち出す。‘高出力’の名の通り、高い出力を誇っており、防御型の通常ＩＳでも一撃でシールドバリアを半分はもっていける。

ただし、収束率の問題で、発射までに０．７秒かかることと、次弾エネルギーチャージに４．８秒かかるという致命的な欠点があり、高機動兵器であるＩＳに命中させるのは至難の業である。

・大型戦闘用サブアームユニット【豪砕】×２

肩部アンロックユニットから伸びる戦闘用の大型サブアーム。イメージインターフェイスによってコントロールするため、パイロットの腕とは別々に操作でき、精密作業も可能。主に殴るために造られているため、マニュピレーター自体がかなり頑丈である。

下腕部外側は防御用の特殊装甲になっており、楯のように使用できる。内側には武装ポッド格納できるようになっており、チェーンガンやグレネードポッド、マイクロミサイルパックなどを用途に応じて格納できる。

また、【豪砕】で保持して使用する兵装もある。

格納兵装

・南賀重工製多目的弾頭型バズーカランチャー【爆鋼】
サブアームでも使用可能な大型バズーカランチャー。バズーカといいながら、弾頭は誘導式のものもあり、様々な弾種の撃ち分けが可能。弾頭は火薬式ではなく、プラズマエネルギーを充填したエネルギー弾頭で、着弾と同時に圧縮プラズマを解放する。他にも徹甲爆裂弾や多弾頭弾、通常作薬弾、高速弾、高機動弾などがあり、弾体は砲身奥で量子変換生成する。

・南賀重工製白兵用大型戦斧【金剛斧】
人工ダイヤモンドの刃を備えた、全長三メートルの大型戦斧。刃意外は一体成形で造られており、かなり頑丈。サブアームで使用する。

・南賀重工製攻勢防楯【尖角】
直径一メートルほどの円形楯で、三本の棘が特徴的。ふつうの物理シールドで、殴ることにも使用できる。

・南賀重工製短機関銃【天嵐】
１５．２ｍｍ短機関‘銃’。いわゆるＳＭＧだが、口径は１５．２ｍｍと機関‘砲’レベルの兵装。弾幕を張るための制圧火器で、連射力と威力のバランスが良い

・南賀重工製白兵戦用レーザーブレード【瞬光】
白兵戦用のレーザーブレードだが、インパクトの瞬間、０．０７秒のみ高出力のレーザー刃を形成する。瞬時にしかエネルギーを消費しないため、ほとんどエネルギーを喰わない。グリップには相手白兵兵装を受け止めるための物理刃も備わっており、ナイフ感覚でも使用可能。

・南賀重工製小型瑠弾投射装置【爆拳】

マイクログレネードを１０発詰め込んだ、ボックスタイプグレネードランチャー。そこそこの攻撃力のあるグレネードで、一発から十発まで任意に投射可能。

特殊装備

・南賀重工製熱衝撃光学転換装甲【蒼天】

【春雷】の機体装甲に採用されている特殊装甲。鱗のような形状で、機体表面を覆っている。攻撃を受けると、それを光に変換し、機体外へ放出する。従ってダメージを受けると蒼く輝く。

・南賀重工製非固定浮遊装甲【甲鱗】

機体に取り付けるのではなく、本体からわずかに浮いている状態で設置される。特殊装甲【蒼天】も配され、高い防御力を持つ。これも絶対防御を発動させない工夫で、絶対防御の圏外に取り付けられておりダメージコントロールに一役買っている。

角張った涙滴状の形をしており、十枚ほどの予備が量子変換されている。

・南賀重工製ＩＳ用外骨格システム

パワードスーツであるＩＳを補助、強化する目的で製作された強化ユニット。バックユニットと一体化しており、脚部及び腕部の補助、強化を行う。腕部ユニットは、普段バックユニット外側に折り畳んだ状態で待機させてあり、必要に応じて展開する。主にサブアームが失われた際の戦闘腕としての使用が主目的。脚部ユニットは脚力の強化を目的としており、通常のＩＳと比べても高い脚力を提供する。

基本浮遊しているのが普通なＩＳにはあまり意味がないように見えるが、次に挙げる特殊装備と組み合わせることで、効果を高める。

通常ＩＳのパッケージに当たる装備で、いくつか種類があるが、インストールと調整の簡略化を突き詰めており、パイロットが装備

を着脱するだけで変更が終了する。

・南賀重工製特殊無限軌道ユニット【天輪】

エクソスケルトン足底部に装備されているクローラーユニット。これ自体が特殊装備で、‘空間に爪を立てる’事が出来る。

これによって、地上のみならず、空中を滑走する事も可能となる。履帯に形成した空間スパイクはシールドバリアに影響を与えられるため、兵装としても使用可能。わりとバカにならないエネルギー消費が発生するため、使用には注意が必要。

辰美とは長い近い付き合いのあるコアを使用して建造されており、彼女との相性は良好。

第三世代機にアップデートした際にそれ以前に保持していたワンオフアビリティーを失っている。現在はファーストシフトを終えてからさして時間も経っておらず、辰美も慣熟中である。

この機体は、ほかの三人の機体でテストした装備をブラッシュアップ、統合することを目的に建造しており、最終的に、南賀重工の次期主力ＩＳの雛形として扱われることになっている。

朱羽南波専用ＩＳ

南賀重工製第三世代試作ＩＳ舞孔雀カスタム【舞孔雀・炎】

待機状態：ルビーをあしらった白い羽根のブローチ。

ＩＳスーツは黄色。

南賀重工の弱点とまで言われる飛行能力を追求した、可変型ＩＳ

【舞孔雀】のカスタムタイプ。変形後は高機動パッケージをインストールしたＩＳにも引けを取らない機動性と巡航性能を発揮し、超高速機動戦闘も行える。
ハイパーセンサーはサンイエローの額当てに両耳を守るイヤーカバーから三対の羽根のようなセンサーが伸びている。
額当ての下からグラスタイプのバイザーを降ろすことで超高感度ハイパーセンサーとしても使用が可能。
本機のＩＳスーツは、耐Ｇ性能を重視しており、７Ｇから１５Ｇまで対応可能。
スーツ上はスキンアーマーが主であり、籠手とブーツタイプのＩＳアーマーが両手両足を覆っている。背面と腰の両側に、簡易ガススラスターが設けられており、ＩＳアーマーやスラスターを展開していなくとも、短時間の飛行やホバリング移動も可能。
各部に展開されるＩＳアーマーは鋭角で、鋭い突起部などが多い。
ショルダーアーマーは前側に斜め上方へ伸びる突起があり、スラスターになっている。アームアーマーは両腕ともに無く、ＩＳスーツ上の籠手のみ。
胸部には胸の谷間を中心とした、大きく前へ突き出す形のブレストアーマーが装備され、内蔵兵装もある。
腰部前方には、前垂れのようなアーマーが有り、両腰には、スタビライザー兼用の小型ウイングスラスター。バックユニットの下側から斜め下方へと伸びるスタビライザーがそれぞれ配される。
大腿部前面と脚部は大型のＩＳレッグアーマーに覆われ、足底部にブースターがある。
背中のバックユニットは斜め上方へ伸びるタイプのボックス型バーニアスラスター。その両脇に武装格納機構付きのウイングスラスターが存在する。
この機体最大の特徴である変形機能は、イメージインターフェイスをトリガーとし、０．２秒で行われ、見ることはほぼ叶わないが、以下にプロセスを紹介する。

まず、腰部後方のスタビライザーが股の間を潜って前方へと回り、スライドした前面の前垂れとブレストアーマーとドッキングしてノーズを形成。レッグアーマーからパイロットの足を排出しつつ、両腰の小型ウイングスラスターを斜め下方へ立てながらレッグアーマー自体が折り畳まれ、左右へ展開する。

バックユニットはパイロットの背面より離れ、下側へ沈みつつ左右のウイングスラスターが真横に倒れて翼となる。

パイロットは、ノーズ両側に足をかけつつ前方へ投げ出す形で座っており、座席はバックユニットと、スタビライザーで形成される。

ちなみに機体上に立つことも可能で白兵兵装を使用することもできる。

飛行形態自体の操作はイメージインターフェイスで行うため、両手はフリー。従って手持ち火器を展開し射撃も可能。

外観は突起部が多く、大きな翼が特徴的。細身のパーツが多い割にはボリュームのある外観をしている。

機体色はワインレッドとクリムゾンレッドにホワイトのラインとイエローのワンポイント。

各種武装および特殊装備。

固定兵装

・南賀重工製弾殻形成型プラズマビームランチャー【緋炎】

ブレストアーマー内蔵兵装。圧縮プラズマを特殊エネルギー弾殻で覆ったエネルギー弾を撃ち出す兵器。弾殻は着弾時か、射出後約三秒で崩壊。半径二十メートルにも及ぶプラズマエネルギーを解放する。

直撃時のダメージはかなり大きいが、弾速が遅く、連射が効かない。また、装弾数も少なく使いどころに注意が必要。

・２０ｍｍ速射砲×２
背面ウイングスラスター上面に格納されている。わりとポピュラーな武器で各社で製作販売されている。

格納兵装

・南賀重工製短機関銃【天嵐】
【春雷】が用いるのと同じ短機関銃。

・南賀重工製攻勢エネルギー防楯【紅翼】
エネルギー系シールドだが、攻勢エネルギーによって相殺する防御方法を採っている。
また、これを収束して撃ち出すことも可能。

・倉持技研製対複合装甲用超振動薙刀【夢現】
倉持技研開発の傑作薙刀。

・南賀重工製多弾頭大型ミサイル【翔鶴】
全長２メートルの大型弾体に、計１６発のミサイルを内蔵した多弾頭ミサイル。格納容量の関係で二発しか装備していない。

・南賀重工製舞孔雀専用多機能兵装【朱凰】
用途に応じて白兵、射撃などを即座に切り替えるマルチロールウェポン。未完成。

特殊装備

・南賀重工製可変ＩＳアーマー【舞孔雀】
機体名にもなっている特殊装備で、ＩＳでは非常に珍しい変形機構を指す。概ね三角形の航空機へと変形し、高速機動に対応する。この機体自体のコントロールはイメージインターフェイスで行なう。変形のトリガーも同じで、変形は０．２秒で完了する。ちなみに、ハイパーセンサーのおかげで、機体下面側を‘視’ることができる。
また、限定的ではあるものの、舞孔雀単体を、ＢＴ兵器のように遠隔操作が可能。

南波とは長い付き合いのあるコアを使用して建造されており、彼女との相性は抜群。
第三世代機にアップデートした際に、ワンオフアビリティーは失っている。
空中戦と高機動戦闘を得意とする高機動ＩＳ。特に変形を駆使した独特の機動は、セオリーを無視する。
高機動射撃戦型で、防御力が低く、被弾が致命傷に直結しやすいため、一撃離脱を本分とする。

フラウディア＝尾崎＝ウェストロード専用ＩＳ
南賀重工製第三世代試作ＩＳ鋼牙壱式カスタム【ヴァイスティーガー】
待機状態：シルバーアンクレット
ＩＳスーツ：ホワイトシルバー

世界最小を目指した南賀重工製第三世代ＩＳ鋼牙のカスタム機。
ＩＳによくある大型のウイングスラスターや大型のアーマーなどを徹底的に廃し、ＩＳの機能を最小限の装備で発現させた機体。フラウの潜在能力を発揮するために調整されており、高い運動能力を持つ。
ハイパーセンサーは、頭をすっぽりと覆うフルフェイスにこじんまりとした獣耳のようなセンサーが付いている。
ＩＳスーツは、首もとから、手首足首までぴっちり覆うタイプで、装着者の筋電位、神経パルスなどを高い精度で読みとれるタイプ。
ＩＳアーマーは全体に曲面を多用した全身装甲（フルスキン）になっており、一分の隙もなくパイロットを覆っている。
全体にスマートかつスッキリしたスタイルである。
通常ＩＳにあるシールドやチェストアーマー、ウイングスラスターなどが一切廃されており、フルプレートメイルを着込んだ人間のようにしか見えず、このＩＳの異質さがわかる。
背中に二基、両腰に一基ずつと両ふくらはぎに一基ずつ、計六基の内蔵型小型スラスターがあり、この機体に十分な機動性を与えてくれる。
ＩＳとしての機能を最小限にしたことで、拡張領域（パススロット）やエネルギーゲインが大きい。それらの大半を、運動補助とシールドバリア出力に充てており、運動性能、瞬発力、シールドバリア強度、シールドバリア最大量が高い。
しかしながら、スラスター類やロケットブースターが無いため、空中戦における機動性能に難があり、問題視されている。

機体カラーは白地にタイガーストライプ。

各種武装および特殊装備。

固定兵装

・南賀重工製展開式クローブレード【白虎爪】×２
手の甲側とリスト側に折り畳まれたパーツが、手を囲むように展開し、甲側に二本、リスト側に一本の鈎爪状のビーム刃を形成する兵装。拳打に併せて展開し、命中部位に噛みつくように攻撃する。
展開のタイミングは、イメージインターフェイスをトリガーとしており、事前に展開しておいて刺突に用いたり、甲側、あるいはリスト側だけ展開して斬撃ということも可能。

・南賀重工製展開式大型クローブレード【牙折】×２
脚部に固定装備されるクローブレード。足首を中心に、くるぶしの両側に折り畳まれたパーツと踵からふくらはぎにかけてセットされたパーツが展開し、鈎爪状のビーム刃三本を構成する。
また、つま先にも上に向かってクローが装着されており、足底部側とスネ側の双方にクローブレードを展開可能。
展開のトリガーはイメージインターフェイスで行い、【白虎爪】のように一部だけ展開することも可能である。

格納兵装

・南賀重工製短機関銃【天嵐】
１５．２ｍｍのＩＳ用短機関銃。

・南賀重工製突撃銃【連山】
２０ｍｍアサルトカノン。人間でいうところの突撃銃。
制圧火力として優秀。

・南賀重工製多目的弾頭型バズーカランチャー【爆鋼】
様々な種類の弾頭を撃ち分け可能なバズーカ。

・南賀重工製ハンドガンシステム【烈火】
１５．２ｍｍハンドカノン。装弾数１５発のハンドガンタイプの武器。取り回しが良く、精度も高い。セミオートで速射可能。

・南賀重工製高速振動短刀【鋭刃零式】
刃を高速振動させることで装甲を切断するナイフ。

・南賀重工製複合兵装システム【嵐山】
短機関銃【天嵐】をベースに、【鋭刃零式】、マイクログレネード、火炎放射器をひとまとめにした武装システム。モードセレクトはマニュアルとイメージインターフェイスの双方で可能。取り扱いは難しいが、武装展開し直す必要がないのが大きな利点。

特殊装備

・南賀重工製空間作用式滑走システム【天之道】
足底部に装備されたライドローラーユニット。その装輪に空間スパイクを形成して空中を滑走するシステム。
空間スパイクは、空間そのものに爪を立てることが可能となるエネルギーフィールドタイプの装備である。これにより、ＰＩＣに頼ること無く空中に立つ事が可能となり、それを足場として、滑走、跳躍、ブレーキングが可能となる。
空間スパイクのトリガーはイメージインターフェイスによって行われる。
フィールドに作用することから、ほかのエネルギーフィールドに爪を立てることが可能で、シールドバリアにも影響がある。

また、空間スパイクが作用している空間には歪みが生じるため、攻撃の軌道を逸らすことも可能であり、フラウは積極的にそれを使うため、攻撃を蹴り払ったりする事が多い（攻撃を蹴った瞬間だけ空間スパイクを使用する。タイミングはほとんどフラウの直感で、彼女が天才である所以だ）。

ほかには加速中に急停止する事も可能となり、様々な応用を効かせることが可能である。

・南賀重工製高密度エネルギー防壁【翡翠甲】

性質を変更させたシールドバリア。エネルギーを反射する特性を持ち、エネルギー兵器を反射無効化する。これによってシールドバリアを貫通される事は少なくなる。ただし、高出力のエネルギー兵器には効果が薄く、威力を半減させるのがやっとである。

また、エネルギー消費が激しく、使いどころが難しい。

フラウと長い付き合いのあるＩＳコアを使用しているため、彼女との相性は抜群。

機体を第三世代にアップデートした際に、それまでに獲得していたワンオフアビリティーを失っている。

高機動白兵型の陸戦ＩＳで、空戦能力に難がある。空間スパイクを利用することで空中機動力は高まったものの、空戦能力に優れるＩＳには見劣りしてしまう。

また、射撃戦機能が低く、照準精度も低いため、狙撃、あるいはそれに類する射撃戦を苦手としている。

小型ながらもシールドバリアが優秀で、運動性能が高いため、意外にタフである。

また、全体にエネルギーの消費量が押さえられており、継戦能力も高いのが特徴である。

北丘武瑠専用ＩＳ

南賀重工製第三世代試作ＩＳ轟震カスタム【玄甲】

待機状態：黒いオープンフィンガーグローブ

ＩＳスーツはダークグリーン

南賀重工製第二世代ＩＳ【激震】の後継機、第三世代ＩＳ【豪震】のカスタムタイプ。

そのコンセプトは、【雷電】と同じく、防御生存性に優れた機体であり、【雷電】より安価であった【激震】と同じく、【豪震】も安価であることが求められている。

これのカスタムタイプである【玄甲】も【豪震】とのパーツ共有率が７０％にも達しており、修復が容易となっている。

ＩＳスーツはスタンダードタイプであり、取り立てて特性も特徴も無い。

ハイパーセンサーはカチューシャ状で、目立つパーツは無い。

各部ＩＳアーマーはモノコックの防御耐久性に優れており、追加装甲と対エネルギー兵器コーティングが施され、絶対防御の発動率を抑えている。

両肩のＩＳアーマーは、大型で直方体の非固定浮遊部位（アンロックユニット）となっており、物理シールド、エネルギーシールド、ミラーディフレクターの三種の防御システムを備え、このＩＳに鉄壁の防御力を与えてくれる。

右腕ＩＳアーマーは、【豪震】特有の大型ユニットで、耐久性とパワーアシスト機能を重視しており、無骨な印象を受ける。そのマニュピレーターも格闘戦での殴り合い向けに造られており、五指もクローになっていて、手持ち武器を固定する懸架台にしかならない。

しかしながら、左腕ＩＳアーマーはすっきりとした細身のもので、マニュピレーターも精密作業可能なものが備えられている。こちらの手には、大型楯【重甲鱗】を持つこととなる。
胸部はスキンアーマーのみだが、腹部から腰部にかけてミサイルの誘導システムに干渉するアンチミサイルジャマーを装備。
バックユニットも非固定浮遊部位になっており、スラスターと粒子加速砲【豪破】二門を備える。
腰部側方にはスタビライザー兼用のバインダースラスター（安定翼と防楯を合わせたものにスラスターが付いている）が装備されている。
脚部ＩＳアーマーは大型のボックス状で片側に三つのスラスターを備えている。この部位にも肩部と同じ物理シールド、エネルギーシールド、ミラーディフレクターの、三重の防御システムが備えられ、【玄甲】の防御力をさらに高めている。

全体的な外観で言えば、黒い箱状のユニットに少女が埋め込まれているような形で、両肩、両足のボックス状ユニットが大きく目立つ。そして右手に大型の重火器、左手に大型楯【重甲鱗】を持つため、左右幅が通常ＩＳの１．５倍はある。そのため、かなりボリュームがあるように感じられる。
余計な飾り気などは一切無いため、イメージ的には観音開きに開いた箱のような印象となる。
機体のカラーは艶消しの黒地をベースにダークグリーンとグレイで塗装されている。

固定兵装

各種武装及び特殊装備。

・南賀重工製粒子加速砲【豪破】×２
【玄甲】のバックユニットに装備されている、短砲身の粒子加速砲。通常モード、収束モードと拡散モード、連射モードがある。
モードの切り替えは、イメージインターフェイスで行われる。
通常モードは射程十キロで、高威力の兵装であり、直撃すればシールドバリアを確実に貫通する攻撃力がある。
レーザーに比べると弾速が低い（約七割）ため、回避されやすいのと、発射までのラグが一秒近くあり、高機動の相手に当てるのは至難。また、速射も利かない（次弾チャージ１．８秒）
収束モードは威力、射程、精度が高く、射程は四十キロにもおよぶ。ダメージもかなり大きく、クリーンヒットすれば防御性能の低いＩＳならば一発でダウンさせることも不可能ではない。しかし、発射までのラグが２．４秒もあり、命中させるには高度な軌道予測が不可欠である。
また、発射後に冷却しなければならなくなる為、一度撃つと２０秒は【豪破】自体使用できなくなる。
拡散モードは、射程が五百メートルほどにまで下がるが、直径百メートルほどの空間に、ビーム弾をばらまくため、命中率は高い。一発あたりのダメージは通常モードの八分の一程度だが、命中率でいえばこれが一番である。ラグは０．８秒ほどで、次弾チャージは１．２秒とまずまず。
連射モードはビーム弾を連射することが可能でラグは０．０８秒、次弾チャージ０．３２秒と、トータル０．４秒で次弾を射出できる（６０秒で１５０発のビーム弾を射出可能）。無論弾体は小さく、ダメージも通常モードの十分の一程度。射程も一キロ程度となり、精度も低くなる。また、連続して６０秒使用すると熱が溜まりすぎて使用できなくなる。
総じて言えば使い勝手の悪い試作品である。

・南賀重工製近接戦闘腕
【豪震】が両腕に備えているものを、右腕のみ装備している。この腕部は殴り合いを前提として作られており、その強度は通常ＩＳの２．７３倍にもおよび、パワーアシストも通常ＩＳの３．５７倍となっている。マニュピレーターは、精密作業には向かない、太い爪状になっており、細やかな操作はできない。かろうじてグリップを握らせることは可能で、武装懸架台程度の役割は果たせる。

格納兵装

・南賀重工製３０ｍｍガトリングキャノン【呑龍】
口径３０ｍｍの砲身を七門束ねた、大型ガトリング砲。一分間に二千発を越える３０ｍｍ近接反応信管付き徹甲爆裂焼夷弾を撃ち出す事が可能で、その制圧火力は圧巻の一言である。

・南賀重工製多弾頭ミサイル【ホオズキ】
発射後、少ししてから四発のミサイルを吐き出す多弾頭ミサイル。分裂前は装甲カバーに覆われていて、撃墜されにくい。武装展開（コール）した時点で機体の真横に量子生成され、そのまま撃ち出される。

・南賀重工製ハンドリニアミサイルシステム【槍雨】
直径１５ｍｍほどの細身のミサイルを速射する武器。推進剤が少なく、その分を炸薬に当てているため威力は十分。特筆すべきはその発射方法で、リニアコイルによって加速射出し初速を得る。その後自立誘導しながら少ない推進剤で姿勢制御して相手を追尾する。ジャミングに弱い兵器ではあるが、ミサイルを速射できるのは大きな利点である。

・南賀重工製ハンドインパクトキャノン【睡蓮】

砲身内部に圧力をかけて弾丸を射出する大砲。射程は一キロほどだが、炸薬量が多く、高いダメージが期待できる。弾速の遅さが欠点。

特殊装備

・南賀重工製三重防楯システム【八重垣】
両肩と両脚部に搭載されたシールドシステム。使用のトリガーはイメージインターフェイスで行う。外側から順にミラーディフレクター、エネルギーシールド、物理シールドの順に重ねて展開できる。エネルギーシールド、物理シールドは通常のものと同じである。無論物理シールドには対エネルギーコーティングが施され、破壊されにくくなっている。
ミラーディフレクターとは、銀色の皮膜状の防御フィールドであり、主に光学兵器を反射拡散散乱させて防ぐ効果を持つ。
特に、レーザーを中心とした純光学兵器に効果が高く。その威力を九割軽減する。そのた粒子加速砲などのエネルギー火器も五割ほど軽減可能である。
逆に実体弾には全く効果を現さない辺り用途は限られるもののエネルギー兵器主体の機体で突破するのは不可能に近い。
このフィールド、展開中は外から中は視認することができず、相手の様子が分かりにくくなる。しかしながら、内側からはマジックミラーのごとく外を見ることができる。
ミラーディフレクターは、空気中の水分に電荷を掛け、空間圧作用によって生成される。
そのため、衝撃に弱く、湿度の低い地域では使いづらいと言う欠点を持っている。
・大沢エレクトロニクス製アンチミサイルジャマーシステム

南賀重工は、こうした電子戦兵装のノウハウが無く、別企業の大沢エレクトロニクスとの提携でなんとかしている状況。
こちらをロックオンしているミサイルにジャミングを仕掛け、誘導を阻害する。このシステムの搭載により、自律誘導するミサイルの驚異は小さい。

・南賀重工製特殊防楯システム【重甲鱗】
【玄甲】が左手に備える大型楯。
楯の表面は、黒い鱗状の防御ユニットを何重にも重ねた積層装甲となっており、防御ユニット一枚一枚がエネルギーを吸収反射し、自壊するという使い捨ての装備となっており、予備も大量に量子変換され格納している。
さらに、大型のフィールド発生システムを内蔵しており、最大５０メートル四方のエネルギーシールドを展開可能で、その防御力で味方を守ることも可能。当然、範囲を広げれば広げるほどエネルギーの消費が激しい。フィールドは八分割されており、一部だけ展開、あるいはＯＦＦにする事も可能。これらのコントロールは、イメージインターフェイスによって行われる。

武瑠とは長い付き合いがあるＩＳコアを使用して建造されているため、彼女との相性は抜群である。
第三世代ＩＳにアップデートした際に、それまでに獲得していたワンオフアビリティーを失っている。
重装甲の前衛機体として建造された、第二世代ＩＳ【激震】の流れを汲む、第三世代ＩＳ【豪震】のカスタムモデル。元の機体とは異なる砲戦仕様となっており、中遠距離戦での砲戦に強い。特筆すべきは、その防御兵装で、生半可な攻撃ではびくともしない。
また、全体の７０％のパーツを、【豪震】のもので構成しており、

修理整備において、他のＩＳの追随を許さない。また、各パーツを安価なものでまかなっており、損傷時の修復も容易である。
機体の頑丈さと動作の確実性。保守整備の簡便さなど、量産型に必要な要素は揃っているものの、機動力が低い。空中機動性が低い。拡張領域（パススロット）が少ないといった欠点がある。

織斑一夏専用ＩＳ

倉持技研製第三世代ＩＳ【白式・虹】

待機状態は白いガントレット。右手用。

ＩＳスーツはダークブルー。

倉持技研が開発した第三世代ＩＳ。本来第二形態移行（セカンドシフト）から発現する可能性がある唯一能力（ワンオフアビリティー）を第一形態移行（ファーストシフト）から、確実に発現させようと研究開発されていた機体。そのため、すべての演算をそちらに回してしまい、拡張領域（パススロット）の全く無い機体となってしまった。
また、使用したコアの特性なのか、近接戦ブレードしか装備を受け付けず、射撃制御システムも構築されず、また、どうやっても起動しなかったことから半ば放置され、最終的に凍結処分を受けるはずだったのだが、篠ノ之束、皇見翔華のふたりに目を付けられ、起動可能となった。
肩部から胴体、腰回りまではスキンアーマーを中心とした西洋鎧のような意匠の装備となっている。ハイパーセンサーはヘッドギアタイプ。
両腕両脚は大きく、太めでマッシヴなＩＳアーマーとなっており、力強さを感じる。
機体の両肩部から肩胛骨にかけて、大型のウイングスラスターが

非固定浮遊部位（アンロックユニット）として浮遊している。このスラスターによる推力はかなり高く、速度に関してはトップレベルである。

そして、背面に立方体を半分に輪切りにしたような箱状のユニットが配され、その両脇に、小さな羽のついた四角柱が一対配置されている。

全体としてみれば、大きな翼と小さな翼を広げた白い騎士のような出で立ちになる。

配色は白を基調とし、末端部等をブルーで塗られている。

武装及び特殊装備

固定兵装

・近接ブレード【雪片弐型】

第一回モンドグロッソ世界大会優勝者、織斑千冬の乗機、【暮桜】に搭載されていた彼女の愛刀【雪片】、その後継となる武器である。単純な物理刀としてもトップレベルの兵装であり、ＩＳが振るうことで、究極のコストパフォーマンスを生み出す。刀身の長さは１．６メートルで、美しいまでの反りを持つ大太刀の形状をしている。

この刀身を展開することで、【雪片弐型】は高密度のエネルギーで構成された、光の刀身を生み出し、その真の姿を見せる。その攻撃力は、ＩＳ用白兵兵装としては破格であり、高い攻撃力を発揮する。

格納兵装

無し。

特殊装備

・マインドブースターＶｅｒ３．５６

【白式・虹】の背面に装備された、立方体を半分に輪切りにしたようなボックスユニットと、その両脇に配される、小さな翼のついた四角柱で構成されるシステム。パイロットの精神状態によって、機体の動作を最適化するシステム。パイロットの集中力が増すと、機体の追従性が上がっていく。

機体の動作をＩＳスーツを介すのではなく、イメージインターフェイスによって、ダイレクトにコントロールできるため‘肉体の反応より早く機体が反応するようになる’。ただし、肉体は完全に振り回されるため、ヘタをすれば大けがにつながる為、普段はリミッターがかかっている。

倉持技研に研究用に保管されていたＩＳコアを使用し、第一次形態移行〈ファーストシフト〉時から唯一仕様能力〈ワンオフアビリティー〉を、確実に獲得し、使用できるように建造されたＩＳ。当初からの無茶な要求仕様に、技研のスタッフが頭を抱えつつ開発した。

その為か、何をどうやっても起動せず、封印凍結される予定だった。

しかし、その話を聞きつけた篠ノ之束と皇見翔華が、密かに技研に接触。いじくり回した結果として起動可能になった。

そのため、どんな‘仕込み’がされているのか、技研のスタッフにすら分からなくなっている。

現在、倉持技研は日本最高の技術陣の威信に懸けて、【白式・虹】の後付け装備〈イコライザ〉を開発中である。

オリジナルＩＳ設定資料（後書き）

ごらんいただきありがとうございます♪
完全に資料集ですのでお話を期待されていた方には申し訳ない限りです。
こちらで公開した機体、装備、武装などの設定についてはレンタルフリーとさせていただきます。
使用の際はメッセージ、活報コメント、感想欄などでご一報下さい。

では。

第十六話（前書き）

第十六話、更新しました♪
いよいよ一夏対セシリア戦。
どんな結末を迎えるのか？

読んで下さるみなさんに楽しんでいただけましたら幸いです♪

第十六話

クラス代表決定トーナメント決勝　織斑一夏対セシリア＝オルコット。

それが決定して十五分のインターバルが入った。

先に試合を終わらせていた黒髪の少年、織斑一夏は、このインターバルと同じ時間で機体の補修をやってある。

一方、金髪のイギリス代表候補生、セシリア＝オルコットはこのインターバル中に補修をおこない決勝に臨まなければならず、休憩など到底望めない。

これがこの決勝でどう働くのかそれはわからない。だが、実際のＩＳトーナメント戦の基本的なスタイルであるため、文句の付けようもない。

そして、この補修に関しては双方の差が出た。

セシリアの【ブルーティアーズ】は、イギリス代表候補の専用機だけあり、補修材に困ることは無く、イギリス出身の二年、三年の整備科の人間の手により修復されていく。

一方で一夏の【白式・虹】は急遽搬入された機体だけあり、補修材がまるでそろっていなかった。それでも何とか形になったのは補修を担当してくれた小柄な金髪少女、フラウディア＝Ｏウエストロードと、長い黒髪をポニーテールにした一夏の幼なじみ、篠ノ之箒。そして、一年四組に所属する、水色髪に眼鏡の日本代表候補生、更識簪。

彼女たちの力と努力の結果と言えよう。

ともあれ、決勝を戦う二人の機体は、万全とは言い難いが、試合はスケジュール通りに進行していった。

アリーナ上空で、青い鎧をまとった金髪の少女は、対戦相手を待つ。連戦ではあるものの、集中力を切らさないという意味ではベターではある。
機体の方の修復率は九割。撃墜されてしまったＢＴ兵器も新しいもの取り付けられている。
態勢としては悪くはない。
と、ピットのカタパルトから吐き出された、大きな羽を広げた、白い鎧の少年が上昇してきた。
「待たせたな」
「さして待っておりませんわ」
「疲れてんのに、無理してんじゃないのか？」
「どうということはありません。この試合もすぐに終わるのですから、その後でゆっくりアフタヌーンティーを楽しむことにしますわ」
「……へぇ、そうかい」
空中で交わされる言葉も、すでに鍔迫り合いに入っているような様相だ。
そんな軽口をたたくように振る舞う一夏ではあったが、彼の【白式・虹】の実体装甲は余り修復されていない。【白式・虹】の補修パーツが足りなかったのだ。エネルギーは回復に回さなければならず、修復に回せない以上、補修パーツで交換するのがセオリーなのだが、それをできず、有り合わせのもので表面を取り繕っているにすぎない。
エネルギーの回復は完全に出来たため、シールドバリアも最大値まで回復しているが、実体ダメージを受けたらどうなるかわからない状態だ。
そんな状況でも、この場に立った以上、やらなければならない。
改めて、セシリアに力強い眼差しを向ける一夏。
それを受けて、彼女は小さく息を呑む。
幼い頃より彼女が見てきた男たちには、こんな目をしたものはい

なかった。
上流階級で人に会う機会の多いセシリアは、物心ついた頃から、卑屈で弱々しい目をした人間をよく見ていた。
特に男性。自らの父親を筆頭に、女々しく、媚びへつらう彼らに、彼女は激しい嫌悪を感じた。ＩＳが登場して以後、女尊男卑が浸透してからは、それが加速している。
だから、目の前の少年のような目は、初めて見るものだった。
それが彼女にさざ波をたてる。
「……小生意気な眼ですこと。男のくせに……」
「？……なんだ」
小さくつぶやいた声は、彼には届かない。
代わりに目に飛び込んできたのはＩＳからの警告だ。
“警戒、敵性ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認”
それを受けて一夏の目が細まる。
「では、早々にフィナーレと行きましょうか！」
彼女の声に応えるように、【白式・虹】が警告を発する。
“警告！　敵ＩＳ射撃体勢へ。トリガー確認、初弾エネルギー装填”
それと同時に、青い機体の持つ大型のレーザーライフルが光の矢を放つ。コンマ以下の速度で目標へ到達するそれはしかし、左肩をかすめるに留まった。
警告に反応した体がとっさに動いた結果だ。だが、それでも肩アーマーはあっけなく吹き飛ばされてしまった。
崩れた体勢をしっかり戻し、手にした【雪片弐型】をしっかり握る。
そんな一夏に向けてライフルを連射するセシリア。

「さあ踊りなさい！　わたくし、セシリア＝オルコットと【ブルーティアーズ】の奏でる円舞曲（ワルツ）で！」
輝く輝線が幾条にも降り注ぐ。それを右へスライドするように避わし、追尾する射線をロールして避けながら左へと抜ける一夏。
それを追うかのように光の槍が伸び、機体をかすめていく。
そして、【ブルーティアーズ】背面のフィンアーマーの一部が分離し、四機のＢＴ兵器として敵へ向かう。
それを見て表情を険しくする一夏。先んじて同室のサイドテール少女東野辰美がセシリアと戦った試合を見ていても、この兵器の凄さがわかる。
それぞれから放たれるレーザービームは、相手を正確に捉え、全周囲から光の槍を放つ。
右上から迫るそれを、体をひねって避け、その先に迫る光を無理矢理体を下降させて避わす。
その背後から迫る輝きを、下半身を上へ振り上げ、頭を下にしながらやり過ごし、頭上から迫る一撃を上半身をねじって避けてみせる。
だかそこへ、さらなる光の槍が迫り、とっさに左手で受ける。
シールド残量を示す数値とバーが目減りし、装甲が融解する。
が、それを気にする暇も無く、次の光が一夏の足へ向かう。
それを足を振り回すように体を横回転させて避け、さらに迫る脅威を、機体を滑らせるようにＳ字を描くように避けて見せる。
それを見届けるように、青い猟犬達は主の元へ集まっていく。
それを見て接近しようとスラスターを噴かせる一夏。
そんな彼を迎えるのは、セシリアの構えた大型レーザーライフルの洗礼だ。
その射撃は正確無比。
一夏が移動しようとする先に光の線が走り、それを避けた先へと次弾が迫る。
その一撃を大きく上昇しながら避ける一夏。

すると、またもや四匹の猟犬が解き放たれる。
たちまち光の檻に閉じこめられてしまう白い獣。
迫る光の槍を交い潜り飛翔するが、猟犬どもの追撃は止まらない。
執拗に追い縋る青い猟犬を急降下で振り切る一夏。
それを見送るように、四機のＢＴは主人の元へ集まっていく。
そして、アリーナの大地にたどり着いた一夏に向けて降り注ぐ、光の雨。
その一つ一つが、必殺の意志がこもった、明確な脅威。
それを大地を滑るように移動しながら避けていく【白式】。大地がえぐれ、砂塵が舞う中を疾走する白。
そこへ向けて、再度ＢＴ達が出撃していく。
地表で包囲されるように狙われ急上昇する。そこを狙って青い涙滴が先端を光らせた。
その輝きが白い機体へ向かい、手にした剣の縞で弾かれる。
そのまま振り返り、振るった刃の銀閃が、一機の《ティアーズ》を両断。一拍の時を経て爆発する。
「！」
それを見たセシリアが目を見開いた。
「わかったぜ、こいつの秘密が！」
叫ぶように言いながら、流れるように飛翔する。
それに対してセシリアは左手を大きく振った。
まるで、配下に命を下すように。
呼応するように二基のＢＴ兵器が鋭く動く。
それを迎え撃つように飛んだ一夏の背中に虹色の輝きが生まれる。
そして、己がもっとも反応が遅れる場所へ鋭角に切り返し、目の前に躍り出てしまった青い猟犬の一匹を切り捨てる。
「こいつらは必ず俺の反応の遠い場所を狙ってくる！　そして……！」
再度素早く体を切り返し、鋭く飛翔する【白式】。
「おまえが命令を送らなきゃ動かないし、その間おまえはそれ以外

の攻撃が出来ない！　制御に意識を集中させてるからだ！　そうだろ？！」
言いながら一気に肉薄し切りかかる一夏。セシリアは、それをあわてて避けると距離を取るためにライフルを連射する。
それを避けながら飛ぶ“白”。
その左手がせわしなく動いた。

「ふえぇぇ……。すごいですねえ、織斑くん」
モニターを見ていた一年一組副担任の山田真耶が感嘆するようにつぶやく。
ＩＳは起動時間が命だ。
長く搭乗すればするほど総合力が伸びていく。一夏と対戦しているセシリアは代表候補生。どう少なく見積もっても三百時間以上は搭乗経験があるはずだ。
対して一夏は約一週間。特訓によって三十時間ほどにはなっているが、本来ならまるで届くはずのない差だ。
それが、セシリアに肉薄し、追いつめ始めているのだ。
素晴らしい健闘ぶりと言える。
だが、真耶の横に立つ一組担任にして一夏の姉である、織斑千冬は苦々しい顔になる。
「あの馬鹿者め。浮かれおって……」
その言葉に、真耶は不思議そうに千冬を見上げた。
「えっ？　どうしてわかるんです？」
真耶に聞かれた千冬がコンソールを操作すると、一夏の左手がズームされた。
「左手を閉じたり開いたりしているだろう。調子づいている時のあいつのクセだ。アレをやるときは、たいてい凡ミスをする」
「へぇぇぇ……。さすがにご姉弟ですねえ。そんな細かいことまで

おわかりになるなんて」
千冬の言葉に感心する真耶。
そう言われて千冬はハッとなる。
「ま、まあなんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
口元を隠すように左拳をあてた千冬がそうつぶやくと、真耶の表情が少し楽しげになった。
「あー、照れてます？　照れてますよねー？　って、いたたたたっっ？！？！」
面白そうに言う真耶の頭が、万力に挟まれた。
千冬がヘッドロックをかけたのだ。
「山田先生、私はからかわれるのが嫌いだ」
「わかりました！　すいませんっ！　ごめんなさぁいっ！！」
騒ぐ真耶の向こうのモニターで試合が大きく動いた。

鋭く飛ぶ一夏を狙って、青い猟犬が飛ぶ。
その間合いを侵略し、銀色の刃が猟犬を切り捨てる。
そのまま回転するようにスライドし、繰り出した回し蹴りで最後の猟犬を蹴り飛ばした。
そのＢＴ兵器が火花を散らしながら吹き飛んでいき、爆散するのを尻目に、【雪片弐型】を横薙ぎに振る。
その刹那、一夏の首の後ろに、熱い感覚が走った。
「！？」
「……かかりましたわ」
笑みを浮かべたセシリアの腰アーマーが両脇に回り込むようにスライドし、その砲口を“白”へ向ける。
放たれたのは『弾道型（ミサイル）』だ。

閃光と轟音が広がった。
爆炎に包まれる“白”。その煙からはじき出されるように放り出され、大地に激突する。
それを眺めながら、セシリアはつまらなそうに、失望したようにつぶやいた。
「これでおしまいですわね」

「一夏っ！！」
その爆発を見た瞬間、箒は思わず声を上げてしまった。
その隣で、簪も目を見開きながら両手で口元を覆う。
「……イチやん。これで終わりなんか……？」
モニターを見ながらつぶやくフラウ。
そこに、声がかかった。
「大丈夫」
言いながらピットに姿を現したのは、コゲ茶色の髪をサイドテールにした少女、東野辰美。
その後ろから、クセのある長いクリーム色の髪の少女、朱羽南波も顔をのぞかせた。
そして、そのまま箒のそばまで来た辰美は、彼女の肩に手をかける。
「一夏なら、きっと大丈夫」
そう言って笑う辰美。その顔に、不思議な安心感を感じてしまう箒。それは、とても懐かしい感覚。
「……ああ、そうだな。一夏なら……きっと……」
つぶやいて、モニターへと視線を転じる。そこでは、黒髪の少年が、ゆっくりと立ち上がるところだった。

その姿を見て、“青”をまとった金髪の少女は息を呑む。
「ま……まだやるつもりですのっ？！」
「当たり前だ。男がそう簡単に諦めてたまるか」
力強い眼差しとともに放たれた言葉に、セシリアの鼓動が跳ねる。
「で、ですが！　その様でなにが出来るというのです！　もう勝負は……」
「まだだっ！！」
一夏の強い言葉に、セシリアは口をつぐむ。
【白式】の白い機体から、装甲の破片をまき散らしながらもゆらりと立ち上がる一夏。
そんなボロボロの姿でありながらも、両の足はしっかり大地を踏みしめ、手は【雪片弐型】をしっかり握りしめている。
そしてその眼差し。
強い“意”をともなったそれは、セシリアの心をかき乱す。
その感覚を振り払おうとかぶりを振るセシリア。
「ならばっ！　明確にとどめを刺して閉幕（フィナーレ）とさせていただきますわっ！」
その声に従い、二基の弾道型ＢＴ兵器が【ブルーティアーズ】のスカートアーマーから離脱して飛翔する。
そのまま三発ずつのミサイルが、“白”へ向けて撃ち放たれた。
そのとき、一夏の背中から、爆発するように虹色の翼が延びる。
“《マインドブースター》起動。コア臨界点へ。同調率１００％。カウントダウン開始”

「うおおぉぉっっ！！」
大地を砕き、跳躍する【白式・虹】。
それは、まさに白き閃光。
多角形直線機動で白い輝線を残し、六基のミサイルが瞬時に切り裂かれる。
「なっ？！」
一瞬の出来事に驚きつつ、二基の弾道型ＢＴを飛ばす。
だが、それすらものともせずに切り伏せた一夏はセシリアに迫る。
“単一仕様能力（ワンオフアビリティー）〈零落白夜〉起動”

【雪片弐型】が展開し、光の刃が生まれる。
その輝きが、セシリアの目に写り込み、強い意志をみなぎらせた少年の顔が、網膜に焼き付く。
そして、振り抜かれた刃が、青い鎧を打ち砕き、少女の心に刻まれた。
「織斑……いち……か……」
つぶやきながら重力に引かれていく金髪の少女。エネルギーすべて失い、光の粒子となっていく【ブルーティアーズ】。
落ちていきながら敗北をかみしめるセシリア。
そのからだが、柔らかい羽毛のようにふわりと浮いた。
落ちゆくセシリアを一夏が抱き止めたのだ。
驚いて見上げたセシリアに、子供のように笑ってみせる一夏。
「へへ……勝ったぜ？」
それを聞いて目をつむるセシリア。
「……ええ、負けましたわ」
その口元には、心地良さそうな笑みが浮かんでいた。

第十六話（後書き）

第十六話、いかがでしたでしょうか？
うん撃墜しました（笑）
誰が誰をとは言いませんが（笑）
勝ってしまった一夏。これでクラス代表決定～♪
これでやっとセカンドが登場できるか？

次回もよろしくお願いします♪

第十七話（前書き）

第十七話、更新しました♪

今回は、本作の名物でもある彼女が大活躍♪
そしてオルコットさんが……。
オルコッ党の方々におこられませんよーに。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第十七話

金髪の少女を抱き上げた、大きな翼に白い鎧の少年が、大地に降り立つ。
少年、織斑一夏がそっと金髪の少女、セシリア＝オルコットを降ろすと、その身を覆っていた白い鎧は光の粒子となって消え去る。
少し高い位置にその身を現した一夏が軽い感じで着地をし、セシリアが笑顔で声をかけようと振り向くと、その脇をすり抜けるように何かが倒れ込んだ。
「え？」
表情を固くし、そちらを見やれば地に伏すのは織斑少年の姿。
「くぅっ、いっ、がっ」
「い、一夏さんっ？！」
脂汗を垂れ流し、苦しみもだえる彼の姿にあわててしゃがみ込んでその肩に手をやるセシリア。
と。
「うがあぁぁっ！！」
「ひっ？！」
一夏の上げた叫び声に思わず身をすくませるセシリア。そのまま周囲を見回し、声を張り上げる。
『だ、誰かっ！！　担架をっ！！　救命員も早くっ！！』
泣きそうになりながら声を張り上げる。
その異常な状況に、アリーナに詰めかけていた見学者達のざわめきも大きくなっていく。
そんな中、アリーナを一陣の風が吹き抜けた。
次の瞬間、セシリアの両脇からたおやかな腕が伸び、青いＩＳスーツの特殊生地に覆われた胸を鷲掴みにした。
「ひぁっ？！　な、なんですのっ？！　ア、アンっ？！　ンンッ？？」

続けてその柔らかい双丘が揉みしだかれていく。
やわやわと形を変える二つの膨らみに合わせて、セシリアのイケナイ声が辺りに響きわたった。
「……むう、白人女性にしてはボリュームに欠けるけど、この柔らかさは逸品ねぇ♪　あっ、さきっちょ発見」
そんな寸評がすぐ側から聞こえてきてギョッとなるが、新たな刺激にあられもない声を上げてしまうセシリア。
それでもなんとか声を振り絞る。
「こ、こんな破廉恥なこと……ンンッ……してる場合では……アゥンッ……い、一夏さんが……」
「む？　確かにそうね？　でももうちょっとだけ……」
そう言って、セシリアの背後に立つ白衣の女性が、軽く鼻血を垂らしながら、めがねの奥の瞳をピンク色のハートに輝かせる。
その頭に衝撃が走った。
『なあぁにをやっとるかあぁぁっっ！！！！』
「カペラッ？！」
そんな声とともに弾き飛ばされる女性。そのまま地面にたたきつけられた反動でさらに跳ね、向こうでもう一度地面に激突し、バウンドしてからアリーナの壁面に叩きつけられる。
「あ、あの変態めが……」
吐き捨てるようにつぶやいたのは白衣の女性の側頭部に見事な飛び蹴りをかましたタイトスカートの女性。
イケナイ刺激にあてられヘタリ込んでいたセシリアは、救世主を拝むような面もちで彼女を見上げた。
「お、織斑先生、い、一夏さんが……」
言いながら泣きそうになってしまうセシリア。
「大丈夫だオルコット。バカはそう簡単にはくたばらん。大丈夫だ……。早く治療室へっ！」
セシリアに答えながら、自分にも言い聞かせるようにつぶやく。
世界最強とまで言われる女傑、織斑千冬。その力を以てしても、

彼女の弟である一夏の苦しみを取り除いてやることは難しい。
それを感じてか、強く奥歯を噛みしめる千冬。

「いや、ここで治療しちゃうわよん♪」

不意に聞こえた声にハッとなり、そちらを見ると、千冬に蹴り飛ばされボロ雑巾になっていたはずの白衣の女性が、何事もなかったかのように彼女の隣に立っていた。
「……ふざけてる場合では……」
「……それに関してはゴメン。揉み心地良さそうな乳があったもんで、つい……」
真剣な顔で手をわにわにさせながらそうのたまう女性を怒鳴りつけようとした千冬は、彼女、皇見翔華の表情を見て口をつぐんだ。
このふざけた天災は、真面目に謝ったことなど一度として無い。ましてや、今のように軽く後悔をにじませるような顔など、付き合いが長いはずの千冬ですら見た事がなかった。
「……とにかく、軽く応急処置をしちゃうから待っていて」
そう言いながら踏み出した翔華を見送る千冬。
そのままひざまずき、一夏を抱き上げると、彼があげる雄叫びのような悲鳴を、

唇で塞いだ。

空間のすべてが白く染め上がり、千冬もセシリアも、アリーナに集っていた全員が目を点にして白く染まった。
数秒か、数十秒か、あるいは数分か。翔華の唇が、一夏の唇との

間に透明な吊り橋を作りつつ離れていく。
「ん♪　ごちそうさ……」
言い終わるより早く、彼女の頭に衝撃が走り、地球とフレンチキスする羽目になる。
「ぶっはっ？！　ひ、ヒドいよ？　ちふーっ！？　こんな最低な口直し初めてだよっ！！」
抗議しながら身を起こした翔華はしかし、総身に降り注ぐ本物の殺意に、全身の毛穴が開いた。
「……あ、あはは……、ち、ちふー？　これはほんとに治りょ……」
「……遺言はそれだけか？」
ゆらりとたたずむ千冬の手には、いつのまにやらＩＳ用の近接ブレードが握られていた。
「ま、まったまった！　ほんとのほんとよ！　あたしの体内にインプラントしているナノマシンを、唾液を通していっちゃんに……」
「……問答……無用！！」
「だあぁぁっっ！？」
一切の迷い無く振り降ろされた刃を、転がるように避わす翔華。
そこから追いかけっこが始まった。
『避わすなっ！！』
『避わすわよ！　死んじゃうでしょっ？！』
『ああ、死ね！　死んでしまえっ！　翔華（この変態め）！！』
『どんなルビよそれっ？！』
『やかましいわっ！　とっとと切られろっ！！』
『イヤよっ！　いっちゃんのチェリーと一番搾りを戴くまでは死ねないのよっ！！』
『死ねっ！！　死んでしまえっ！！』
大声で叫びながら命がけの追い駆けっこをする千冬と翔華。
「な……なんだったんですの？」
ぽつりとつぶやいたセシリアの一言が、アリーナにいた全員の気

持ちを代弁していた。

夕闇も迫らんとする赤い光の中、白い清潔そうなベッドの上で、彼は目覚めた。

「う？　こ、ここは？」

つぶやきながら首を動かしてみると、自分が寝ているベッドから、もう一人の顔がのぞいていることに気づく。

その顔をマジマジと見ていると、不意につり上がり気味の大きな目が開かれた。

「あ♪　いっくん起きたの？　昨晩は激しかったわね♪　おねーさん何度も気絶しちゃった♪　中にもたくさん注いでくれたし、きっと授かるわね♪」

などとのたまいながらその女性、皇見翔華が身を起こす。

その首筋から鎖骨、そしてその下の膨らみに続く柔らかい曲線美に感嘆することも無く、まるで金魚のように口をパクパクさせていた織斑少年は、あられもない悲鳴を上げた。

「ハッ？！」

あまりの衝撃に目を見開いた一夏は汗をびっちりかいたまま密かにつぶやく。

「あ、悪夢だ……」

清潔なベッドの上で、先ほどのことが夢であったことに対して、神様に感謝する一夏。

ふと、人の気配を感じて視線を横に転ずると、ベッドの横で椅子に腰掛けながら足を組み、真剣な顔で空中投影ディスプレイを眺めている翔華がいた。

「しょーかねーちゃん……」
思わず口をついた言葉に、翔華が反応する。
「ん？　いっちゃん起きた？　気分はどうかにゃあ？♪」
ホログラムのディスプレイを片手でポイっと捨てて、黒縁のメガネをかけながら一夏を見る。
「うんうん。大丈夫そうね♪　粉々になりかけてた骨も、破裂しかかっていた内蔵も、おねーさん特性ナノマシンと活性薬のおかげで元通り♪」
「……俺……どうなったんだ……？　たしか、セシリアとの試合に勝って……」
思いだそうと顔をしかめる一夏。
「試合はいっちゃんの勝ちよ。その後倒れたの」
「倒れた？」
「ええ、《マインドブースター》を全力稼働させたせいでね。次はそんなことが起きないよう、リミッターの再構築と、バージョンアップしてるところよ」
にっこり笑いながら告げる翔華に対して、一夏は呆気にとられた。
「って、《マインドブースター》のせいってどういう事だよ」
言いながら一夏は身を起こそうとするが、体は言うことを聞かなかった。
「こらこら、まだ無茶しちゃあダメよん♪　説明したげるから、おとなしく寝てなさい」
「あ、うん……」
優しく諭され思わずうなずく一夏。
「よろしい♪」
そんな一夏に柔らかく笑い掛ける翔華。この笑顔は滅多にお目にかかれない、千冬とは違う，お姉さん，の笑顔だ。
「さて、《マインドブースター》なんだけども、このシステムは、パイロットの精神状態を検知して機体のリミッターを解除し、制御していくシステムなのね」

そこで翔華が手を振ると投影ディスプレイが現れ、一夏の眼前に滑り込んでくる。
「この時、機体は筋電位や神経パルスを読みとりトレースするんじゃなくて、パイロットの脳波を読みとって機体を動かすの。つまり、完全な思考制御のためのシステムね。まあ、思った通りに機体が動くものだと思えば良いわ」
それを聞いて、一夏はなるほどとばかりに何度もうなずく。
「思考で動くとなれば、反応速度はダントツね。けれども代償は大きいのよ」
「代償？」
オウム返しに訊ねた一夏へ翔華は笑いながらうなずいてみせる。
「そう。そしてそれは、いっちゃんの肉体よ」
「俺の肉体？」
「さっきも言ったとおり、思考で動かせる機体はダントツで反応速度が高くなる。けれど体はそうはいかない。最大反応で動く機体に肉体は振り回され、深刻なダメージを受けるわ。それに《マインドブースター》は、機体のリミッターを一時的に解除するから、ＩＳが本来持っているポテンシャルを最大限に発揮できる。本当なら《絶対防御》が発動するはずなんだけど、どうも《零落白夜》が最大稼働すると、《絶対防御》のエネルギーすら使ってしまうみたいでね？　いっちゃんの体があっという間にぼろぼろになっちゃったのよ。機能の相性が悪すぎたみたい。いっちゃん守るために仕込んだシステムだったのにねえ。いやあ、おねーさんとしたことが、失敗失敗」
「……なあ、翔華ねーちゃん」
翔華の説明が終わって考え込んでいた一夏が、唐突に翔華へ声をかけた。
「ん？　なに？　いっちゃん♪」
それに応えて笑顔を向ける翔華。そんな彼女へ一夏は笑顔を向ける。

「《マインドブースター》、俺のために組み込んでくれたんだな」
その言葉に、翔華は苦笑い気味となりながら口を開いた。
「え？　えぇしっぽ……」
「ありがとな」
「え？」
己を皮肉り、自嘲しようとした翔華をさえぎり、一夏は礼を述べた。裏表のない笑顔とともに。
「しょーねーちゃんが俺を守るために組み込んでくれたシステムなんだ。感謝こそすれど、恨んだりなんてできやしないよ。ほんとにありがとう」
「……」
そんな一夏の言葉に、胸がいっぱいになってしまう翔華。
飄々とした彼女にしては珍しく、耳の先から鎖骨まで赤くなったのを感じ、あわてて一夏に背を向けながらしゃがみこんだ。
「なになになんなの？！　あんな風にさらっと言っちゃうなんて……翔華……、翔華……」
小刻みに肩をふるわせつぶやく彼女に、一夏は訝しげになる。
「？　どうしたんだ？　しょーねー……」
一夏が声をかけた瞬間。
「もうっ！！！　辛抱たまら～～～～んっ！！！！」
の叫びとともに目をぐるぐるにし、鼻血を吹きながら跳躍する翔華。その瞬間になぜか服の大半が脱げ、某怪盗の孫よろしく下着姿で一夏へ向けてダイブする翔華。
それをみた一夏の顔がひきつった瞬間。
黒い疾風が駆け抜け、暗転する。
無数の打撃音が響いてのち、光が戻ると、倒れ伏した翔華と、“天”一文字を背負いながら仁王立ちしている千冬の姿があった。
「……」
呆然とそれを見ることしかできない一夏。そんな彼をよそに、千冬は翔華の首根っこをひっ掴み、彼女の衣類を肩に担いでさっさと

出ていってしまう。
それを見送った一夏は、大きく息を吐いた。
「……寝よう」
言いながら彼は目を瞑った。

大量の湯気をあふれさせ、水が流れ落ちる音が響く。
数十本の細い水流をその身に浴び、長い金糸をすらりとした細い肢体にまとわせながら、少女はただ立ち尽くしていた。
「織斑……一夏……」
その名が、口をつく。
その度に、彼女の胸の奥が大きく跳ね、心地よい刺激を体の奥に残していく。
水流が、うなじをすり抜け、鎖骨を乗り越えていく。
そして、その下の二つの膨らみを覆うように流れ、桜色の先端を刺激する。
そのまま、ふもとに再び集まったそれが、程良い肉付きの白い平野を抜け、なだらかな丘を越えてささやかな茂みへと集まり、そのまま足下へ滴り落ちる。
「織斑……」

その頬が上気するのは、湯の熱さか。

「……いち……夏……」

それとも胸の奥の炎に焦がされてのものか。

その心地よい感覚に、両手で胸の真ん中を押さえる。

「……ハァ」

のどの奥が震え、尻たぶが跳ねると、背骨の付け根の辺りから何かが背筋を駆け上がった。

「……ンッ」

その目に焼き付いた、男の力強い眼差しに瞳がとろけ、彼女を抱き上げたたくましい腕の感触に肩が震える。

もう逃れられない。

否、

逃れたくない。

この貴族の少女は、もうどうしようもないほどに、あの少年の虜となっていた。

第十七話（後書き）

第十七話、いかがでしたでしょうか？
まさかの淑女（変態）にフラグがっ？！（爆）
いや、あれが平常運転です（笑）
そして、みんなが楽しみにしているであろうオルコットさんのシャワーシーンが、なんだか大変なことに？
このにじみ出る雰囲気は何だというんだっ？！（爆）
いかんサービスしすぎたか？（笑）
まあ、なんとかなるだろう……鈴とかどうしよう？
頑張れ私っ！

次回もよろしくお願いしますね♪

第十八話（前書き）

第十八話、更新しました♪
いよいよ２ｎｄなあの子が登……？
それではよろしくお願いします♪

第十八話

ＩＳ学園屋上。
学校によっては閉鎖されているそこも、この学園では生徒達に解放されている。
そこへの扉に、ほっそりとした手が掛かり、重そうなその鉄扉を静かに開け、癖のあるクリーム色の髪が揺れた。
そして広がる視界の先で、その金髪の毛先がくるくるとロールした少女が軽く顔を上げながら空を見ていた。
と、屋上に踏み入れた気配に気づき、彼女がこちらを見やる。
そして、そこに待ち受けていた人物の姿を認め、そちらへと向き直った。
「……お待ちしておりました。朱羽南波さん」
クリーム色の髪の少女、朱羽南波に、軽く会釈する金髪の少女、セシリア＝オルコット。
その姿に、南波が静かに口を開く。
「……何の御用でしょうか？　オルコットさん」
少し冷たい声に、セシリアは顔を上げる。
「はい、まずは……申し訳ありませんでした！」
謝罪の言葉とともに腰を折り曲げるセシリア。その姿に南波は目を丸くする。
オルコット家といえばイギリスの名門貴族だ。
数年前に当主が事故死し、まだ幼い娘であったセシリアが跡を継いだことは南波も耳にしていた。
当主ともなれば軽々しく頭を下げることなど出来はしない。
さらにプライドも高そうな彼女がこうして頭を垂れるなど想像の範疇外だった。
だからこそ、思わず訊ねてしまっていた。

「……どういった風の吹き回しですか？」
南波のそんな言葉に、セシリアは顔を上げるが、すぐに視線を外してしまった。
「……ええと、その、なんと言いましょうか……。彼に……一夏さんに負けてみて頭が冷えました。そして、考えてみたのです」
「……なにをでしょう？」
「……わたくしが始めてしまった一夏さんや朱羽さんとの口論ですわ。よくよく考えてみれば、他の国を貶めるようなことを言ったのはわたくしの方が先でした。いくら頭に血が上っていたとはいえ、あのように言われれば祖国に誇りを持たれているあなた方が怒るのは無理もないことでした」
うつむきながら話すセシリアの言葉に、南波はひたすら耳を傾ける。
「しかもわたくしは代表候補生。不用意な発言は、国際問題に発展しかねません。そこまで考えて、わたくしはなんと愚かなことをしたのかと思いました」
「……」
「……己に非があるなら謝罪せねばならないと考え、お二人に謝ろうと……」
そう話すセシリアの消沈した様子に南波は軽く瞑目する。
「……そのお話、彼、一夏さんにはこれから？」
そう南波に聞かれて顔を上げるセシリア。
「い、いえ、申し訳ありませんが、一夏さんには先にお話して謝罪させていただきました」
「……彼は……なんと？」
「……『謝ってくれたなら良い。自分も言い過ぎた。悪かった』と……」
一夏の言葉を反芻し、セシリアは頬に朱が走らせながら小さく笑みを浮かべた。
南波はセシリアが伝えた一夏の言葉を咀嚼し、軽く息を吐く。

「……そうですか。ならばわたしも頭を下げるべきでしょうね」
「え？」
南波の突然の言葉に、セシリアは弾かれたように彼女を見た。
するとそこには、丁寧に頭を垂れる南波の姿があった。
「や、やめてください？！　どうしてあなたが頭を下げる必要が……」
「成り行きとはいえ、わたしも煽ったようなものです。ならば同罪でしょう。そうそう、あとで一夏さんや辰美さんにも謝っておきませんと」
言いながら顔を上げた南波にセシリアが不思議そうな表情を浮かべた。
「東野さんにもですか？」
「ええ、辰美さんはわたし達のいさかいを止めようとして巻き込まれたようなもの。今回のことで一番ワリを食っているのも彼女ですわ」
南波に言われてセシリアはまた落ち込む様子を見せる。
「……た、確かにそうですわね。わたくしも謝りませんと……」
とほほと言わんばかりにうなだれるセシリア。それを見て南波が柔らかく笑う。
「なら、ご一緒しませんか？」
「え？　よ、よろしいのですか？」
南波に言われて顔を上げるセシリア。そんな彼女へ南波は笑顔を向けてうなずいた。
「ええ♪」
南波の返事にセシリアが顔をほころばせる。
そうして連れだって歩きだした二人は、一年一組の教室へと足を向けた。

「では、これよりＩＳの飛行操縦の基本を実践してもらうとしようか。織斑、オルコット、朱羽。試しに三人で飛んで見せろ」
あの日、三人で頭を下げあった日から時間も経ち、遅咲きの桜すら散ってしまった四月の下旬。今日も今日とて一夏達一年一組の面々は、鬼教官こと織斑千冬教諭の授業を受けている。
本日は実機訓練初日。
すでにＩＳに関わったことのある者ばかりではなく、実機に触れたことの無い生徒も少なくないため、まずは実物が動くところを間近で見るところから始まる。
整列した生徒達の中で一夏、セシリア、南波が返事をしてそのまま前に出て来る。
そして、意識を集中し、三つの光があふれて集束すると、白、青、赤の鎧をまとった三人が地上から十数センチ浮き上がった状態で浮かんでいた。
「よし、飛べ」
指示に従い、セシリアと南波は即座に行動に移る。
上昇する赤と青にワンテンポ遅れるようにしながら白い機体も飛翔する。
なんとか二人に追いついて一息つく一夏。
そんな彼を見て、セシリアと南波の二人が軽く微笑む。
「遅いですわよ？」
「レディーを待たせてはいけませんね？　一夏さん」
「悪いな、この空を飛ぶ感覚にまだ慣れなくってさ。どうも『自分の前方に角錐を展開するイメージ』ってのがわからなくって」
苦笑い気味にそう応じる一夏に、セシリアが速度をあわせる。
「一夏さん、イメージは所詮イメージでしかありません。ご自分でやりやすい方法を模索する方が建設的ですわよ？」
「そうですね、わたしなどは鳥になったつもりで飛んでおりますもの」
「そんなもんか？　南波は頭が柔らかいんだな。俺なんか何で浮い

てるのか気になっちまって」
セシリアと南波の話を聞いて、【白式・虹】の機体を見る一夏。
「説明しても構いませんが、長くなりますわよ？　反重力力翼や流動波干渉の話になりますもの」
「そうですねほかには重力力場形成と制御でしょうか？」
「……いや、いい。理解できそうにない」
セシリアと南波の口から飛び出した専門用語に、一夏の表情がげんなりとなる。
辰美達の協力で、なんとか授業に着いていっている一夏だが、やはり専門知識的なことになるとお手上げだ。
それでも努力している姿をセシリアも南波も好ましく思う。
「あら、残念ですわね。ふふっ♪」
「放課後の訓練に座学を増やすのも良いかもしれませんね♪」
あの日以来、セシリアと南波は特に仲良くなった。
二人で行動することも増えているらしい。
すでに消え去っている制度とはいえ華族という日本の貴族の系譜に生きている南波は、イギリス貴族のセシリアとはウマがあったようだ。
「そうですわね。けれど、わたくしとしては一夏さんと放課後二人きりて指導してさしあげたいところなんですが」
言いながら一夏に流し目を送るセシリア。対する一夏は柳に風だが、南波は少し辟易気味だ。
あの勝負以来、セシリアはわりと積極的に一夏へとアプローチしている。しかしながら一夏自身はピンとこないのか、あまり効果を上げていない。
南波はそういうときの愚痴に付き合わされてしまっていた。
おかげでセシリアの幼なじみだというメイドとも仲良くなってしまったほどだ。
だがしかし、そんなセシリアにあまり良い印象を持たない者もいる。

「一夏っ！　いつまでそんなところをうろうろしている気だ！　早く降りてこいっ！」
突然一般回線から怒鳴り声が響く。対して三人が地表に視線を転じれば、メガネに自己主張激しい胸部副担任の山田教諭が、一夏の幼なじみの武士娘、篠ノ之箒にインカムを奪われておたおたしていた。
「……こんな距離でもはっきり見えるもんだな」
「これでも機能制限が掛かっていますのよ？　一夏さん」
「ええ。本来ＩＳは宇宙空間での活動を想定して建造されてますからね。何万キロも離れた星の光で現在位置を測るわけですから、このくらいは造作もないですよ」
そんな風に話している間に、またもや回線から声が響く。
「よし、三人とも急降下急停止をやって見ろ。目標は地表から十センチだ」
「了解です。では一夏さん、南波さん、お先に」
言うが早いか急降下していくセシリア。豆粒より小さくなったその姿の周囲に砂煙が上がるのが見て取れる。
ついで南波がクリアーし、最後に一夏が勢い良く降下する。
そのまま近づいてくる地表を見据えて急制動。
そのまま停止する。
なんとかやれたと感じて顔を上げる一夏。
するとそこには眉一つ動かさない千冬と、苦笑い気味の山田教諭がいた。
「惜しかったですね？　あと五センチでした」
山田教諭の言葉に足元を見ると地表に足が着きそうだった。
「ま、精進しろ」
それだけ言ってきびすを返す千冬に一夏は肩を落とす。
と、その背後に声が掛けられた。
「まったく、だらしない。私が教えてやったろう」
そんな幼なじみの声に振り向くと、箒が腰に手を当てながら仁王

立ちで見上げてきた。
その自信たっぷりの様子に、一夏の口の端がわずかにひきつる。
「……今、失礼なことを考えただろう」
にらみ付けてきた箒から視線を外す一夏。
「全く。お前というやつは昔から……」
そんな風に箒の小言が始まろうとした時、それを遮るように一夏の前に影が現れた。
青い装甲が鮮やかな、セシリアの【ブルーティアーズ】だ。
「……篠ノ之さん、あのような擬音だらけの説明では伝わるものも伝わりませんわよ？」
「邪魔をしないでもらおう。これは一夏と私の問題だ」
ＩＳをまとっているセシリアに対しても全く臆することのない箒。
交錯する二人の視線が火花を散らした気がする。
そんな二人を一同遠巻きに見ることしか出来ない。
そんな二人の頭が鷲掴みにされる。
「……邪魔だ。馬鹿者ども。端っこでやっていろ」
そう言いながら二人を押し退けたのは千冬だ。
「よし、次は武装展開だ。織斑、やってみろ」
言われてハイと返事をする一夏。
そうして授業は続いていくのだった。

時同じく、一人の人影がＩＳ学園のゲート前にあった。
小柄な体躯に、ボストンバッグ。
風になびく艶やかな黒色の髪を、頭の左右高い位置で結んでいるその少女は、学園のゲートを見上げて不敵に笑う。
「ここに居るのね？　あいつが♪」
少し楽しげにつぶやき、一歩足を踏み出した。

「というわけでっ！　織斑くん、クラス代表就任おめでとう！」
『おめでとう～！』
三十人以上居る女子から、異口同音に祝福される一夏。
クラッカーの破裂する音がいくつも響き、紙テープがこの場の黒一点に降りかかる。
そして祝福されているはずの少年の顔は、どんより暗い。
夕食後の自由時間。寮の食堂に一組のメンバーの大半が集まっていた。それぞれ思い思いの飲み物を手に盛り上がる。
ふと、一夏は自分の後ろ、頭の上辺りに顔を巡らせた。
そこには、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と大きく書かれた横段幕が張られており、一夏は見たくないものを見たとばかりに顔を逸らした。
「……いつ作ったんだよ……」
ぽつりとつぶやき、肩を落とす一夏。そんな彼の肩に手が置かれた。
「まあ、せしりんに勝ったんやからあきらめや♪」
心底楽しそうにそうのたまうのは、小柄な金髪少女フラウディア＝尾崎＝ウエストロードだ。
「……人ごとだと思いやがって」
「当たり前や♪　人事やしな♪」
「ぐ……」
あっけらかんと言い放つフラウに、一夏は渋面を作る。
その様子に焦げ茶の髪をサイドテールにした少女、東野辰美が苦笑いを浮かべた。
「まあまあ、決まっちゃったものは仕方ないよ？　一夏。ボクもサポートするから……」
「……辰美は良い奴だなあ。それに比べて……」
言いながら左隣を見る一夏。そこには、この学園で再会した幼なじみの箒が座っていた。
「……なんだ？」

「い、いや何でもない……」
一夏の視線に気づいた彼女ににらまれ、思わずごまかす。
そんな一夏の様子に箒は眉を寄せて不満げになる。
「……ヘラヘラしおって」
つぶやく言葉は誰にも聞こえない。
そんな時、独特な喋りが聞こえてきた。
「おりむーおりむー♪　ちょっと良い～？」
袖丈のあわない制服を振り回した布仏本音ことのほほんさんだ。
「ほ、本音……引っ張らないで……」
その手に引っ張られているのは、水色の髪にメガネをかけた少女、更識簪。
その姿に一夏は顔をほころばせた。
「お？　久しぶりだな簪。弐式は順調か？」
「う、うん……機体はクラス対抗戦までになんとかなるかも……」
そう言ってはにかむ簪。代表決定戦の後、簪は本格的に専用機、【打鉄弐式】の組立に入っていた。
一人で無理をせず、つてを頼って二年、三年の整備科の先輩に頭を下げて協力してもらっていた。
おかげで【打鉄弐式】は急速に形になっていた。
その代わり、一夏の特訓に簪が顔を出さなくなり、数週間ぶりに顔を合わせたのだ。
「そっか、じゃあやっぱり武装が？」
「うん……。マルチロックオン・システムのプログラムがなかなか形にならなくて……でも、黛先輩が、武器開発やプログラミング専攻の人を捜してくれてて……」
まだ少し声は小さいが、以前よりはっきりと喋るようになった簪。クラスでも話せる相手が少しずつ増えているようだ。
と、気づいて居住まいを正す簪。
「あ……それから、クラス代表就任おめでとう。そ、その……私と一緒……だね……」

そうお祝いを述べながらはにかむ。
それを聞いて一夏もあっとなった。
「そっか、簪も四組のクラス代表になったんだっけ」
「う、うん」
少し照れくさそうにうつむきながらうなずく簪。
そこで、カシャリと電子音が響いた。
驚いて顔を上げた簪と、音のした方へ顔を向ける一夏。
するとそこには髪をアップにしてフレームレスのメガネをかけた女子がカメラを構えて立っていた。
「はろはろ〜♪　簪ちゃんに織斑くん」
「ま、黛先輩」
「あ、あははご無沙汰です先輩」
人好きする笑顔を向けてくる少女に簪が驚いた顔になり、一夏は軽く引き気味になった。
「久しぶりよね？　独占インタビュー受けてくれる気になった？」
ニコニコしながらそう言ってきたのはカメラの少女、黛薫子。二年整備科のエースと目される少女だ。ついでに言うと、すでに新聞部の部長まで務めており、そのフットワークの軽さで自ら特ダネを見つけだしてくる才媛だ。
一夏も何度か取材を申し込まれており、見知っていた。
「とりあえず、写真を一枚いいかな？　決勝で相対したセシリアちゃんとツーショットで」
薫子のその言葉に、セシリアの顔が大輪の花が開いたかのような笑顔となり、箒や簪をはじめとした女子の体がぴくりと震えた。
「じゃーこっちに二人で集まってー」
「は、はあ……」
「はい♪　わかりましたわ♪」
薫子にうながされて動き出す一夏と、もうスキップしそうなほど足取りが弾んだセシリアが並んで立つ。
「んじゃ、握手でも……」

して、と薫子が言い終わるより早く一夏の腕を取るセシリア。
その早業に一夏が驚き、女子達が一斉に注目する。
「お、おい……」
「良いではありませんか♪　女性をエスコートするならこれくらい普通ですわ」
「そ、そうなのか……？」
戸惑う一夏に笑みを向けるセシリア。そんな二人と周りの雰囲気に、ニヤリと音が聞こえそうなイイ笑みを浮かべる薫子。
「じゃあ撮るわよ～♪　いぃち、にぃの」
分かりやすくカウントをとる薫子。
「さん♪」
その声に、女子達の目が光った。

撮られた写真に、一夏を中心として女の子達が溢れんばかりにフレームインしていた。

第十八話（後書き）

第十八話、いかがでしたでしょうか？
２ｎｄな彼女、チラッとだけ登場でした。
本格登場は次回になります♪

それでは、次回もよろしくお願いしますね♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9118t/

IS 四神の少女達

2011年10月7日18時21分発行